宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第122集

虚空蔵免遺跡
赤石・天神本遺跡

Kokuzoumen Site
Akaishi·Tenjinmoto Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書27

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

赤石・天神本遺跡上空から北をのぞむ

虚空蔵免遺跡　出土遺物

赤石・天神本遺跡　出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成１１年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した虚空蔵免遺跡、赤石・天神本遺跡は、平成１５年度に調査を行い、後期旧石器時代の礫群やナイフ形石器、縄文時代草創期～早期における土器や剥片、縄文時代後・晩期～弥生時代における竪穴住居跡とそれに伴う遺物等多数確認することができました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成１８年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　宮　園　淳　一

例　　言

1　本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡川南町所在の虚空蔵免遺跡と赤石・天神本遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体になり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

　なお、日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。

3　現地での実測・写真撮影等の記録は、虚空蔵免遺跡については、倉薗靖浩、栗山正明、加藤学が行い、赤石・天神本遺跡については、島木良浩、興梠慶一、今塩屋毅行が行い、一部について発掘作業員が補助した。

4　整理作業は、遺物洗浄、注記、接合・実測及びトレースを宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、虚空蔵免遺跡は立神勇志、河野雅人、赤石・天神本遺跡は島木、興梠、今塩屋並びに藤木聡が行ったほか整理作業員が補助した。

5　現地での写真は倉薗・栗山・加藤・島木・興梠・今塩屋が、出土遺物写真は今塩屋、立神、島木、興梠が撮影した。

6　赤石・天神本遺跡の一部の石器実測を、株式会社アジア航測に委託した。

7　本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図をもとに、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の１０００分の１図をもとに作成した。

8　本書で使用した方位は磁北（Ｍ．Ｎ．）と座標北（Ｇ．Ｎ．）である。また、標高は海抜絶対高である。

9　土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

10　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

ＳＡ……竪穴住居　　ＳＣ……土坑　　ＳＩ……礫群・集石遺構　　ＳＰ……炉穴

11　本書の執筆は、第Ⅰ章を島木が担当し、虚空蔵免遺跡については立神・河野が、赤石・天神本遺跡については、第Ⅲ章第３節、第４節１・２、第５節を島木が行い、第Ⅲ章第１節、第２節、第４節４（３）を興梠が、第Ⅲ章第４節３、４（１）（２）（４）（５）を今塩屋が担当した。石器類の分類については、藤木聡の協力を得た。編集は島木が担当した。

12　出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

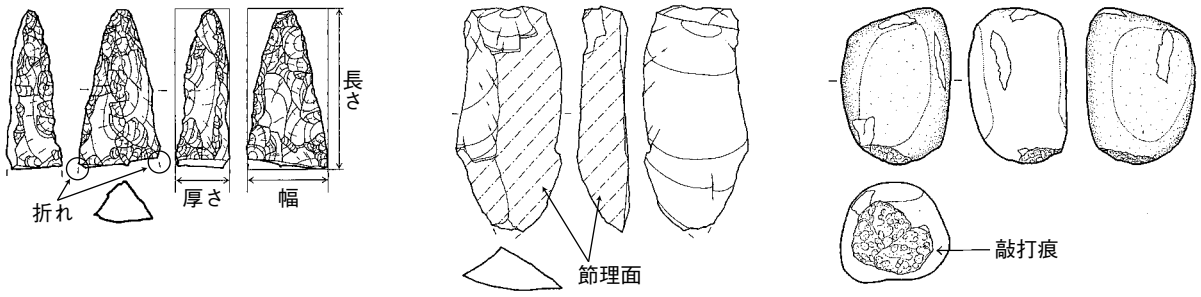
凡　　例

1　挿図の縮尺は次のとおりである。

遺構・遺物分布図……１／100、１／150、１／200、１／250　遺構実測図……１／20、１／40

遺物実測図……１／１、１／２、１／３、２／３　※以上を基本とするが、これ以外のものもある。

2　石器計測表の計測値及び実測図中の記号及び表示は、次のとおりである。



本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　地理的環境 …… 3
第４節　歴史的環境 …… 3
第Ⅱ章　虚空蔵免遺跡の調査
第１節　確認・発掘調査の概要 …… 5
第２節　整理作業及び報告書作成の方法 …… 5
第３節　層序 …… 5
第４節　旧石器時代～縄文時代早期の遺構 …… 7
第５節　旧石器時代～縄文時代早期の遺物 …… 7
第６節　まとめ …… 12
第Ⅲ章　赤石・天神本遺跡の調査
第１節　調査の方法と経過 …… 23
第２節　確認調査の概要 …… 24
第３節　基本層序 …… 28
第４節　調査の記録 …… 28
１　Ｂ区の調査（後期旧石器時代の遺構と遺物）
（１）概要 …… 28
（２）遺構（礫群） …… 28
（３）遺物 …… 31
（４）調査区内遺物 …… 35
（５）小結 …… 35
２　Ｇ区の調査（縄文時代草創期の遺物）
（１）概要 …… 36
（２）第Ⅰ文化層（Ⅴ層）の遺物 …… 36
（３）第Ⅱ文化層（Ⅳ層）の遺物 …… 40
（４）小結 …… 58
３　Ｋ区の調査（縄文時代草創期～早期の遺構）
（１）概要 …… 59
（２）遺構（陥し穴状遺構） …… 59
（３）小結 …… 60
４　Ｉ区の調査（縄文時代後・晩期～弥生時代の遺構と遺物）
（１）概要 …… 61
（２）縄文時代後・晩期の遺構と遺物 …… 61
（３）弥生時代の遺構と遺物 …… 71
（４）調査区内の遺物 …… 73
（５）小結 …… 73
第５節　まとめ …… 78

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図……2

第２図　遺跡地形図……4

～虚空蔵免遺跡～

第３図　土層断面図……5

第４図　トレンチ配置図……6

第５図　旧石器時代の遺構・遺物分布図……8

第６図　縄文時代の遺構・遺物分布図……9

第７図　集石遺構実測図（ＳＩ１）……10

第８図　礫群実測図（ＳＩ２）……10

第９図　礫群実測図（ＳＩ３）……10

第10図　炉穴実測図（ＳＰ１）……10

第11図　石器実測図（１）……13

第12図　石器実測図（２）……14

第13図　石器実測図（３）……15

第14図　土器実測図……16

～赤石・天神本遺跡～

第15図　周辺地形と調査区割図……25

第16図　トレンチ配置図（１）……26
及び確認調査出土遺物

第17図　トレンチ配置図（２）……27
及び確認調査出土遺物

第18図　Ｂ区遺構分布図……29

第19図　Ｂ区土層断面図……29

第20図　礫群（ＳＩ１）実測図（１）……30

第21図　礫群（ＳＩ２）実測図（２）……30

第22図　Ｂ区第Ⅰ文化層遺物実測図……31

第23図　Ｂ区第Ⅰ文化層遺物分布図……31

第24図　Ｂ区第Ⅱ文化層遺物分布図……32

第25図　Ｂ区第Ⅱ文化層遺物実測図……33

第26図　接合資料①実測図……34

第27図　接合資料②実測図……34

第28図　出土遺物実測図……35

第29図　Ｇ区第Ⅰ文化層遺物分布図……36

第30図　Ｇ区地形図……37

第31図　Ｇ区第Ⅰ文化層遺物実測図……39

第32図　Ｇ区第Ⅱ文化層土器分布図……41

第33図　土器実測図（１）……42

第34図　土器実測図（２）……43

第35図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物分布図……45

第36図　Ｇ区第Ⅱ文化層……46
石材別遺物分布図（黒曜石・流紋岩）

第37図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図（流紋岩）……46

第38図　Ｇ区第Ⅱ文化層……47
石材別遺物分布図（チャート）

第39図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図(チャート)(１)…47

第40図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図(チャート)(２)…48

第41図　Ｇ区第Ⅱ文化層……50
石材別遺物分布図（ホルンフェルス）

第42図　Ｇ区第Ⅱ文化層……51
遺物実測図（ホルンフェルス）（１）

第43図　Ｇ区第Ⅱ文化層……52
遺物実測図（ホルンフェルス）（２）

第44図　Ｇ区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図(頁岩)……54

第45図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図(頁岩)……54

第46図　接合資料③実測図……55

第47図　Ｇ区第Ⅱ文化層……56
石材別遺物分布図（礫石器）

第48図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図(礫石器)(１)……57

第49図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図(礫石器)(２)……58

第50図　Ｋ区陥し穴状遺構実測図……60

第51図　Ⅰ区縄文時代ＳＡ１・２実測図……62

第52図　Ⅰ区遺構分布図……63
第53図　Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物実測図(土器)(１)…66
第54図　Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物実測図(土器)(２)…67
第55図　Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物実測図(土器)(３)…68
第56図　Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物実測図(石器)(１)…68
第57図　Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物実測図(石器)(２)…70
第58図　Ⅰ区ＳＩ３実測図……71
第59図　Ⅰ区弥生時代ＳＡ３実測図……72
第60図　Ⅰ区ＳＡ３出土遺物実測図（土器）……72
第61図　Ⅰ区ＳＡ３出土遺物実測図（石器）……72
第62図　Ⅰ区調査区内出土遺物実測図（土器）……74
第63図　Ⅰ区調査区内出土遺物実測図（石器）……74

表　目　次

～虚空蔵免遺跡～

第１表　石器計測表……11
第２表　土器観察表……17

～赤石・天神本遺跡～

第３表　Ｂ区第Ⅰ文化層石器組成表……31
第４表　Ｂ区第Ⅱ文化層石器組成表……35
第５表　Ｂ区石器計測表……35
第６表　Ｇ区第Ⅰ文化層石器組成表……39
第７表　Ｇ区第Ⅰ文化層石器計測表……40
第８表　Ｇ区土器観察表……44
第９表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表（流紋岩）……47
第10表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表(チャート)(１)…48
第11表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表(チャート)(２)…49
第12表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表(チャート)(３)…50
第13表　Ｇ区第Ⅱ文化層……53
石器計測表（ホルンフェルス）
第14表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表（頁岩）……55
第15表　接合資料③計測表……56
第16表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表（礫石器）……58
第17表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器組成表……58
第18表　Ⅰ区土器観察表（１）……75
第19表　Ⅰ区土器観察表（２）……76
第20表　Ⅰ区石器計測表……77

巻頭図版目次

図版　１　赤石・天神本遺跡上空から北をのぞむ
図版　２　虚空蔵免遺跡出土遺物
赤石・天神本遺跡出土遺物

図版目次

～虚空蔵免遺跡～

図版　１　調査前遠景……19
調査区近景
調査風景
土層断面（１）
土層断面（２）
土層断面（３）
図版　２　ＳＩ１……20
ＳＩ２
ＳＩ３（南から）
ＳＩ３（西から）
ＳＰ１完掘状況
ＳＰ１断面
図版　３　石器（１）……21
土器（１）
石器（２）

土器（２）
石器（３）
土器（３）

～赤石・天神本遺跡～

図版　4　現地説明会の様子……23
図版　5　確認調査出土遺物……25
図版　6　ＳＡ２出土土器……77
図版　7　ＳＡ２出土線刻土器……77
図版　8　Ｂ区近景……79
Ｂ区礫群（ＳＩ２）検出状況
Ｇ区～Ｋ区全景（虚空蔵免遺跡から）
Ｋ区から虚空蔵免遺跡をのぞむ
Ｇ区全景（北東から）
Ｇ区隆帯文土器出土状況
Ｇ区から虚空蔵免遺跡をのぞむ
図版　9　Ｋ区陥し穴検出状況（１）……80
Ｋ区陥し穴検出状況（２）
陥し穴（ＳＣ１・２）半截状況
陥し穴（ＳＣ１・２）土層断面
陥し穴（ＳＣ１・２）完掘状況
Ｉ区集石遺構（ＳＩ３）検出状況
図版　10　Ｉ区近景……81
Ｉ区遺構分布状況（西から）
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）検出状況
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）土層状況
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）
竪穴住居跡（ＳＡ３）検出状況
竪穴住居跡（ＳＡ３）
図版　11　Ｂ区出土遺物（石器）……82
Ｇ区出土遺物（土器）
図版　12　Ｇ区出土遺物（チャート製石器）……83
Ｇ区出土遺物（ホルンフェルス製石器）
図版　13　Ｇ区出土遺物（流紋岩製石器）……84
Ｇ区出土遺物（凹石）
図版　14　Ｉ区出土遺物（土器）……85
Ｉ区出土遺物（土器）
図版　15　Ｉ区ＳＡ１・２出土遺物（石器）……86
Ｉ区ＳＡ３出土遺物（土器・石器）
図版　16　Ｉ区出土遺物（片口鉢・土師皿）……87
Ｉ区出土遺物（石器）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は、平成元年２月に基本計画がなされ、それに基づき、宮崎県教育委員会（以下県教委）では予想されるルート周辺の分布調査を行い多くの遺跡が確認されている。都農～西都間は、平成9年12月に施行命令が出され、その後、平成10年度に県教委が路線上の分布調査を行ったところ、計79カ所に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで、県教委では、遺跡の保護について協議した結果、平成11年度から日本道路公団の委託を受け東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。平成15年度は、同年4月1日付けで、同公団九州支社と宮崎県文化課（平成17年４月文化財課に改組）の間で契約が締結された。その後埋蔵文化財センターが平成15年11月10日より虚空蔵免遺跡の調査を、平成15年9月16日より赤石・天神本遺跡の調査をそれぞれ実施することになった。

○虚空蔵免遺跡

確認調査は、平成15年11月12日より着手し、調査対象面積は8,200㎡を測る。調査区中央部及び北側は、鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)下20㎝付近で礫層が表れた。南側斜面部においては旧石器時代～縄文時代の遺物包含層が確認された。その結果を受けて調査区南側を中心とする約900㎡が本調査対象区となった。調査は平成16年1月26日に終了した。

○赤石・天神本遺跡

確認調査は、平成15年9月16日より着手し、調査対象面積は45,500㎡を測る。広大な面積に及ぶため調査区を大きくＡ～Ｍ区に区分して確認調査を実施した結果、Ｂ区、Ｇ区、Ｋ区、Ｉ区の約3,160㎡が本調査対象区となった。調査は平成15年12月25日に終了した。

第２節　調査の組織

虚空蔵免遺跡、赤石・天神本遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　　米良　弘康　（平成15年度）
　　宮園　淳一　（平成16・17年度）
副所長兼総務課長
　　大薗　和博　（平成15・16年度）
副所長兼調査第二課長
　　岩永　哲夫　（平成15～17年度）
総務課長　宮越　尊　（平成17年度）
主幹兼総務係長
　　石川　恵史　（平成15～17年度）
調査第一課長
　　児玉　章則　（平成15年度）
　　髙山　富雄　（平成16・17年度）
調査第一課主幹兼調査第一係長
　　長津　宗重　（平成17年度）
同調査第一係長
　　谷口　武範　（平成15・16年度）
同主幹兼調査第二係長
　　長津　宗重　（平成15・16年度）
　　菅付　和樹　（平成17年度）

【虚空蔵免遺跡】

（調査担当）

調査第一課調査第一係
主査　　倉薗　靖浩　（平成15年度）
同調査第二係
主査　　栗山　正明　（平成15年度）
同調査第一係
主任主事　加藤　学　（平成15年度）

（報告書担当）

同調査第一係
主事　　立神　勇志　（平成17年度）

【赤石・天神本遺跡】

（調査・報告書担当）

同調査第二係
主査　　島木　良浩　（平成15～17年度）
同調査第一係
主任主事　興梠　慶一　（平成15～17年度）
同調査第二係
主事　　今塩屋　毅行（平成15～17年度）

1	銀座第１遺跡	2	銀座第２遺跡	**3**	**虚空蔵免遺跡**	**4**	**赤石・天神本遺跡**	5	天神本第２遺跡	6	大内原遺跡
7	中ノ迫第１遺跡	8	中ノ迫第２遺跡	9	中ノ迫第３遺跡	10	前ノ田村上第２遺跡	11	赤坂遺跡	12	湯牟田遺跡
13	藏座村遺跡	14	後牟田遺跡	15	霧島遺跡	16	白鬚遺跡	17	旭ヶ丘遺跡	18	番野地Ｃ遺跡
19	椎原遺跡	20	大久保遺跡	21	谷ノ口遺跡	22	住吉Ｂ遺跡	23	上ノ原遺跡	24	丸山西原遺跡
25	松ヶ迫遺跡	26	東平下遺跡	27	把言田遺跡	28	中ノ迫Ａ遺跡	29	野稲尾遺跡	30	川南古墳群

※1～12は東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査遺跡

第１図　周辺遺跡位置図（1／50,000）

第３節　地理的環境

虚空蔵免遺跡は、児湯郡川南町大字川南字鵜戸ノ本・赤石・天神本に、赤石・天神本遺跡は、児湯郡川南町大字川南字北原・鵜戸ノ本に所在する。両遺跡の立地する川南町は、宮崎県の中央部、日向灘に望み、尾鈴山（1,405ｍ）の南東にある。また、尾鈴山系から東流する名貫川の南岸域にあたり「川南」の由来ともなる。川南町の地形は、上面木山（1,040ｍ）を中心とする西部に広がる山地と中央部から東端の海岸にかけて段丘が展開する。

山地の地質は尾鈴山酸性岩類に代表される深成岩で構成される。段丘は川南原や国光原などの「原」が付される地名が示すように広い平坦面をもち、古くから人間の生産活動の場でもある。

段丘は緩やかな隆起扇状台地となり、名貫川や中須川、平田川による侵食崖や谷によって14の段丘面に区分される。代表的な段丘面として、町の中央部に川南原、平田川以北の唐瀬原と中須川以南の国光原、そしてその中間に位置する野田原が挙げられる。

虚空蔵免および赤石・天神本遺跡周辺は、川南町の北西部、尾鈴山塊の東麓に広がる丘陵と野田原段丘面との境に隣接する位置にある。さらに北は平田川、南は篠原川に挟まれた緩やかな丘陵地でもある。この丘陵地には平田川・篠原川の支流となる小開析谷が幾つも縦断していた。

第４節　歴史的環境

川南町の地形は、山地とその東麓から海岸に展開する平坦な段丘面の二つに区分され、各時代の遺跡は段丘上に多く分布する。

虚空蔵免および赤石・天神本遺跡周辺には北西部の山地に広がる赤石遺跡（縄文時代早期土器、下城式甕、勾玉、石庖丁、磨製石鏃出土）、南側に丸山西原遺跡（弥生時代後期竪穴住居跡11軒、円形周溝状遺構３基、方形周溝状遺構２基）と川南古墳群に指定される円墳２基、西側に天神本遺跡、大内原遺跡（弥生時代中期～古墳時代、中世）が位置する。

旧石器時代は、姶良丹沢火山灰層（AT）下位～霧島イワオコシの石器群を出土した遺跡として著名な後牟田遺跡が代表例として挙げられるが、発掘調査自体は少なく、多くは大野寅男氏による精力的な踏査による部分が大きい。近年の調査では、中ノ迫第１遺跡において敲石、ナイフ形石器、スクレイパー等の石器の出土とともに43基の礫群が検出されている。

縄文時代についても同様で、後牟田遺跡、霧島遺跡、上ノ原遺跡、藏座村遺跡、銀座１Ｂ・３Ａ遺跡等、縄文時代早期の遺構や遺物が確認される例に留まる。このように草創期～晩期について良好な遺跡は確認されていなかった。

しかし、近年の調査例では、縄文時代草創期の土器（隆帯文土器）が出土した赤石・天神本遺跡や前ノ田村上第２遺跡がある。縄文時代早期では集石遺構を40数基検出した尾花坂上遺跡や集石遺構を33基、炉穴も10数基検出した中ノ迫第３遺跡等がある。

また縄文時代後・晩期の竪穴住居跡が検出された赤石・天神本遺跡がある。このように確実に調査例が増えつつある。縄文時代の遺跡についても分布は山地及び山麓に形成される。

弥生時代の遺跡は、旧石器時代や縄文時代の遺跡と比して格段に多く充実した成果をもたらしている。弥生時代前期の発掘調査はないが、中期・後期～終末期の集落遺跡の調査は多い。中期の遺跡として藏座村遺跡と赤石・天神本遺跡の西側にある大内原遺跡が挙げられる。

藏座村遺跡では「中溝式土器」を出土する竪穴住居跡を２軒検出した。大内原遺跡では、篠原川岸に広がる氾濫原の洪水砂層中から下城式や逆Ｌ字口縁の甕口縁部が出土した。藏座村遺跡や大内原遺跡の調査例が示すように中期の集落は山麓（丘陵）縁辺部に位置すると考えられる。その他中期の遺跡として大内原遺跡の北側にある赤石遺跡、前原Ｂ遺跡、崩牟田遺跡がある。

赤坂遺跡では、円形周溝墓１基、周溝状遺構３基、竪穴住居跡24軒が検出されている。特に円形周溝墓については、県内でも検出例が少なく、これまで検出されたもののほとんどが低地に造られているのに対して丘陵頂部の平場を選んで造営しているという特徴的な立地が特筆される。

古墳時代の遺跡として国指定史跡として著名な川

南古墳群が代表される。古墳時代前期～後期まで営まれた古墳群である。横穴墓や地下式横穴墓が墓制として採用されていない地域でもある。

歴史時代の遺跡は、古代においては下垂門の奈良時代後半の蔵骨器を伴う火葬墓が挙げられる。韓家郷の一部にも比定されていることから、渡来人との関連を思わせる。

さらに、去飛（都農町）の駅と児湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代幹線道路の存在も推測される。

中世になると1578年の高城・耳川の戦いの大友軍の戦死者を弔うために島津方の武将山田新介が建立した宗麟原供養塔が著名である。近年の発掘調査、特に東九州自動車道関連の発掘調査では、銀座第１遺跡及び前ノ田村上第１遺跡で中世～近世の居館及び集村が検出された。数棟の掘立柱建物を方形の溝が囲繞するあり方は、出土遺物の多彩さ（国産陶磁器・輸入陶磁器、東播系須恵器など）とともに性格付けが検討課題である。

近世から現代にかけては大規模な開拓事業が進められた。特に第２次世界大戦前後には多くの入植者が移住した。川南町が「川南合衆国」と呼ばれる所以である。また、戦争遺跡として陸軍落下傘部隊の給水塔の存在も見逃すことはできない。

【引用参考文献】

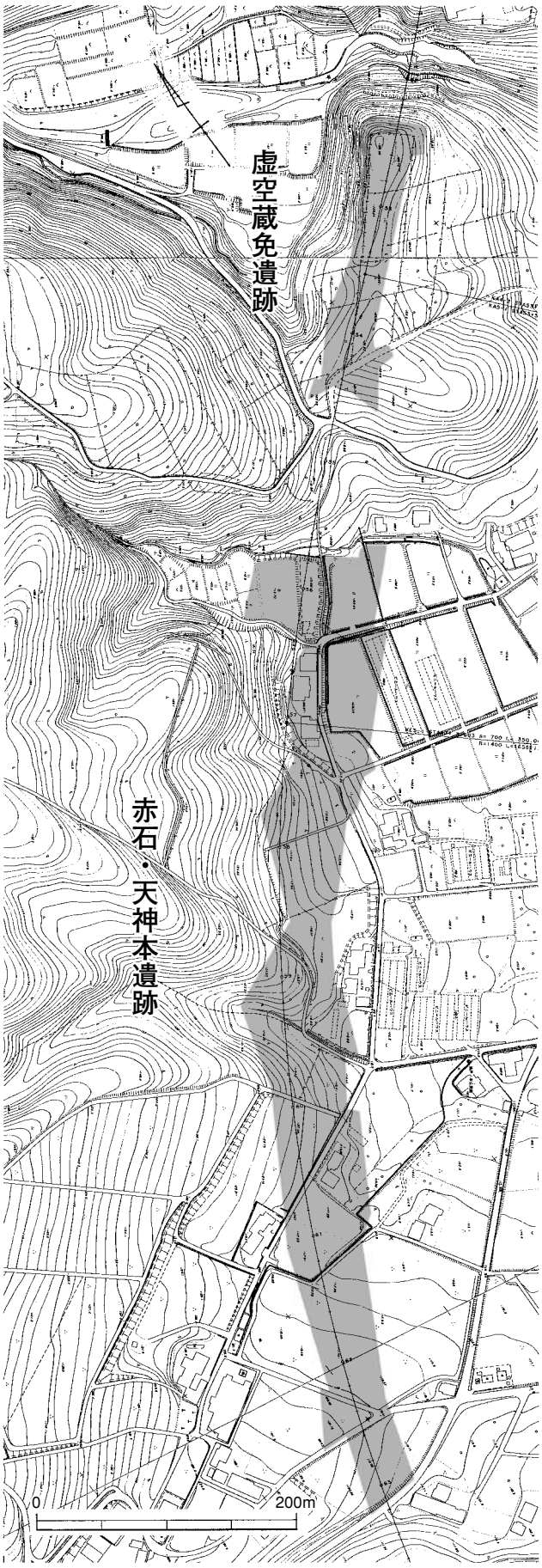
川南町教育委員会2002　「後牟田遺跡　宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究」　後牟田遺跡調査団

宮崎県埋蔵文化財センター2001　「藏座村遺跡」　『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　53集

鬼塚久美子1997　「宮崎平野の古代交通路に関する予察」『宮崎県史研究』第11号

川南町教育委員会1983　「川南町史」

川南町教育委員会1983　「川南町の埋蔵文化財　遺跡詳細分布調査報告書」



第２図　遺跡地形図（S＝1／5,000）

第Ⅱ章　虚空蔵免遺跡の調査

第１節　確認・発掘調査の概要

虚空蔵免遺跡は、標高約130mの台地上に立地する。対象面積は8,200㎡であり、８箇所のトレンチを設定し重機により表土を除去した（第４図）。その結果、ほとんどのトレンチにおいて表土直下で礫層が確認されたが南側の斜面部分の900㎡においてのみ遺物包含層の残存を確認し、本調査対象範囲とした。以下発掘調査の概要を述べる。

表土除去後に鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）上面で精査を行い遺構の有無を確認した後、２×２のトレンチを８箇所設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、Ⅴ層以下は部分的に堆積が確認され、霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む層・姶良Tn火山灰層（ＡＴ）はブロック状に認められるのみであった。よってⅣ層まで調査区全体を掘り下げ、以下を５×５ｍのトレンチを設定し出土状況に応じて拡張し、ほぼ調査区全体を掘り下げた。

第２節　整理作業及び報告書作成の方法

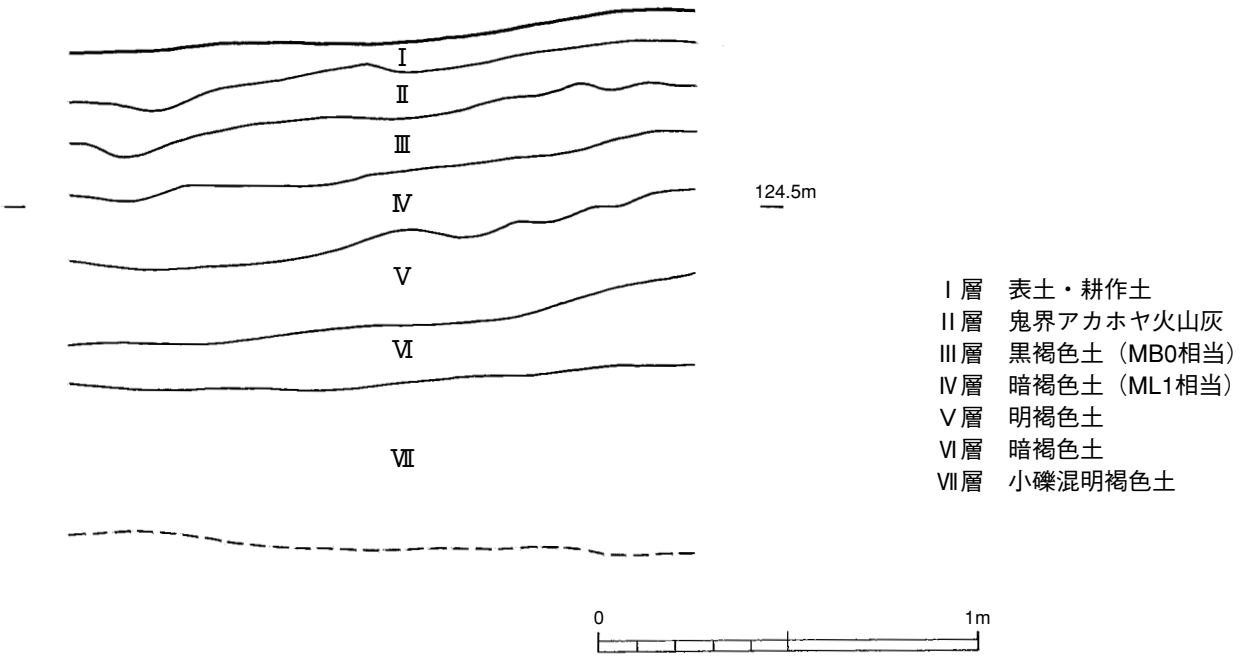
遺物分布図・遺構分布図や遺構の製図は、一部を残し平成15年度中に作成した。本格的な遺物の整理作業は平成16年５月より開始し、遺物の水洗・選別、土器・石器の注記・接合を行った。６月より土器の実測・拓本作業を行い、石器については７～９月に実測・トレースを行った。また、炉穴（ＳＰ１）埋土のフローテーションを行い炭化物を選別した。平成17年度には一部の遺物・遺構のトレースを行い、レイアウト及び本文の執筆や、遺物写真撮影を行った。

第３節　層序

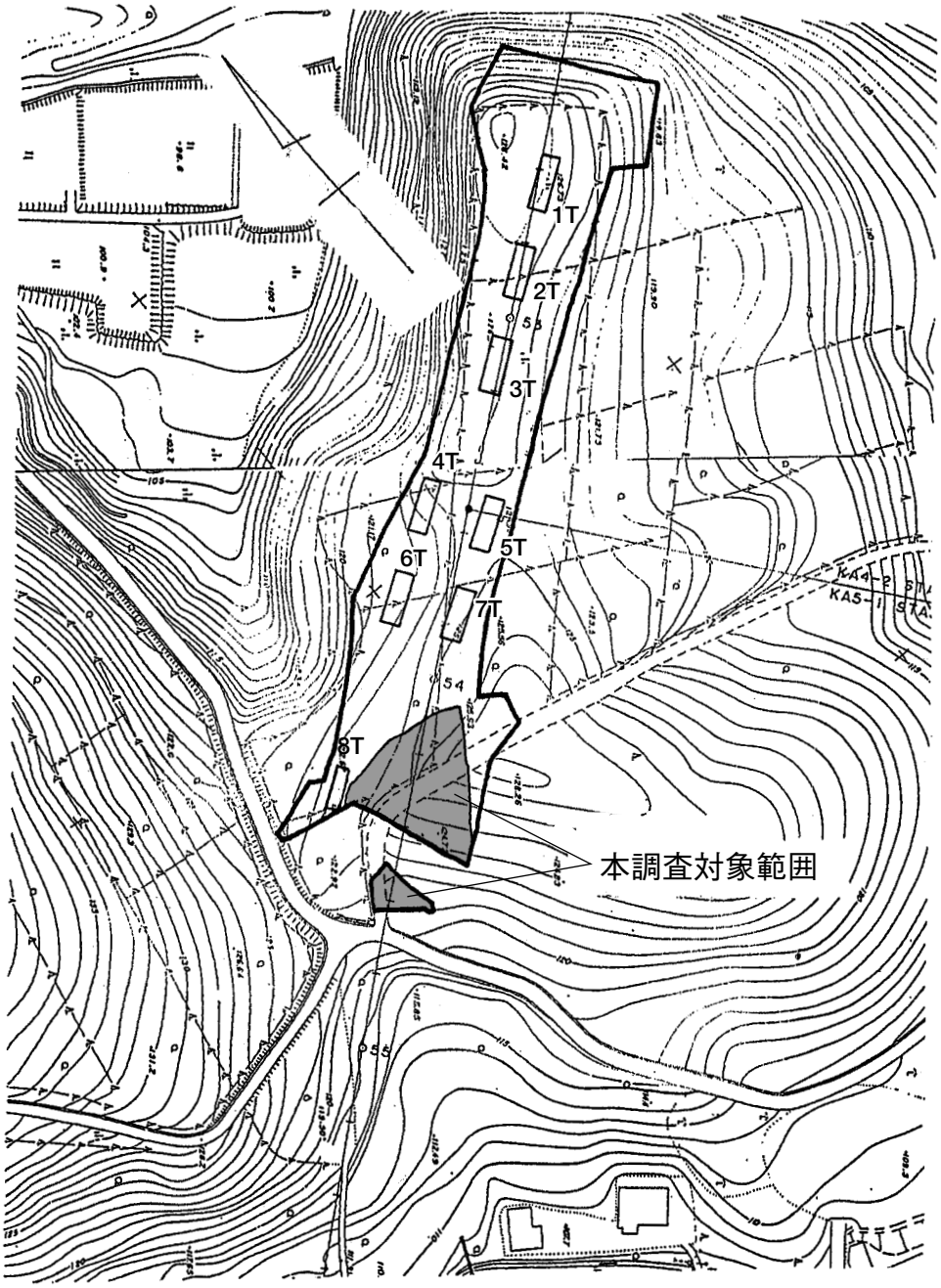
基本層序は下記のとおりである（第３図）。なお、本遺跡では広域テフラである姶良Tn火山灰（ＡＴ）及び霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む層は一部分においてのみブロック状に確認したのみであった。

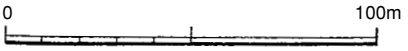
Ⅰ層‥表土・耕作土。腐葉土を多量に含み柔らかい。

Ⅱ層‥鬼界アカホヤ火山灰。



第３図　土層断面図（S＝1／20）





第４図　トレンチ配置図（S＝1／2,000）

Ⅲ層‥黒褐色土。粘性ややあり、しまりややあり。東九州自動車道（都農～西都間）基本層序のＭＢ０に相当する。縄文時代早期の遺物を包含する。

Ⅳ層‥暗褐色土。粘性ややあり、しまりややあり。東九州自動車道（都農～西都間）基本層序のＭＬ１に相当する。縄文時代早期の土器を含む。

Ⅴ層‥明褐色土。粘性あり、しまりなし。Kr-Kb・ＡＴのブロックを部分的に含み堆積状況は良好ではない。旧石器時代～縄文時代早期の遺物を含む。

Ⅵ層‥暗褐色土。粘性あり、しまりややあり。わずかに白色粒がみられる。

Ⅶ層‥小礫混明褐色土。粘性あり、しまりなし。小礫を多量に含む。黒色・緑色・橙色・赤橙色粒が混在し、霧島アワオコシ・霧島イワオコシ・阿蘇４の混土の可能性がある。

第４節　旧石器時代～縄文時代早期の遺構

調査区は南側緩斜面に立地し、土層の堆積状況が一様ではないため、一部遺物の落ち込みなどが見られる。

（１）１号炉穴（ＳＰ１）

Ⅴ層掘削中に１基検出された。調査区南部分にて検出され（第６図）、長径2.1m、短径0.6m、深さ0.5mであり、埋土は４層に分層される。下部である４層より焼土がみられた。

１：褐色土、粘性ややあり、白色粒を多く含む。粒径１㎜程の小礫・橙色パミスをまばらに含む。

２：黒褐色土、小礫を多く含む。ＡＴと思われるブロックがごく僅かに見られる。

３：明褐色土、粘性ややあり、小礫を含む。下部には焼土のブロックや炭化物が含まれる。

４：赤褐色土、焼土層であり、炭化物を含む。

また、４層はフローテーション作業を行っており水洗の結果、15.3ｇの炭化物を採取し、選別の結果、木質部のみであったことを確認した。

（２）１号集石遺構（ＳＩ１）

Ⅳ層より１基検出された（第６・７図）。長径0.7m、短径0.5mであり、礫は集中するが、掘り込みや焼土・炭化物は確認されていない。礫数35個であり、尾鈴山酸性岩類やホルンフェルスで構成される。尾鈴山酸性岩類の礫は30点中、２点が赤化しており、ホルンフェルス５点中１点に赤化が確認された。

（３）礫群（ＳＩ２・３）

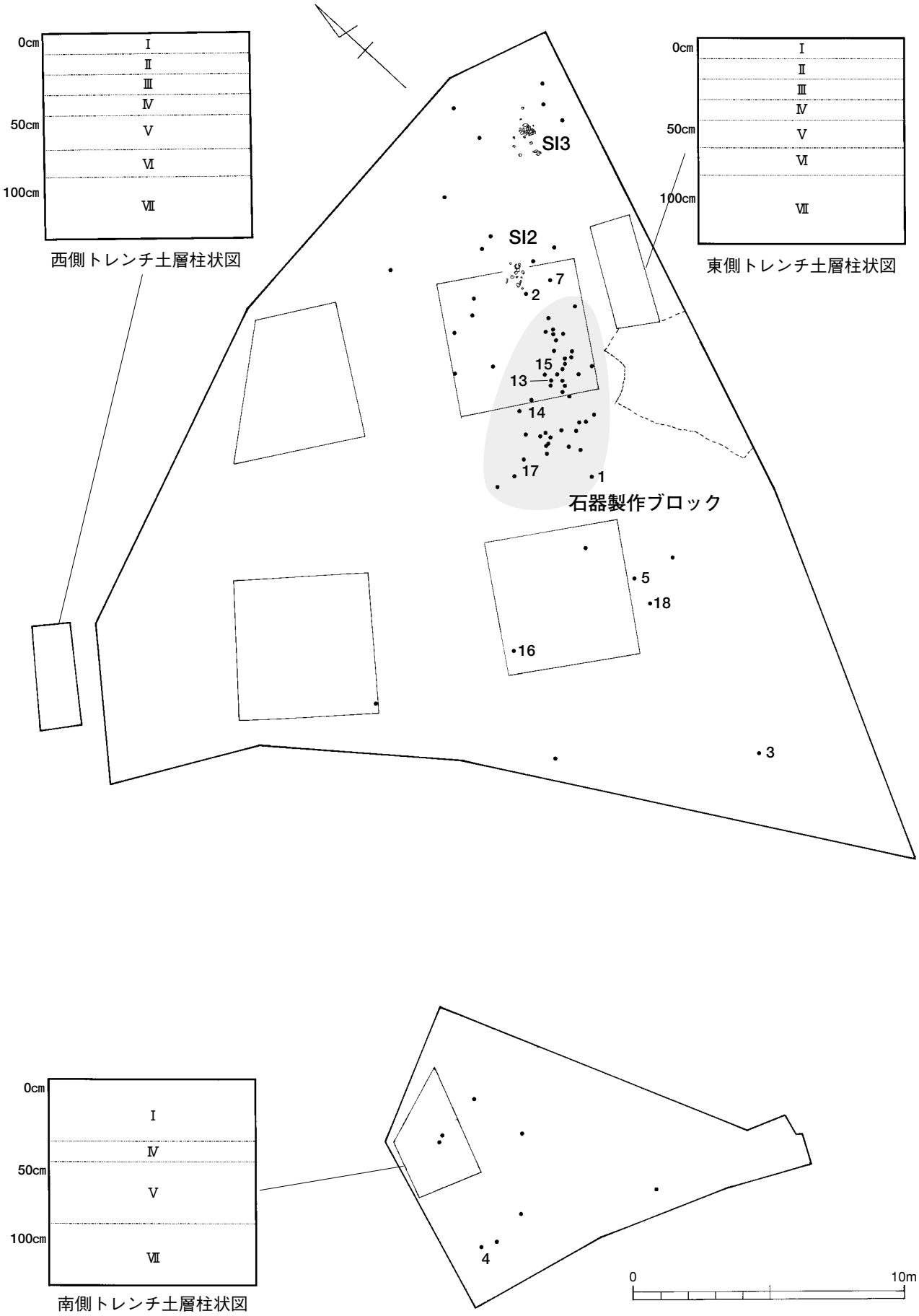
ＳＩ２は調査区北部、Ⅴ層より検出された（第５図）。標高約126.7m～126.9mであり礫は散在した状態である（第８図）。長径1.1m、短径0.7mであり、掘り込みや焼土・炭化物は確認されていない。

ＳＩ３は調査区北部のⅤ層下部より検出された（第５図）。標高約126.1m～126.3mであり、礫群中央に礫の集中部分がみられ、周辺にやや散在した礫が確認されている（第９図）。

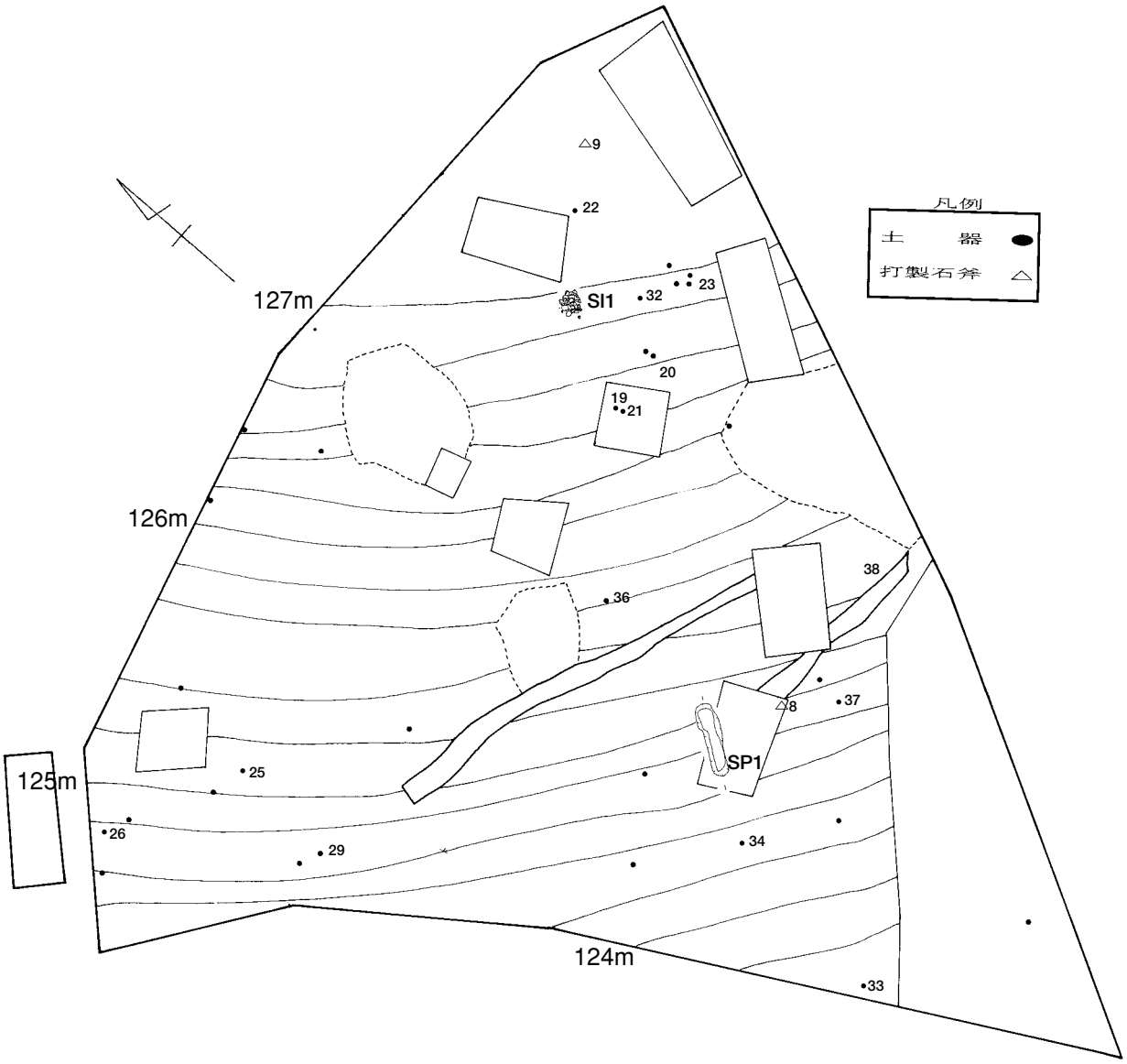
第５節　旧石器時代～縄文時代早期の遺物

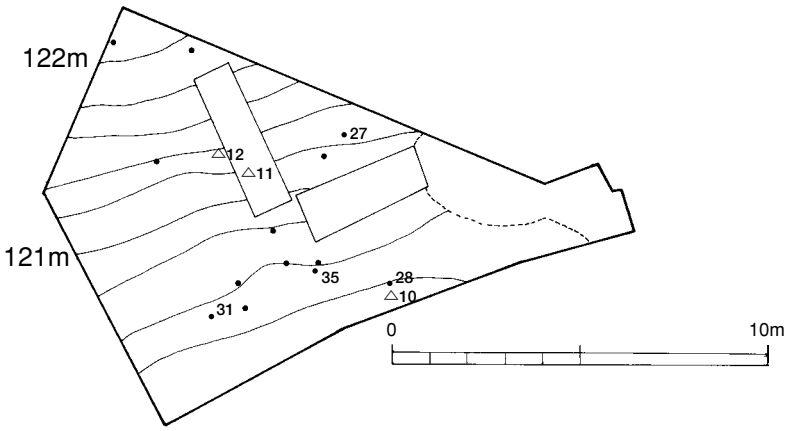
（１）石器（第11図～第13図）

剥片・砕片を含めて97点の石器が出土しており，一部は石器製作ブロックである可能性が高い（第５図）。１は横長剥片を素材とするナイフ形石器であり白色の流紋岩製である。２は左側縁部から先端部が欠損しているが、基部に腹面からの二次加工がみられる。３はノの字状に剥離された剥片を素材としており基部に二次加工が見られ今峠型ナイフ形石器の可能性がある。４はホルンフェルス製の三稜尖頭器であり、風化が激しい。５は船野型細石刃核とおもわれ、頁岩製である。６は縦長剥片を素材にしたスクレイパーであるとおもわれるが、剥片尖頭器の未製品である可能性もある。７は厚手のスクレイパーであり裏面に原礫面を残す。石材は頁岩製である。８は石斧の基部とおもわれ刃部は欠損している。９は裏面に原礫面を多く残し刃部が欠損している。10は石斧の基部であり、縁辺よりおおまかな剥離によって整形されている。11は上端部および下端部に二次加工が加えられる。12は石斧の基部とおもわれ裏面に原礫面を残す。13・14（接合資料１）及び15・16（接合資料２）は接合資料であり、いずれも白色の流紋岩製である。13はⅤ層より出土し、作業面を剥出するため礫を分割した面を裏面にもつ剥片であるとおもわれる。14は13より約２m離れたⅥ層より

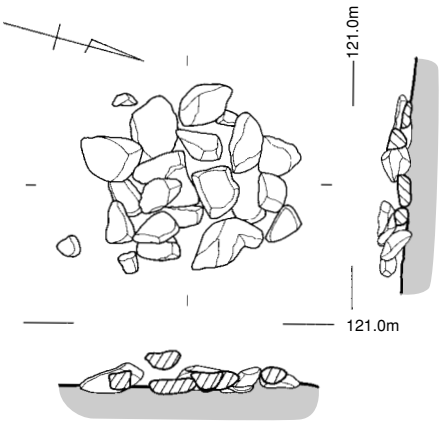


第５図　旧石器時代の遺構・遺物分布図（S＝1／200）

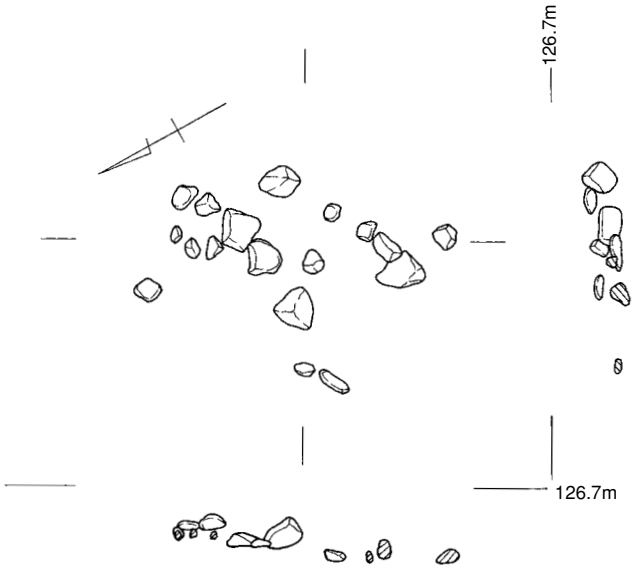




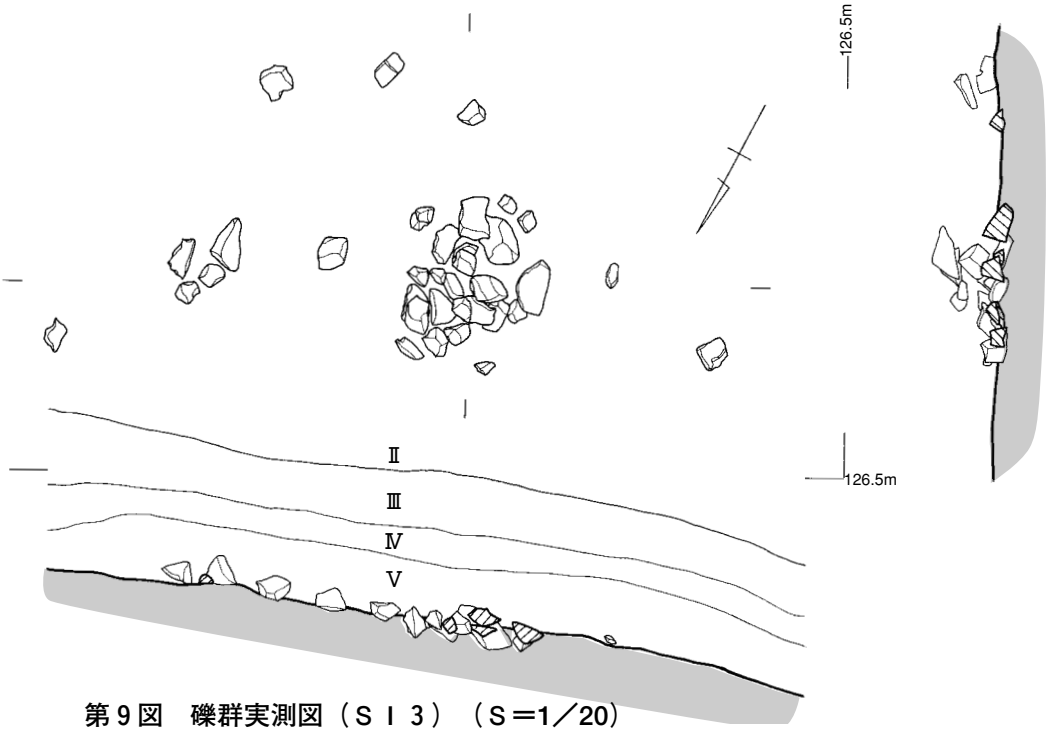
第6図　縄文時代の遺構・遺物分布図（S＝1／200）



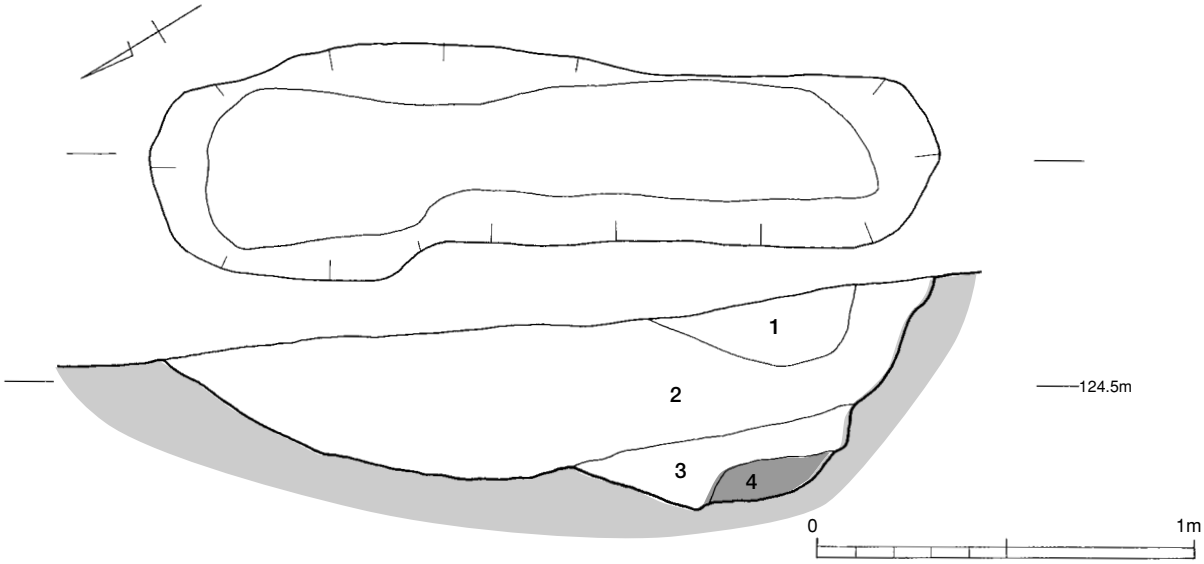
第７図　集石遺構実測図（ＳＩ１）
（Ｓ＝1／20）



第８図　礫群実測図（ＳＩ２）（Ｓ＝1／20）



第９図　礫群実測図（ＳＩ３）（Ｓ＝1／20）



第10図　炉穴実測図（ＳＰ１）（Ｓ＝1／20）

出土しており、残核であるとおもわれる。15・16は約10m離れ、15はⅥ層より出土し、16はⅣ層より出土している。上端部を打面とし連続する剥離により剥片を剥出した行程が窺える。17は縦長剥片でありホルンフェルス製である。18は石核であり頻繁に打面転移や打点の移動を行いながら剥片剥離を行ったものとおもわれる。

また、石器製作ブロック１内に接合資料１・２は含まれ、他にも接合しえなかった剥片・砕片も多くみられた。接合資料２のようにⅣ・Ⅵ層の接合も確認され、両者はやや距離が離れることから原位置を良好に保っていたとは言い難い。調査区全体が斜面地に立地することから遺物の上下移動が激しかったものとおもわれる。

石斧はⅣ・Ⅴ層より出土し、その形態より縄文時代早期のものである可能性が高い。

（２）土器（第１４図）

19～21・23・24は押型文土器であり、器壁が薄く全体として風化している。また、22は文様がみられないが、出土位置と胎土・器壁の薄さから押型文土器の文様を施文されなかった部分とおもわれる。

19は口縁がわずかに外反する器形である。口縁部より約4㎝下に山形押型文を施し、2cm程の空白帯をもち、さらにその下に山形押型文が施されている。内面は丁寧なナデである。20は、口縁がわずかに外反している。口縁部下に山形押型文を施すが1cm程の空白帯をもつ、押型文を施文した後、ナデ調整を施したものとおもわれる。内面はナデである。21は胴部片であり外面上部に山形押型文を施すが1cm程の空白帯をもつ。23・24は小片で器形は不明だが、山形押型文を施し、内面はナデである。

25、26は口縁が直口し、外面の口縁部付近に細かな刺突文を施す土器である。25は径3㎜程の刺突文を口縁に4条施し、内面はナデである。26は口縁部に貝殻の腹縁による刺突文を施す土器であり、内面はナデである。

貝殻条痕文土器(28～31､36～38)28､29は口縁部が直口し、口縁部外面に縦位の条痕を施し、その下部は斜位に条痕を施す。内面は丁寧なナデである。36は外面に条痕を施し、内面にナデを施すが所々崩落しており不明瞭である。横方向に条痕を施す37は斜位と縦位の条痕を施し、内面はナデである。底部に網代痕を有する。胎土に角閃石が含まれない。38は底部であり、調整など不明瞭であるが胎土から貝殻条痕文土器の一群であるとおもわれる。

27は無文土器の胴部片であり､内面・外面ともに丁寧なナデが施されている。

34､35は共に隆帯文を巡らしており、35は口縁部に刻み目を施す。いずれも内面はナデである。

32､33は胴部であり文様などはみられないが、胎土が34・35に類似する。内外面ともにナデである。

以上のように当遺跡内の土器は押型文土器・無文

番号	取り上げ番号	出土レベル	層	器種	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(g)	石材	備考
1	175	120.335	Ⅵ	ナイフ形石器	2.6	1.2	1	2.2	頁岩	
2	141	126.567	Ⅵ	ナイフ形石器	3.9	1.9	0.8	3.9	頁岩	
3	180	125.741	Ⅴ	ナイフ形石器	5.2	2.5	0.7	6.5	頁岩	今峠型
4	61	120.227	Ⅳ	三稜尖頭器	5.8	1.8	1.2	8.6	ホルンフェルス	
5	163	125.05	Ⅴ	細石刃核	2.8	3.7	2.1	16.8	頁岩	
6	23	126.543	Ⅴ	スクレイパー	5.7	3.7	1.2	18.2	ホルンフェルス	
7	119	126.63	Ⅴ	スクレイパー	6.6	7.3	2.8	164.6	ホルンフェルス	
8	164	125.061	Ⅴ	石斧	5.8	6.3	2.1	77.5	ホルンフェルス	
9	102	127.488	Ⅴ	石斧	10.7	6.3	2.9	249.2	ホルンフェルス	
10	112	120.375	Ⅳ	石斧	6.9	5.5	3	126.5	ホルンフェルス	
11	53	120.525	Ⅳ	石斧	6.7	5	1.5	45.5	ホルンフェルス	
12	52	121.306	Ⅳ	石斧	3.5	4.3	1.8	26.3	ホルンフェルス	
13	124	126.168	Ⅴ	剥片	4.8	4.1	1.4	27.7	流紋岩	14と接合
14	150	125.989	Ⅵ	剥片	4	5.8	1.3	21.8	流紋岩	13と接合
15	123	126.149	Ⅵ	剥片	2.7	2.3	0.6	3.7	流紋岩	16と接合
16	181	124.749	Ⅳ	剥片	2.9	2.5	0.6	3.2	流紋岩	15と接合
17	174	124.85	Ⅵ	剥片	7.4	2.1	0.9	16.6	ホルンフェルス	
18	57	124.92	Ⅳ	石核	4.6	4.5	5.8	125.1	頁岩	

第１表　石器計測表

土器・貝殻条痕文土器・隆帯文土器など縄文時代草創期～早期の土器が出土している。特に出土分布の集中部などはみられない。しかし、ＳＩ１周辺に押型文土器が分布する傾向にある。また、押型文土器と無文土器は胎土・調整が類似しており出土した箇所は離れているが、関連性を考慮すべきであろう。

第６節　まとめ

（１）旧石器時代の遺構・遺物について

旧石器時代の遺構・遺物はⅤ・Ⅵ層を中心に出土しているが、ＳＩ２・３周辺からはナイフ形石器（２）・スクレイパー（７）が出土している。さらにやや南側には白色流紋岩の剥片・砕片が集中する箇所がある。三稜尖頭器（４）石核（18）はⅣ層に混入したものであろう。土層の堆積状況も良好ではなく、Ⅴ層からは船野型細石刃核も出土し、一部、石斧の出土もみられる。複数時期の石器が混じっているものとおもわれるため細かな時期を検討することが困難ではあるが、ナイフ形石器を主体とする石器群と船野型細石刃核の出土から細石刃文化期の石器群との少なくとも２時期が存在するであろう。さらに、縦長剥片を素材とするスクレイパー（６）のように剥片尖頭器の未製品の可能性があるものも存在するため、さらに複数時期のものが混在している可能性が高い。

（２）縄文時代草創期～早期の遺構・遺物について

縄文時代草創期～早期の遺物はⅢ・Ⅳ層を中心に出土した。遺構はＳＩ１・ＳＰ１が確認されている。ＳＩ１周辺には押型文土器の出土が目立つ傾向にあり、ＳＰ１周辺には条痕文土器の出土がみられ、関連性が窺える。

石斧はⅢ層出土のものはなくそのほとんどはⅣ・Ⅴ層より出土しており、刃部が欠損するものが多い。

19～24は押型文土器であり、空白帯をもつ山形押型文を施文し、器壁が薄く、口縁部が僅かに外反する。25は口縁部外面に棒状工具による刺突文土器であり、26は口縁部外面に縦方向の貝殻腹縁による刺突文を施す土器であり中原Ⅱ式に比定される。27は押型文土器の胎土・調整に類似する無文土器である。34・35は隆帯文土器であり、その胴部片もみられる。

28～31は貝殻条痕文土器であり、器壁の厚く、条痕の深さが浅いことから別府原式に比定される。口縁部端の外面に縦位に条痕が施されるものもある。以上のように当遺跡では縄文時代草創期～早期前半の時期に該当する土器が主体を占めている。特に複数形式の土器が共出した状況は今後周辺地域の出土状況を考慮しながら検討する必要がある。

（参考文献）

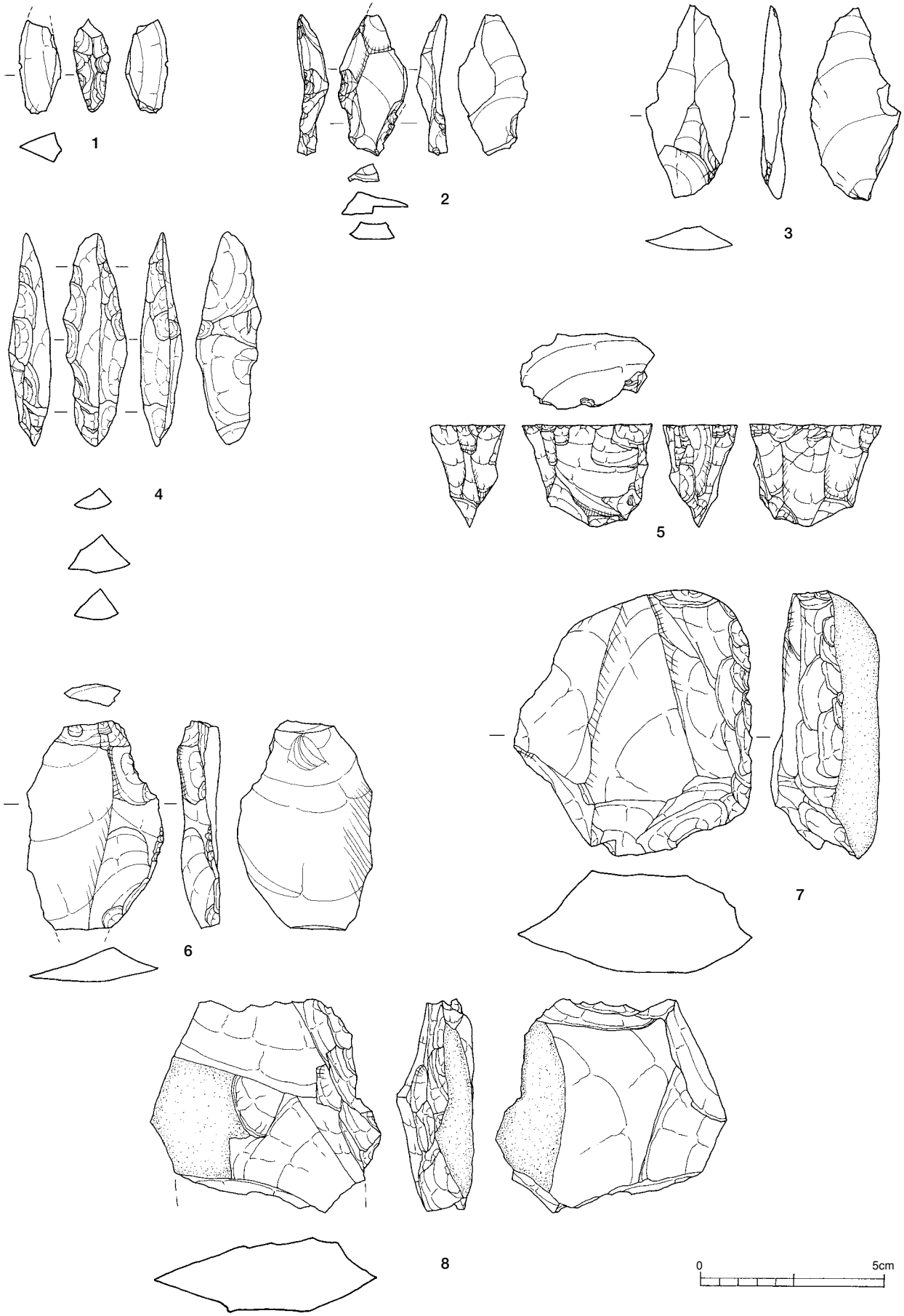
木崎　康弘「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会1998

金丸　武司「宮崎県における縄文時代早期前半期の土器群－別府原式の設定」『宮崎考古第19号』宮崎考古学会　2004

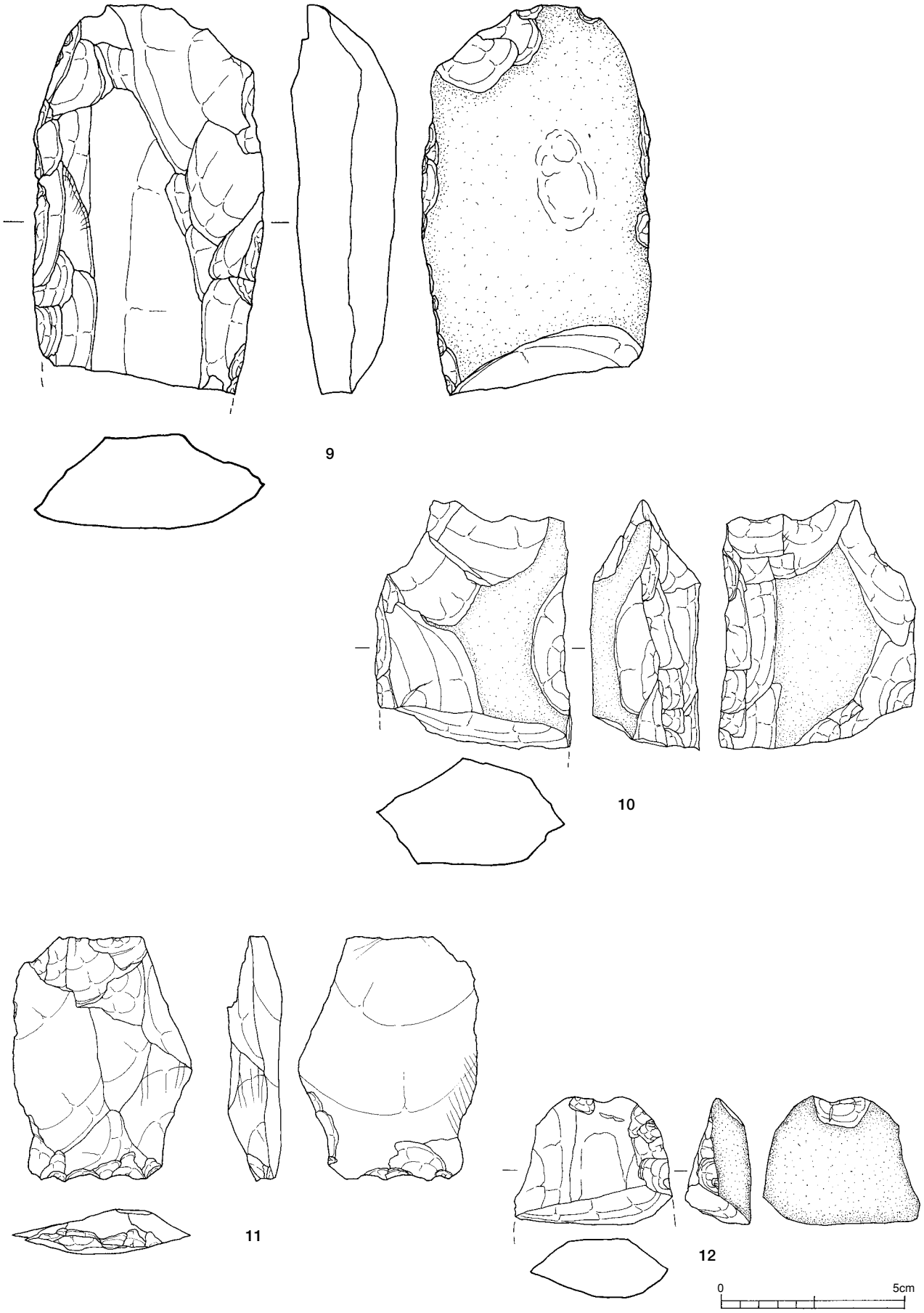
上杉　彰紀「北部九州の縄文時代早期初頭の土器」『九州縄文早期研究ノート第１号』九州縄文早期研究会2003

重留　康宏「前原西式雑考」『九州縄文早期研究ノート第２号』九州縄文早期研究会2004

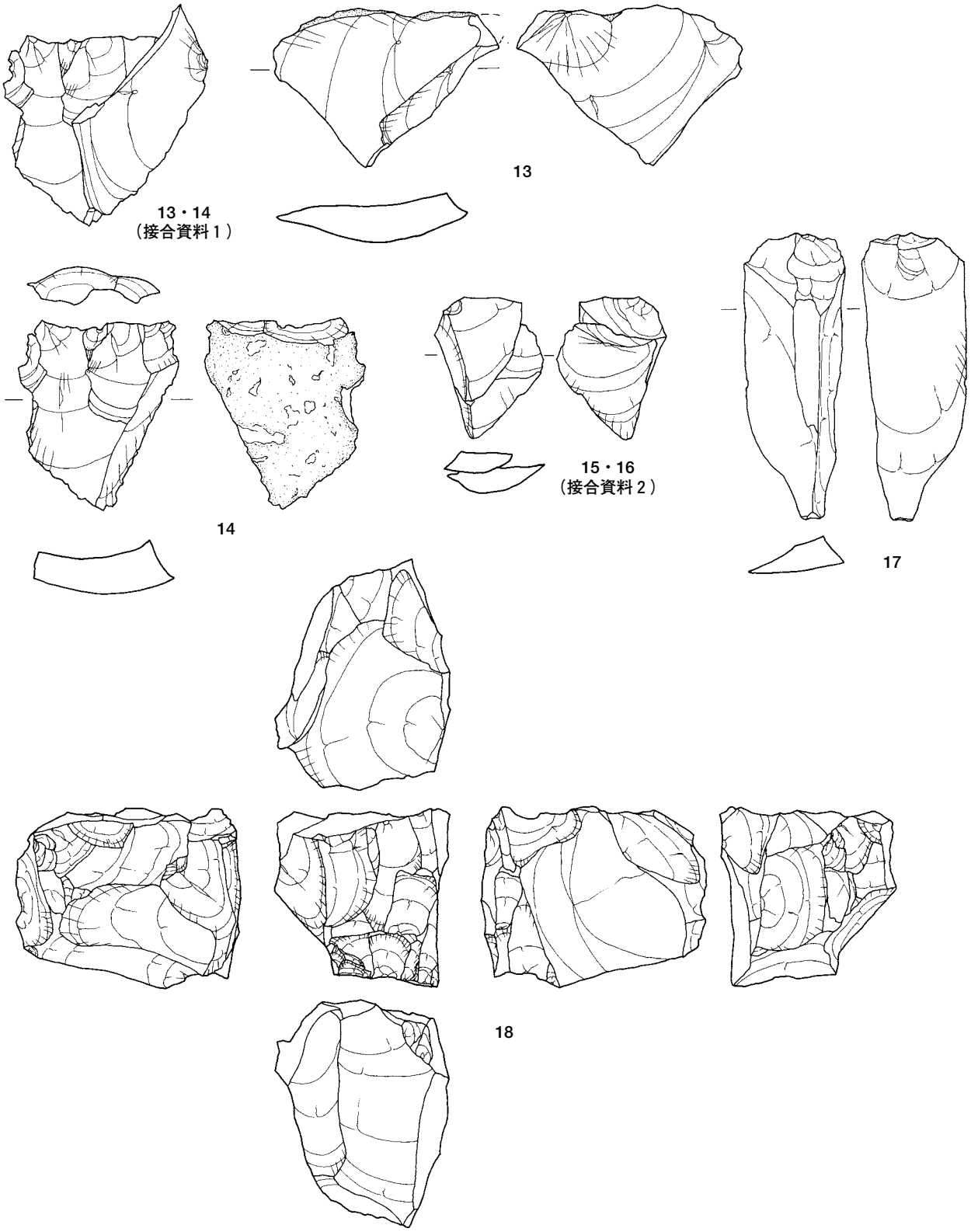
宮崎県旧石器文化談話会「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学66』旧石器文化談話会2005



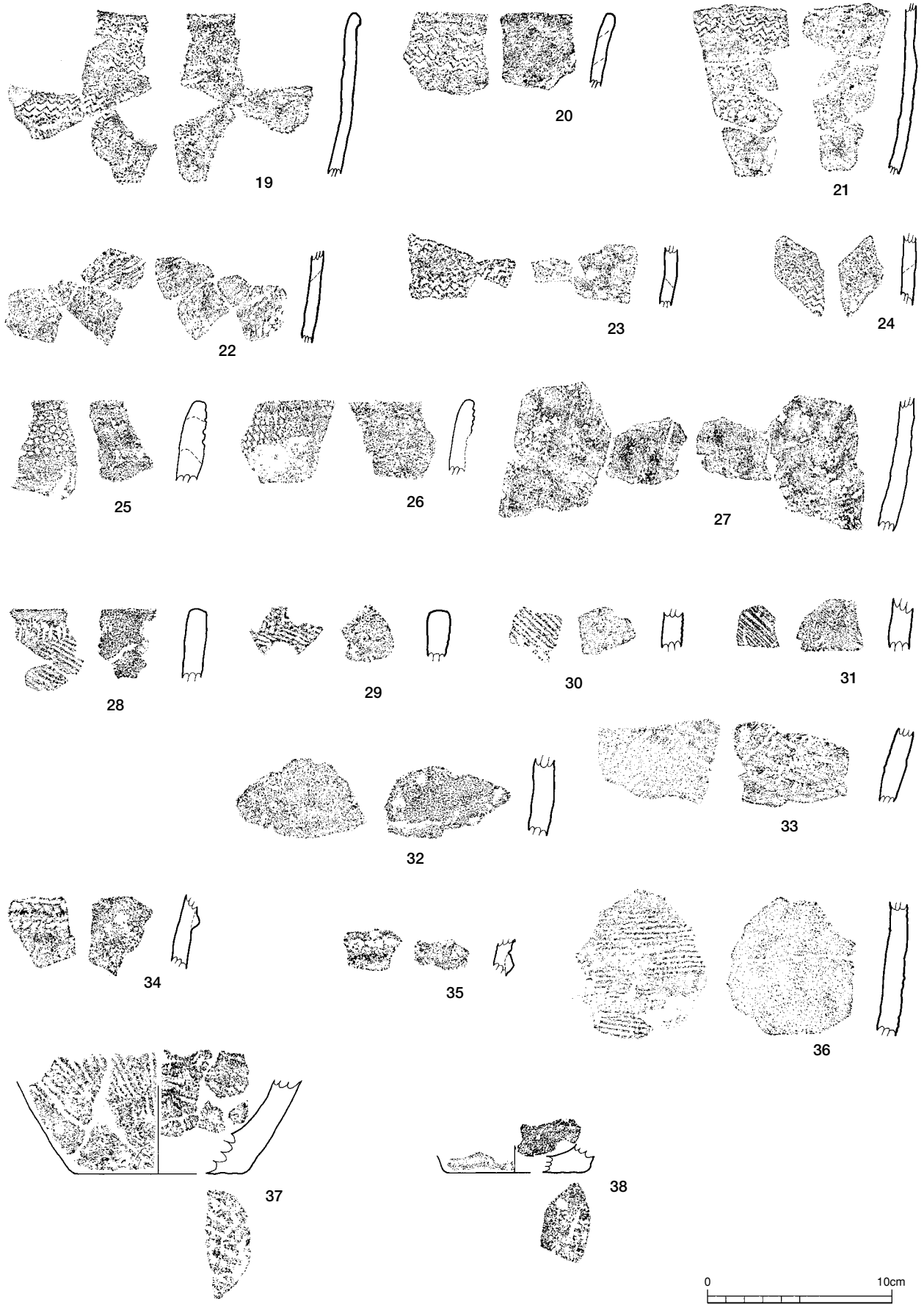
第11図　石器実測図(1)（S＝2／3）



第12図　石器実測図(2)（S＝2／3）



第13図　石器実測図（3）（Ｓ＝2／3）



第14図　土器実測図（S＝1／3）

番号	種別	器種 部位	法量(cm) 底径	手法・調整・文様ほか 外面	手法・調整・文様ほか 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考	遺物番号
19	深鉢	口縁部		山形押型文　斜めのナデ	指頭痕　ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	5㎜以下のにぶい橙、明黄褐粒 3㎜以下の灰褐の粒を含む		91　92　93
20	深鉢	口縁部		山形押型文　ナデ	指頭痕　ナデ	黄褐	にぶい黄褐	3㎜以下のにぶい橙、明黄褐の粒を含む	スス付着	94
21	深鉢	胴部		山形押型文　横方向のナデ　指頭痕	ナデ　指頭痕	にぶい褐	にぶい黄褐	4㎜以下の灰褐･黄褐の粒を含む	スス付着	88　89　90
22	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3㎜以下の黄褐･灰褐の粒を含む	黒色物付着	17　103　104　105
23	深鉢	胴部		山形押型文　斜めのナデ	ナデ　ナデのち指頭痕	にぶい橙	にぶい黄褐	2㎜以下の灰黄･灰褐･褐色の粒を含む	4㎜程の繊維を含む	19　20
24	深鉢	胴部		山形押型文　ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	4㎜以下の灰白･黄灰･黄褐の粒を含む	繊維を含む	107
25		口縁		工具による刺突	ナデ	黒褐	黒褐 にぶい黄褐	5㎜の灰褐が一粒1㎜以下の灰白、無色透明で光沢のある粒を含む	スス付着	87
26		口縁		貝殻腹縁による刺突	ナデ	褐	にぶい褐	4㎜以下の黄褐･褐･乳白、金色で微細な光沢粒を含む	スス付着	81
27	深鉢	胴部		縦方向のナデ	ナデ	明赤褐	にぶい橙	3㎜以下の黒褐･赤褐色、4㎜以下の白色粒をわずかに含む		48　49
28	深鉢	口縁部		斜方向の条痕	ナデ	褐	褐	微細な灰白･黄灰、無色透明の光沢粒を含む	斜条痕と縦条痕の重複箇所あり	3　45
29	深鉢	口縁部		斜方向の条痕	ナデ	暗灰黄	にぶい黄橙	微細な灰白･褐色、無色透明な光沢粒を含む	斜条痕と縦条痕の重複箇所あり	114
30	深鉢	胴部		条痕	ナデ	にぶい褐	橙	1㎜以下の黄橙･灰白、微細な無色透明の光沢粒を含む		21
31	深鉢	胴部		斜方向のナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	微細な乳白･灰白･褐色、無色透明の光沢粒を含む		41
32	深鉢	胴部		ナデ	ナデ　工具痕	明黄褐	にぶい黄橙	2㎜以下の黒色粒と光沢のある微細な粒を少し含む		86
33	深鉢	胴部		ナデ	指頭痕　指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜以下の褐色粒と3㎜以下の灰色粒をわずかに含む		10
34		胴部		隆帯文　ナデ	指頭痕　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	7㎜の乳白色粒一粒、1㎜以下の灰白･乳白･褐･黒色と無色透明の粒を含む		6
35		胴部		隆帯文　刻み目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	微細な乳白･黄褐色粒を含む		111
36		胴部		条痕　所々崩落あり	ナデ	橙	にぶい橙	1㎝の褐色粒一粒、4㎜以下の褐･乳白･灰白･黒色光沢粒を含む		60
37		底部	9,8	縦･斜方向の条痕 ナデ	ナデのち指頭	橙	にぶい褐	4㎜以下の茶褐･黄灰･灰白色、1㎜以下の黒色粒を含む	底に網代痕あり	56
38		底部	8,0	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	4㎜の茶褐色粒一粒、1㎜以下の灰白･無色透明の光沢粒を含む		19

第２表　土器観察表

図版 1

調査前遠景（北東から）

調査区近景（南西から）

調査風景（北から）

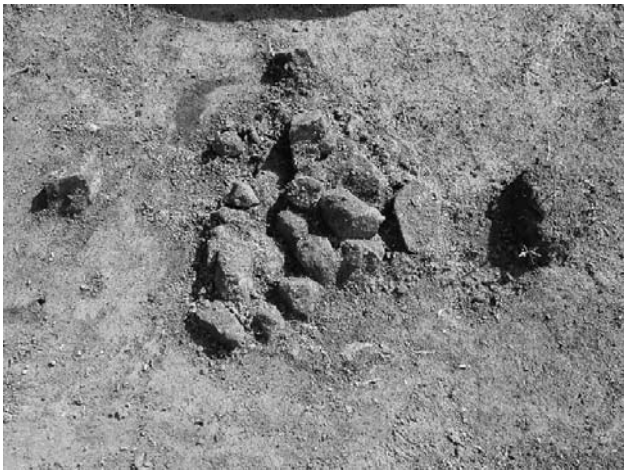
土層断面（1）

土層断面（2）

土層断面（3）

ＳＩ１（東から）

ＳＩ２（西から）

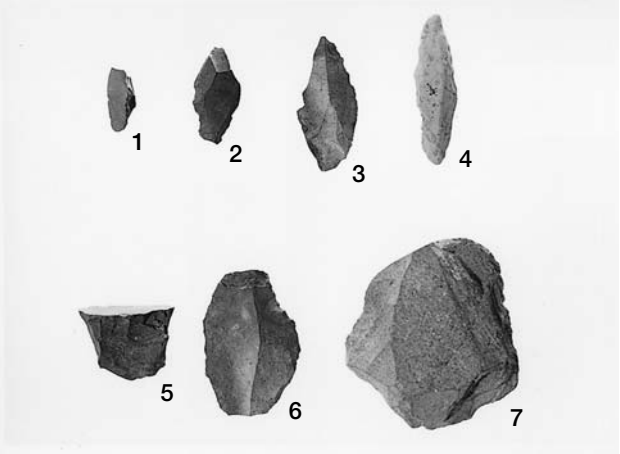


ＳＩ３（南から）

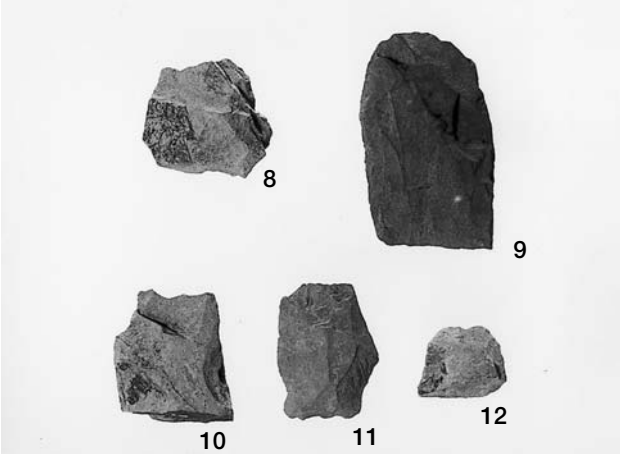
ＳＩ３（西から）

ＳＰ１完掘状況（西から）

ＳＰ１断面（西から）

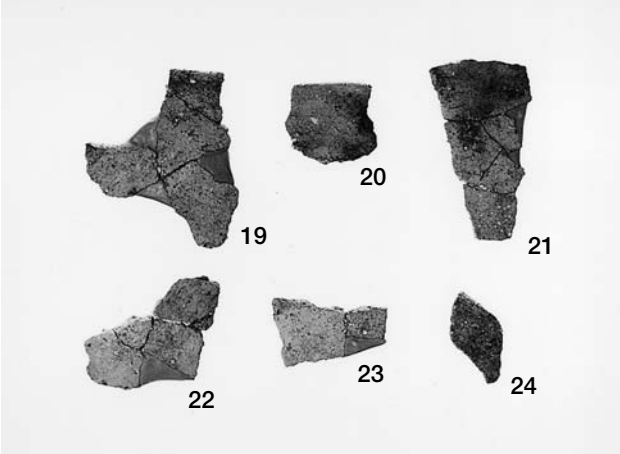


石器(1)

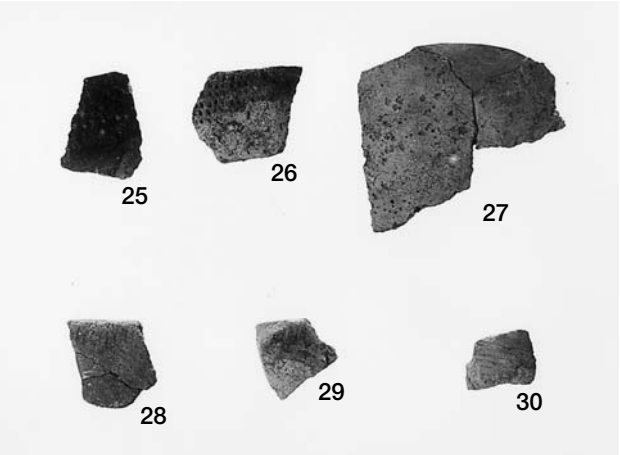


石器(2)

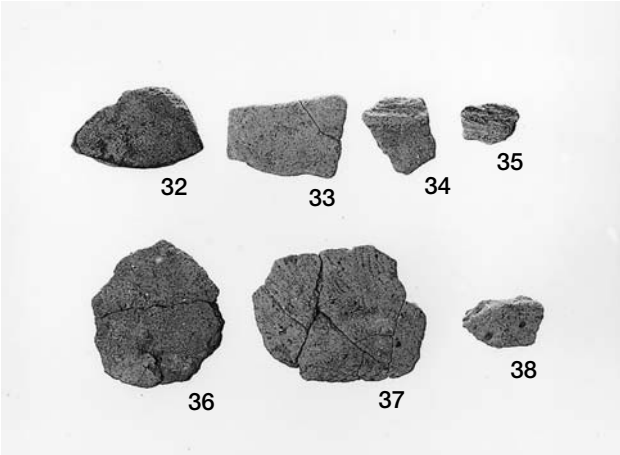
石器(3)



土器(1)



土器(2)



土器(3)

第Ⅲ章
赤石・天神本遺跡の調査

第１節　調査の方法と経過

１　調査の方法

赤石・天神本遺跡では、調査対象面積が45,500㎡と広大なため、調査区をＡ～Ｍ区に分けて順次調査を進めた。この区割りは、包含層掘削や遺構精査などの発掘作業から、センターにおける整理作業まで一貫して用いた。

調査は、区ごとに手掘りでトレンチ調査を行い、遺構・遺物・層位の確認を行った上で重機による表土除去を行った。表土を除去した後は、手グワもしくは移植ゴテにより掘り下げた。

検出された遺構は、土層観察ベルトを設定しながら精査を進め、埋土中の遺物は床面付近等のもののみ遺構実測図中に図化して取り上げたほかは、遺構一括遺物とした。

遺物包含層中の遺物は平板もしくは光波トランシットにより取り上げた。遺構実測図は１／20を基本とし、一部１／10で記録した。写真記録は大判モノクローム、６×７版モノクローム、35㎜モノクローム・リバーサル・カラー写真を併用し適宜行った。

２　調査の経過

発掘調査は、確認調査を含め平成15年９月16日に開始した。確認調査の結果、Ｂ区・Ｇ区・Ｉ区・Ｋ区を本調査対象区とした（確認調査については次節で述べる）。本調査は、後期旧石器時代（Ｂ区）、縄文時代草創期（Ｇ区）、縄文時代早期（Ｋ区）、縄文時代後・晩期及び弥生時代後期（Ｉ区）を対象とした。

Ｂ区では、第Ⅶ層（ML2）上面～第Ⅵ層(MB1)下部で礫群２基を検出し、第Ⅵ層（MB1）下部で剥片尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器が散漫な状態で出土した。第Ⅸ層（MB2）上部からは剥片、砕片、石核が出土した。

Ｇ区では、遺構は検出されなかったが、第Ⅴ層（ML1）上面で隆帯文土器、石鏃、磨石、台石、石皿、石核、剥片、砕片が約1,300点出土した。

Ｉ区では、第Ⅱ層（クロボク）より弥生時代後期の竪穴住居跡１軒と、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡２軒及び集石遺構１基を検出した。縄文時代後・晩期の竪穴住居跡は、当初１軒の竪穴住居跡としていたが、主柱穴や遺物のあり方から２軒の切り合いと判断し、調査を進めた。

Ｋ区では、確認トレンチの壁面精査により陥し穴状遺構を２基検出した。２基は丘陵斜面から谷部に向けた地形変換線上に位置し、切り合っている。

発掘調査期間中の平成15年12月19日(金)に現地説明会を行った。説明会は、調査内容を地域住民に公開することにより郷土の歴史の一端に触れてもらい、埋蔵文化財に対する認識と理解を一層深めてもらうという趣旨で行った。当日、南国宮崎ではめずらしく吹雪となったが、地域住民を中心に33名の参加を得た。

発掘調査は平成15年12月25日に終了し、平成16年５月７日から平成17年12月26日まで整理作業を行った。一部の石器実測を外部に委託したほかは、すべての整理作業を当センターで行った。

図版４　現地説明会の様子

第２節　確認調査の概要

確認調査は、天神本第２遺跡に隣接する調査区の南端から順次北進するかたちで進めた。以下、各区の概要を示す（第15図）。

１　Ａ区の調査

Ａ区には４本のトレンチを設定した。第１トレンチ（Ｔ１）は10m×15mで設定し、その内部に下層確認のためのトレンチを３本設定した。遺物はほとんど確認されず、第６トレンチの第Ⅳ層（MB0）で剥片１点、第７トレンチの第Ⅵ層（MB1）でスクレイパー１点が出土するにとどまった。

また、トレンチ中央部の第Ⅱ層（クロボク）からⅢ層（K-Ah）において溝状遺構が検出されたが、旧地権者からの聞き取りを照合すると、茶栽培に伴う排水溝または配水管の跡だと考えられた。遺構・遺物はほとんど確認されなかったため、本調査対象外とした。

２　Ｂ区の調査

Ｂ区には先行トレンチを４本設定し掘り下げたところ、第Ⅵ層（MB1）より石器や剥片が多数出土したため、遺物の広がりに応じて順次トレンチを拡張した。Ｂ区は、以前茶畑であったことから総じて攪乱が著しく、遺構・遺物が良好に残存している部分は、Ｂ区全体の35％（350㎡）にとどまることが判明した。よって、この残存区域を本調査対象区とした。

３　Ｃ区の調査

４本のトレンチを設定し掘り下げたところ、第Ⅳ層（MB0）より土坑を１基検出し、第Ⅴ層（ML1）より剥片が１点出土した。ＡＴ上面における観察結果から、ＡＴ降灰後の旧地形は緩やかな谷地形で、複数の自然流路が延びていることが判明し、その他には全く遺構・遺物が確認されなかったことから、Ｃ区は本調査対象外とした。

４　Ｄ区・Ｅ区・Ｆ区の調査

13箇所のトレンチを設定し掘り下げたが、表土が厚く堆積していると考えられたため、さらに掘削深度を下げて確認したところ、土層が良好に残存していたのは狭小な範囲にとどまり、地表下約２ｍ前後まではほとんどが造成土であった。その下部からは砂礫層を確認したため、本調査対象外とした。遺構・遺物は確認されなかった。

５　Ｇ区の調査

７本のトレンチを設定し掘り下げた結果、南側の表土中より中世の土師器片、北側の第Ⅳ層（MB0）より土器片、第Ⅴ層（ML1）より縄文草創期の土器片（隆帯文土器）、打製石鏃、剥片、チップが多数出土した。

Ｇ区南側は中世の遺物包含層の存在が推定されたが、湧水が著しく掘り下げを断念せざるをえなかった。

北側についても第Ⅵ層（MB1）以下は粘土質土壌で湧水が著しく無遺物層と判断できたため、本調査は第Ⅳ・Ⅴ層の精査を中心に400㎡を対象に行うこととした。

６　Ｈ区の調査

５本のトレンチを設定し掘り下げた結果、地表下約１ｍが礫層で、その礫層の下部から湧水しため本調査対象外とした。遺構・遺物は確認されなかった。

７　Ｉ区の調査

12本のトレンチを設定した。全体的に攪乱が著しかったものの、Ｉ区東側の第Ⅱ層（クロボク）において集石遺構と縄文土器を確認したため、東側810㎡を本調査対象区とした。

８　Ｊ区の調査

４本のトレンチを設定した。陶磁器片や土器片が多数出土したが、いずれも攪乱土の中からである。攪乱は地表下約1.5ｍに及んでいたため、遺物は一括で取り上げ、本調査対象外とした。

9　K区の調査

18本のトレンチを設定した。土層は比較的良好に残存していたが、遺構・遺物は確認できなかったため、重機を投入しトレンチを拡張した。その結果、角錐状石器が１点出土し、トレンチ壁面で土坑を検出した。陥し穴の可能性も考えられたため、土坑を中心に周辺1,600㎡を本調査対象区とした。

10　L区の調査

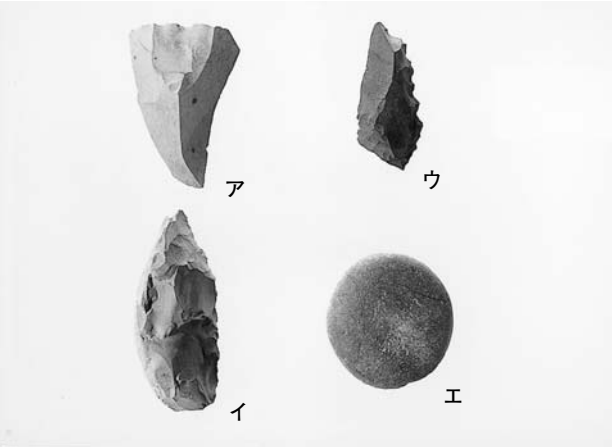
丘陵斜面の尾根にそってトレンチを設定したが、遺構・遺物は認められなかった。全体的に赤褐色土や礫層の礫が露出していることから遺構・遺物はないと判断し、本調査対象外とした。

11　M区の調査

L区と同じく丘陵斜面に位置し、L区との間に流水路をもつ谷を挟む。７本のトレンチを設定したが、第Ⅲ層（K-Ah）下より土器片を１点及び敲石を１点表採したのみで、遺構は検出されなかった。出土した土器片も摩滅しており、調査区外からの流れ込みであると考えられたため本調査対象外とした。

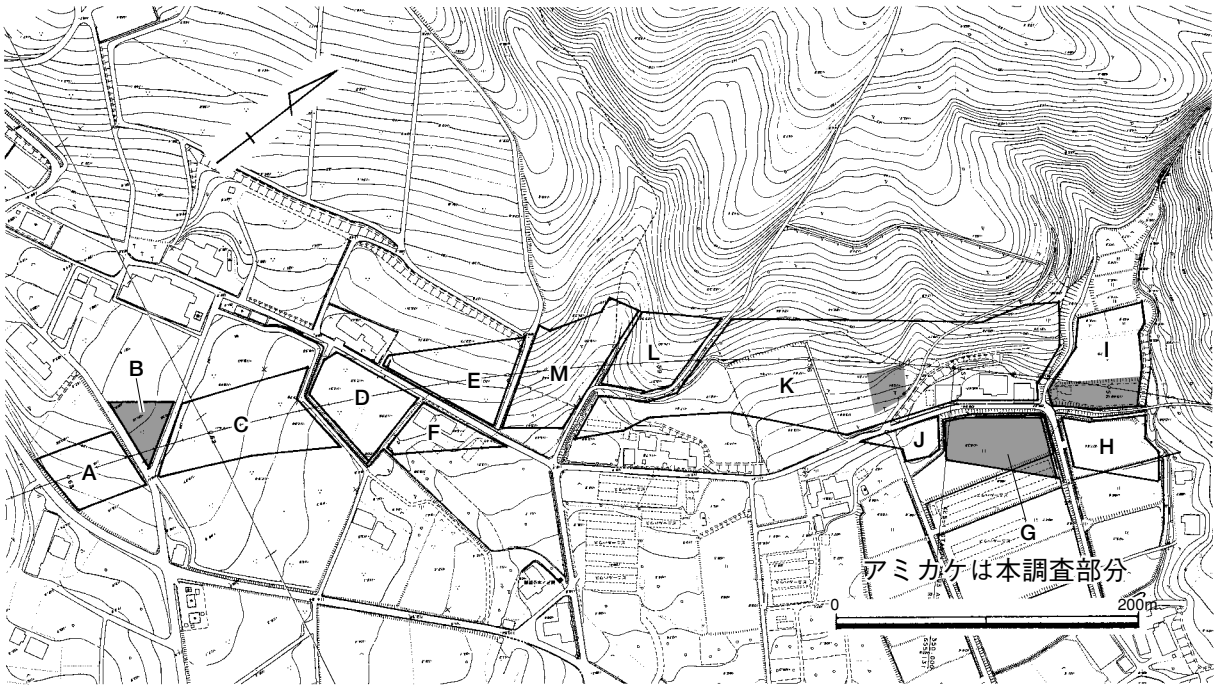
12　確認調査のまとめ

以上の結果から、赤石・天神本遺跡は、後期旧石器時代から縄文時代後・晩期を中心とする遺跡であることが予想された。B区350㎡、G区400㎡、I区810㎡、K区1,600㎡の計3,160㎡について本調査対象区とした。

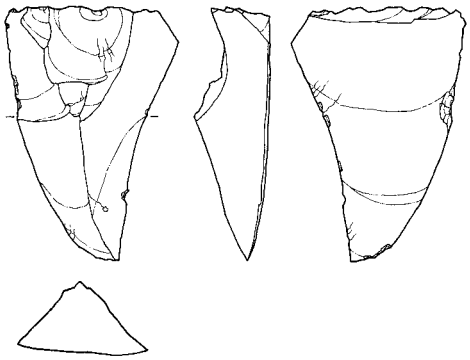


図版５　確認調査出土遺物

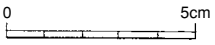
ア　C区　剥片（ホルンフェルス）
イ　A区　スクレイパー（流紋岩）
ウ　K区　角錐状石器（流紋岩）
エ　M区　敲石（尾鈴山酸性岩類）

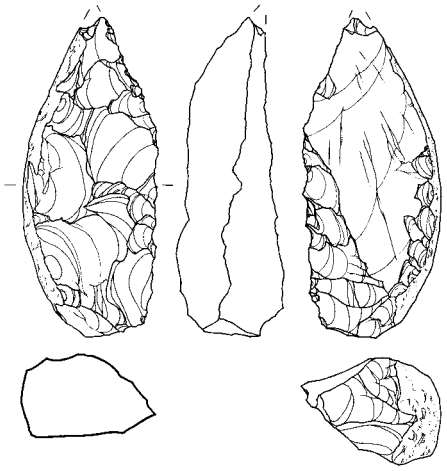


第15図　周辺地形と調査区割図（S＝1／5,000）

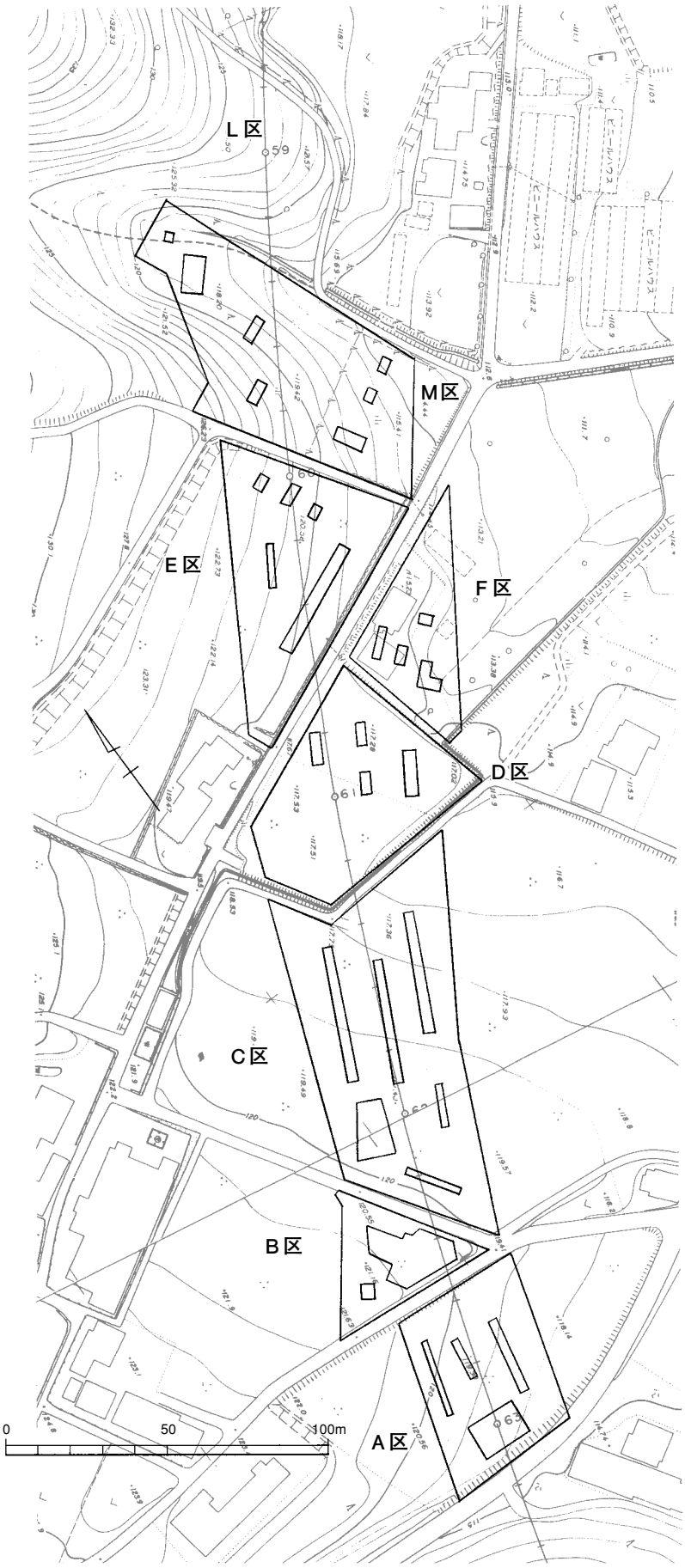


ア　C区出土剥片（S＝1／2）

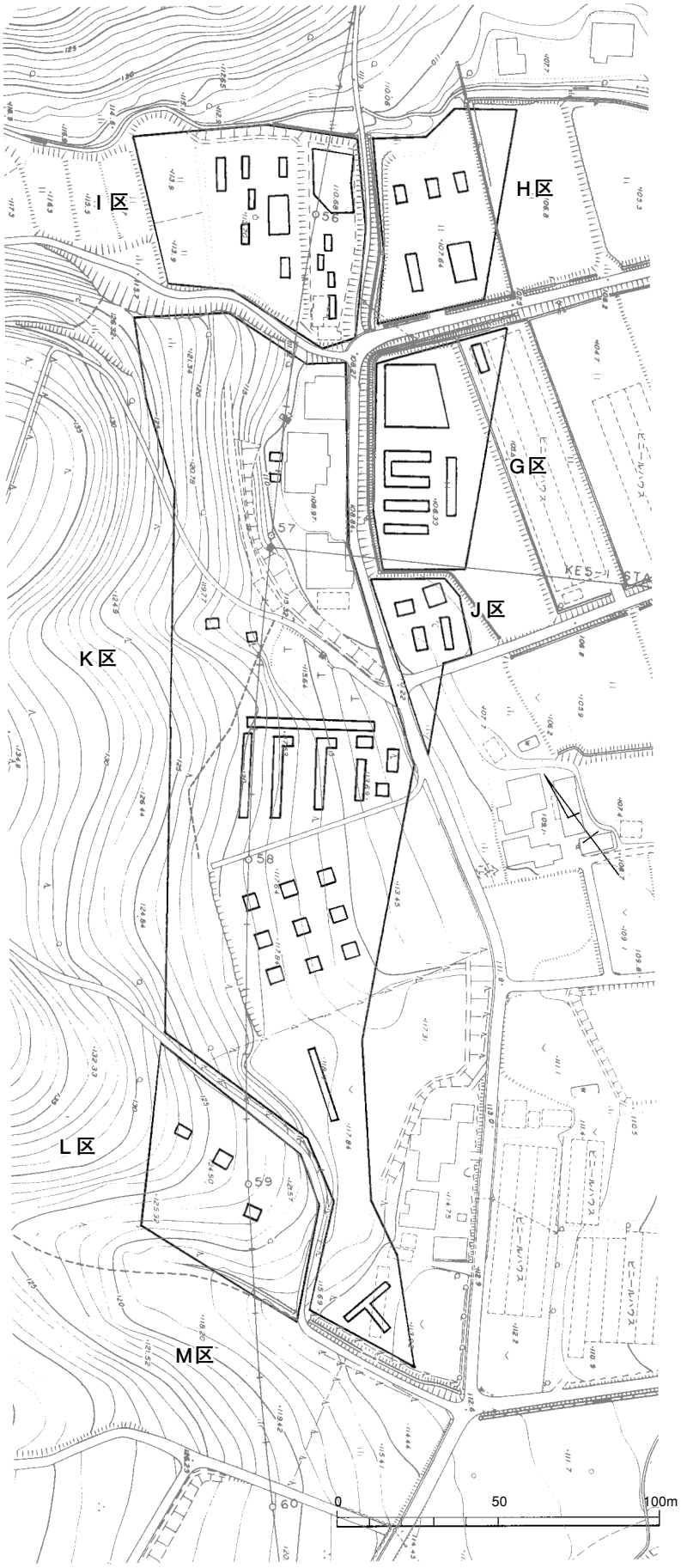


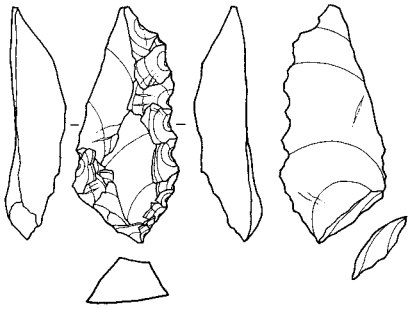


イ　A区出土スクレイパー（S＝1／2）

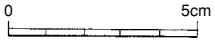


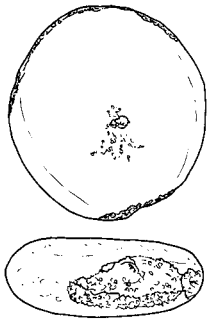
第16図　トレンチ配置図(1)及び確認調査出土遺物（S＝1／2,000）





ウ　K区出土角錐状石器（S＝1／2）





エ　M区出土敲石（S＝1／2）

第17図　トレンチ配置図(2)及び確認調査出土遺物（S＝1／2,000）

第３節　基本層序

赤石・天神本遺跡は、その対象面積が45,500㎡と広大で南北に展開していることから、場所によって土層の堆積状況が異なる。

Ｂ区は、茶畑による耕作の攪乱があるものの第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰）下位層は比較的良好に堆積している。

Ｋ区は、山の斜面に位置するが第Ⅱ層（クロボク）下位層は良好に堆積している。

Ｇ区は、調査前は水田であったものの第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰）から第Ⅵ層（ＭＢ１）までは堆積していた。しかし、第Ⅶ層以下は湧水のため灰白色の粘土層になっていた。

Ｉ区は、第Ⅱ層（クロボク）が良好に残っており縄文時代後・晩期～弥生時代における住居跡を検出した。第Ⅳ層（ＭＢ０）以下はなく礫層となっていた。層序を考える上で鍵になる「鬼界アカホヤ火山灰層」は良好に堆積している箇所が多いが、「姶良Tn火山灰層」は、Ｂ区とＩ区では確認できず、「霧島小林軽石を含む層」については、全調査区で明確に確認することができなかった。

第Ⅰ層：表土

第Ⅱ層：黒色土

　クロボクに相当し、Ｋ区とＩ区で確認できた。

第Ⅲ層：鬼界アカホヤ（Ｋ－Ａｈ）火山灰

　黄燈色の火山ガラス質を大量に含む。

第Ⅳ層：黒色土（ＭＢ０）

　硬くしまっており、小白斑を含んでいる。

第Ⅴ層：暗褐色土（ＭＬ１）

　全体的に硬くしまっている。

第Ⅵ層：暗褐色土（ＭＢ１）

　柔らかく、粘性がある。

第Ⅶ層：暗褐色土（ＭＬ２）

　径２～３㎝の球形の暗褐色のシミを多く含んでいる。

第Ⅷ層：姶良Ｔn火山灰

　燈色・白色粒・透明ガラス粒を多く含む。硬くしまりがあり、粘性を帯び、ざらざらしている。

第Ⅸ層：暗褐色土（ＭＢ２）

　クラックが発達し、硬くしまっている

第Ⅹ層：赤褐色土

　柔らかく、粘性がある。

第４節　調査の記録

１　Ｂ区の調査（後期旧石器時代の遺構と遺物）

（１）概要

Ｂ区は、赤石・天神本遺跡の南部に位置し、着手以前は茶畑であった。Ｂ区の面積は約1,000㎡あり、その中の35％にあたる350㎡の調査を行った。(第15図)なお、整理作業時に本遺跡の基本層序と照合した結果、Ｂ区の第Ⅷ層は第Ⅸ層に相当し、第Ⅳ層は第Ⅵ層に相当すると判断した。よって、第Ⅰ文化層は第Ⅸ層、第Ⅱ文化層は第Ⅵ層で報告する。

遺構は、第Ⅶ層上面から第Ⅵ層下部で礫群が２基検出された。（第18図）２基の礫群の構成礫はいずれも尾鈴山酸性岩類で赤化、破砕が著しく炭化物等も検出されなかった。

遺物は、ＡＴ直下の第Ⅸ層の上位からはスクレイパー、剥片、砕片が出土している。石材の組成は、第３表のとおりである。第Ⅵ層下部中に剥片尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器が散漫な状態で出土した。これらの遺物は礫群に伴う可能性が高い。石材組成は、第４表のとおりである。

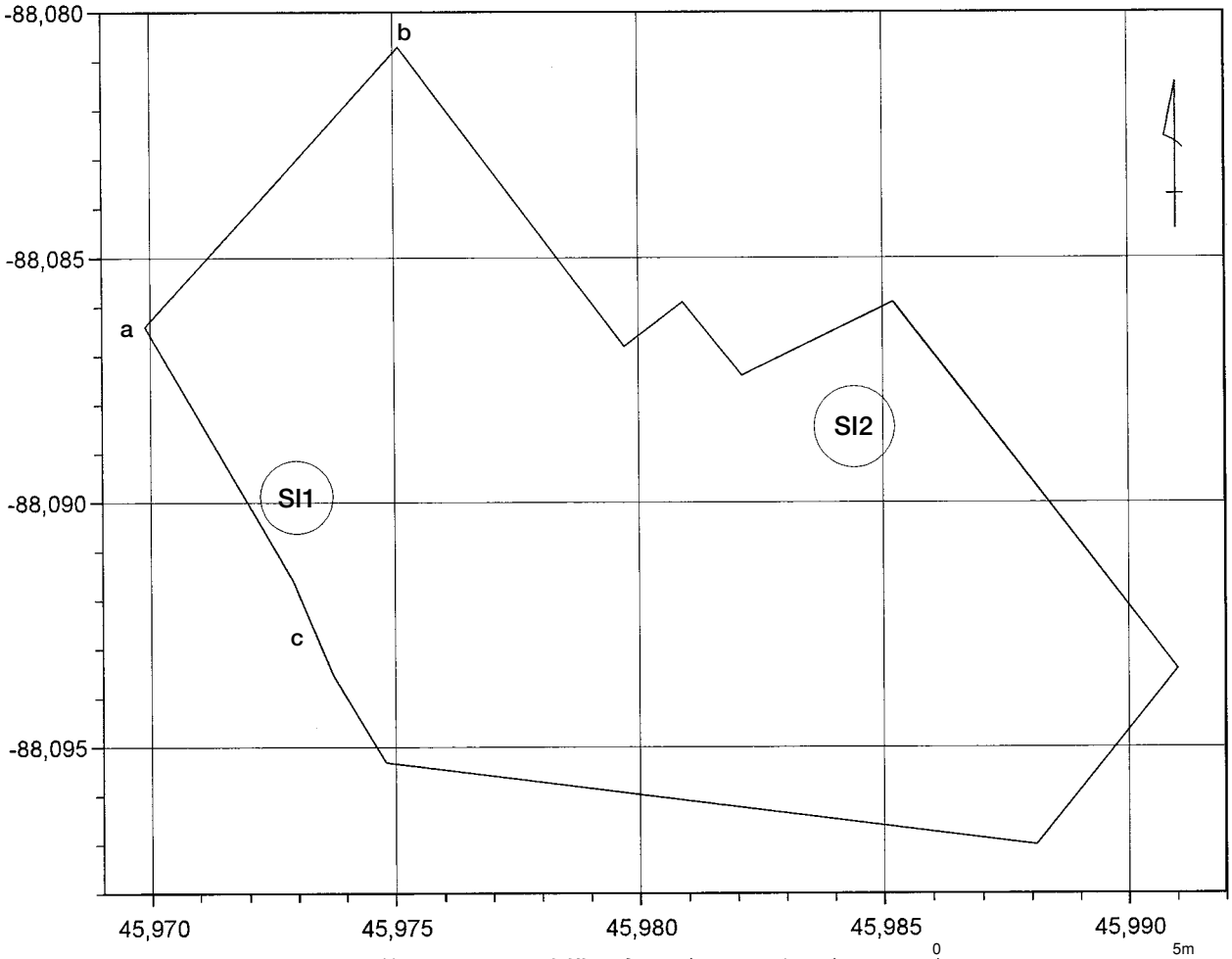
（２）遺構（礫群）

【ＳＩ１】（第20図)

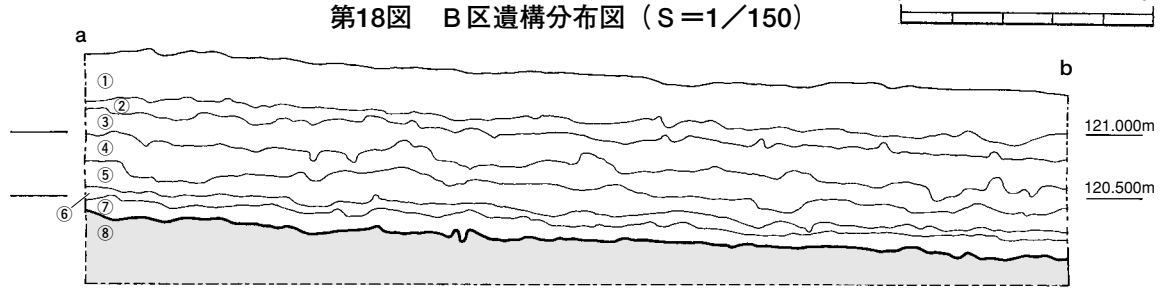
調査区中央に位置し、検出面は第Ⅶ層上面である。長径1.3ｍ、短径1.2ｍの範囲内に径３㎝～７㎝程度の小礫と12㎝～15㎝の比較的大きな礫とで構成されている。点数は45点で掘り込みはみられない。

【ＳＩ２】（第21図）

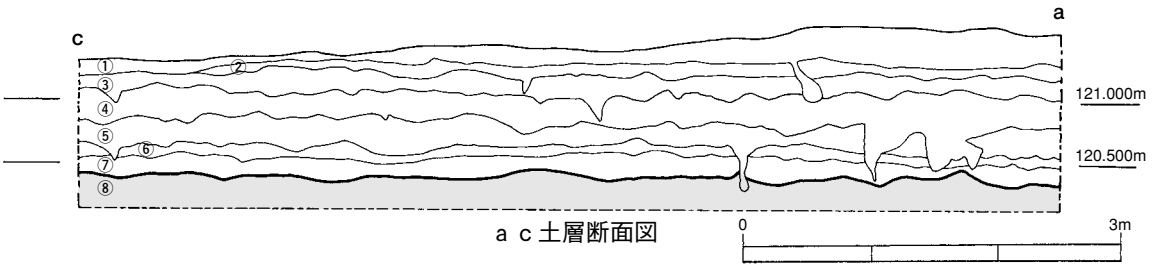
SI1から東へ約15ｍに位置し、検出面は第Ⅵ層下部である。長径1.5ｍ、短径1.2ｍの範囲内に径５㎝～10㎝のやや小ぶりの礫で構成されている。点数は72点で掘り込みはみられない。



第18図　B区遺構分布図（S＝1／150）



a b 土層断面図

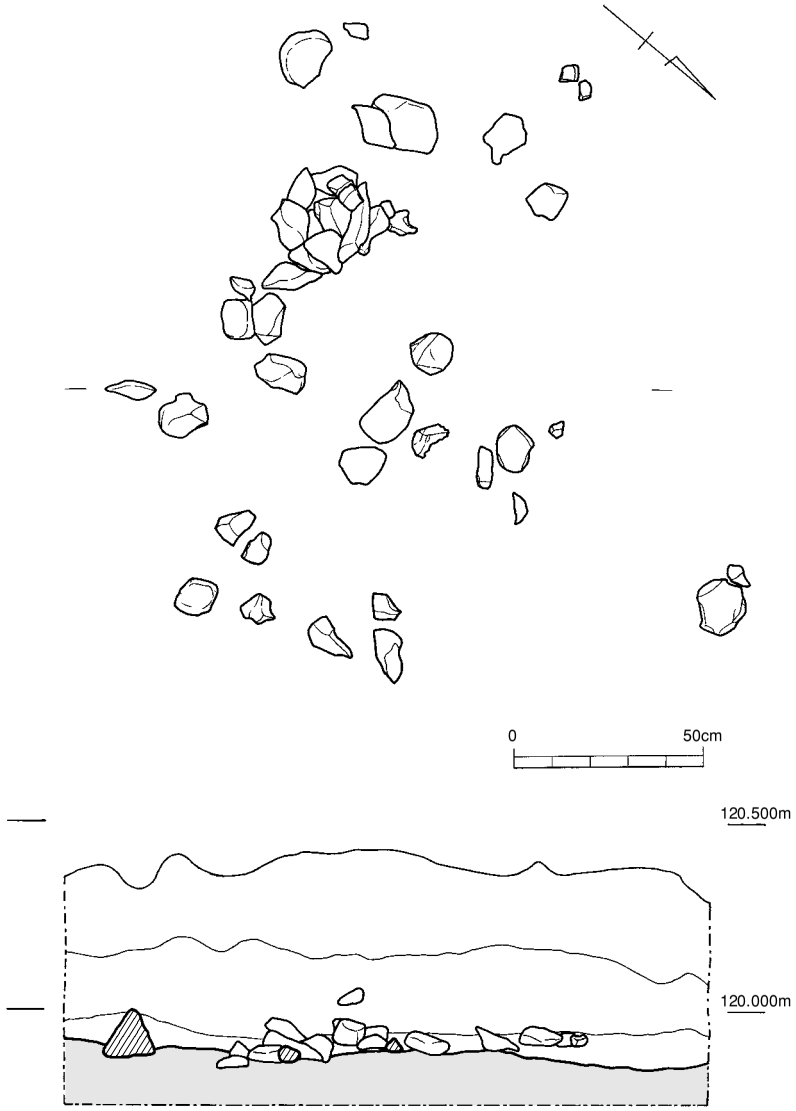


a c 土層断面図

第19図　B区土層断面図（S＝1／60）

① 第Ⅰ・Ⅱ層　耕作土
② 第Ⅲ層　黄褐色土　(10YR4/6)　アカホヤ粒が全体に混入。やわらかいがしまりがいい。
③ 第Ⅳ層　黒色土　(10YR1.7/1)　固くしまっている。粘性はない。
④ 第Ⅴ層　暗褐色土　(10YR3/3)　固くしまっている。少し粘性がある。
⑤ 第Ⅵ層　暗褐色土　(7.5YR3/3)　Ⅴ層よりやわらない。1～2㎝の丸い褐色土が多数みられる。
⑥ 第Ⅶ層　暗褐色土　(10YR3/4)　1～2㎝の明黄褐色土がみられる。その中に白や橙の粒を含んでいる。
⑦ 第Ⅷ層　褐色土　(7.5YR4/6)　姶良Tn火山灰の一次堆積でしまりがある。
⑧ 第Ⅸ層　黒色土　(7.5YR3/2)　固くしまっている。白い粒が多くみられる。

第21図　礫群（ＳＩ２）実測図(2)（Ｓ＝1／20）



第20図　礫群（ＳＩ１）実測図(1)（Ｓ＝1／20）

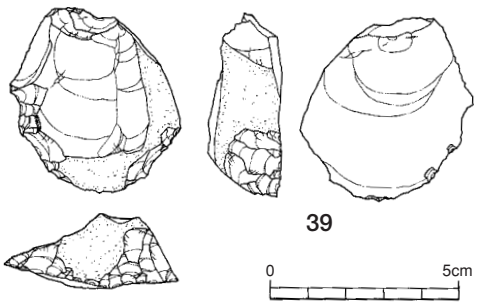
（３）遺物

①第Ⅰ文化層(第Ⅸ層)の遺物

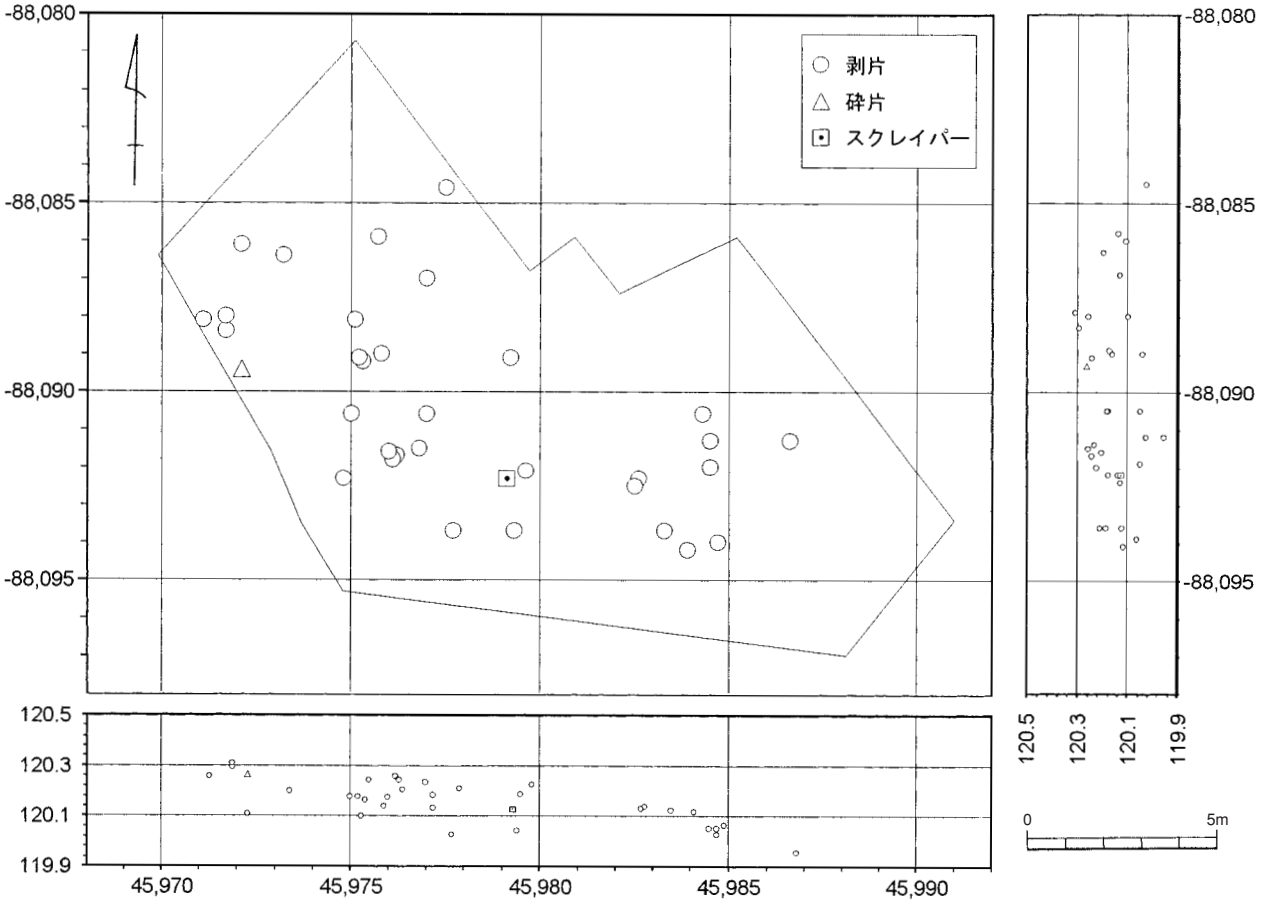
第Ⅰ文化層からは、遺構は検出されず遺物が34点出土した。スクレイパー１点、剥片32点、砕片１点である。なお、製品はスクレイパー１点だったので１点のみ図化した。

【スクレイパー】（第22図39）

流紋岩製のエンドスクレイパーである。円礫を素材とし、素材剥片を剥離している。縁部調整を施す。



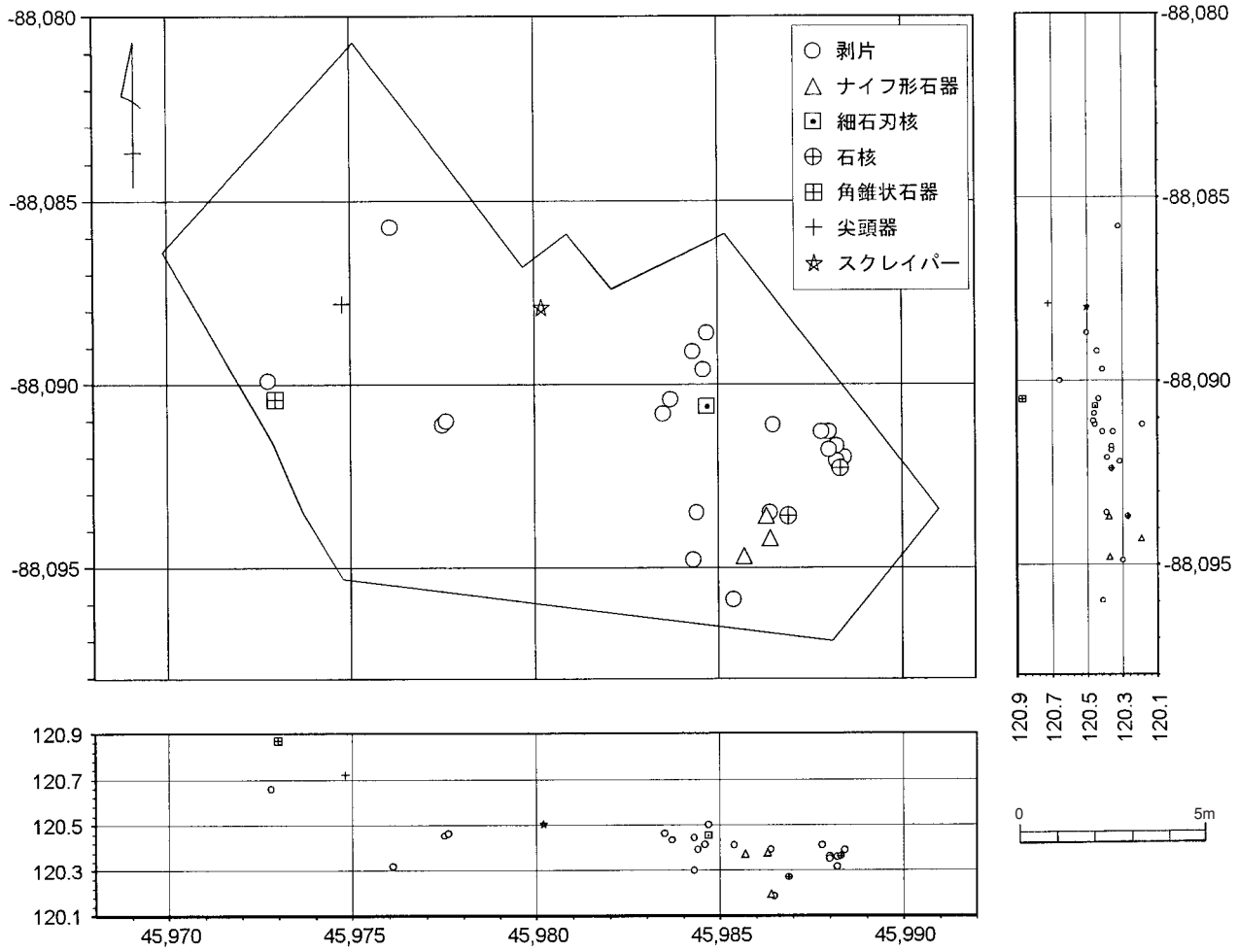
第22図　Ｂ区第Ⅰ文化層遺物実測図（Ｓ＝1／2）



第23図　Ｂ区第Ⅰ文化層遺物分布図（Ｓ＝1／200）

	ナイフ形石器	角錐状石器	スクレイパー	尖頭器	細石刃核	石核	剥片	砕片	合計
ホルンフェルス							15		15
流紋岩			1				2		3
チャート							1		1
黒曜石							0		0
頁岩							14	1	15
合計	0	0	1	0	0	0	32	1	34

第３表　Ｂ区第Ⅰ文化層石器組成表



第24図　B区第Ⅱ文化層遺物分布図（S＝1／200）

②第Ⅱ文化層(第Ⅵ層)の遺物

第Ⅱ文化層からは、遺物が36点出土した。角錐状石器１点、尖頭器１点、ナイフ形石器３点、スクレイパー１点、細石刃核２点、石核２点、剥片26点である。15点（接合資料２点を含む）を図化した。なお、41、45、48～53は注記では第Ⅰ文化層(第Ⅸ層：旧Ⅷ層)に相当すると記載していたが注記時の間違いであり実際は第Ⅱ文化層(第Ⅵ層)に相当する。

【ナイフ形石器】（第25図40、41）

40は、頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とする一側縁加工。左側縁部を腹面から調整を施す。41は、赤チャート製の両縁調整ナイフ形石器である。右側縁部に腹面から調整を入れ刃潰し加工を施す。

【角錐状石器】（第25図42）

チャート製の角錐状石器である。右側面に稜上側からと背面側から調整加工している。先端は欠損している。

【尖頭器】（第25図43）

ホルンフェルス製の尖頭器である。縦長剥片素材の尖頭器である。

【スクレイパー】（第25図44）

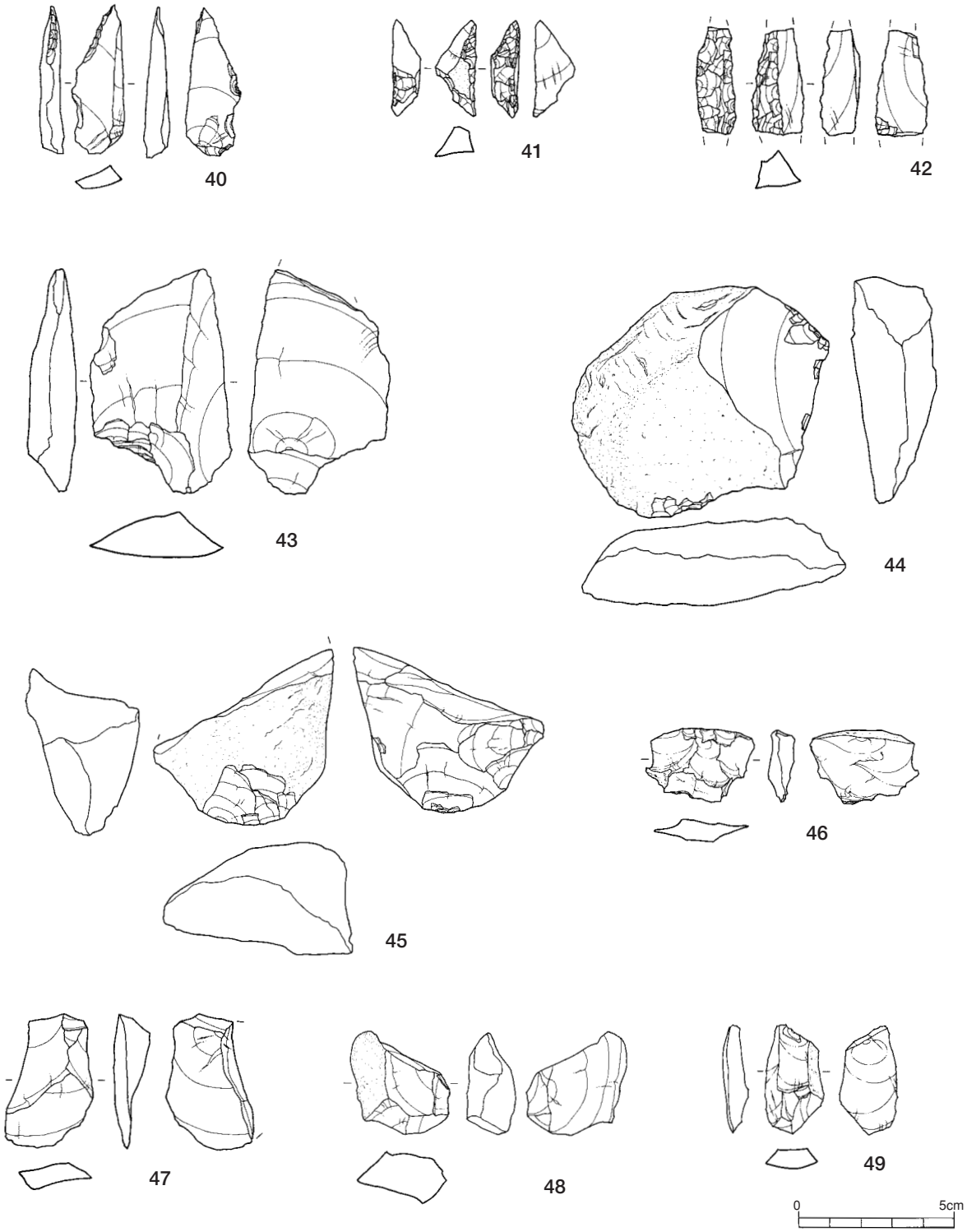
流紋岩製のスクレイパーである。刃部に腹面からの打撃による剥離痕を残す。

【石核】（第25図45）

ホルンフェルス製の石核で自然面を残す。風化が激しい。礫分割後腹面から剥片を剥離した形跡をもつ。

【剥片】（第25図46～49）

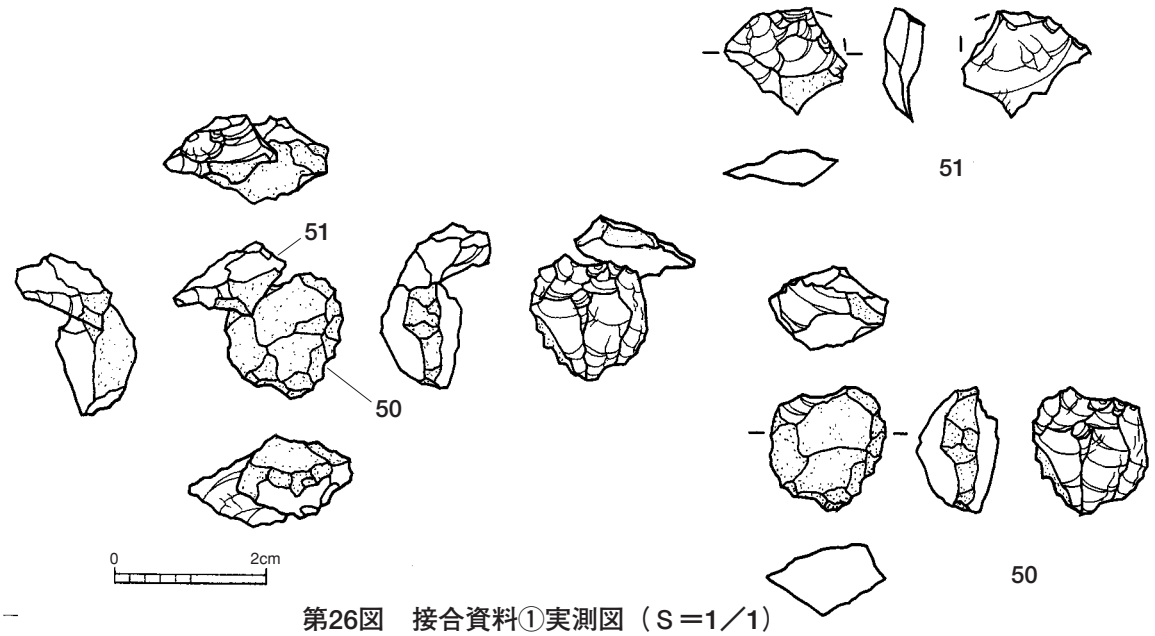
46は頁岩の剥片である。背面上部に剥離痕を残す。中央に剥片剥離面を残す。47は、チャート製の剥片である。小型の縦長剥片で背・腹面に剥離痕を残す。48はホルンフェルス製の剥片である。右側面に自然面を残す。背面に剥片剥離痕が残る。49はホルンフェルス製の剥片である。左側面に自然面を残す。下面に剥片剥離痕を残す。



第25図　Ｂ区第Ⅱ文化層遺物実測図（Ｓ＝1／2）

【接合資料①】（第26図50、51）

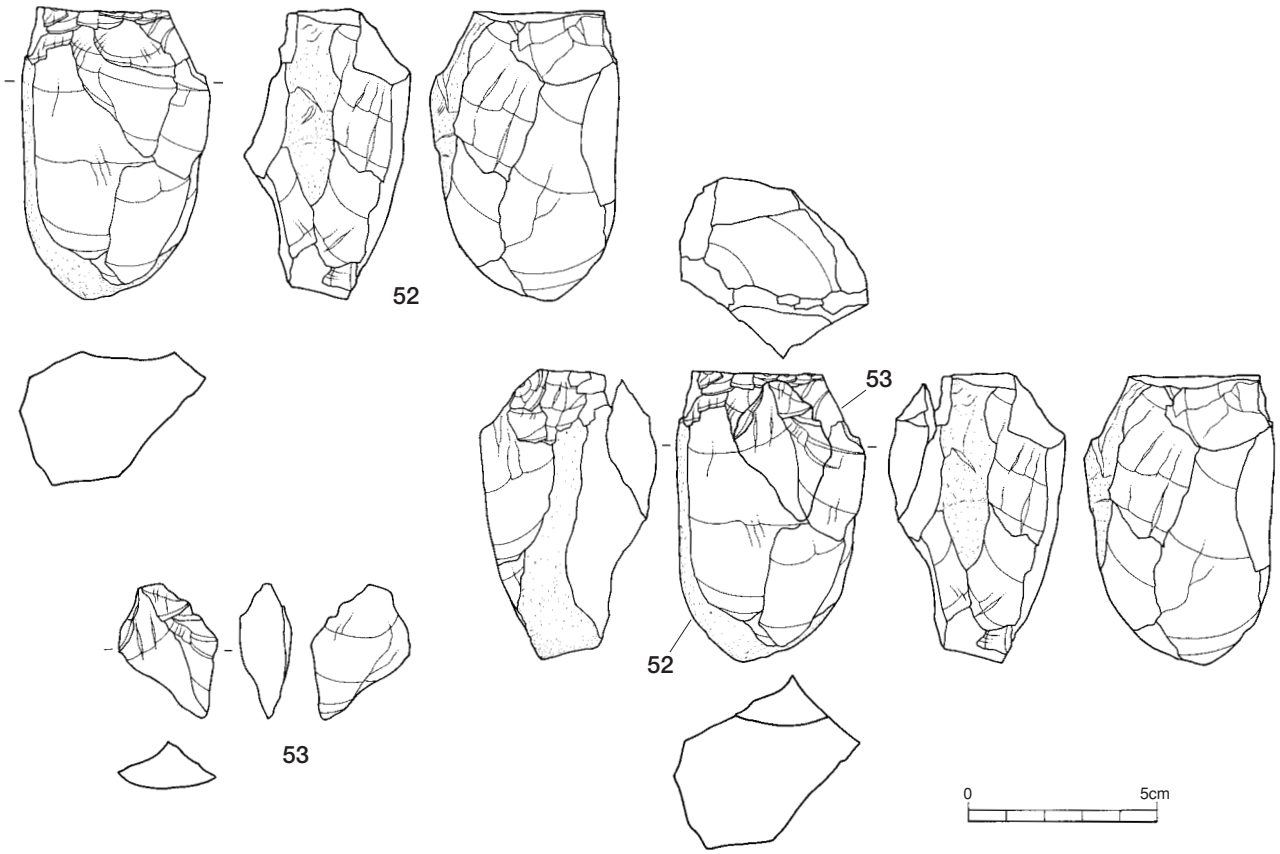
50は黒曜石製の細石刃核である。正面に自然面を残す。接合する51の剥片を剥離して打面を作成した後、細石刃を剥離する。51は黒曜石の剥片である。細石刃核に剥片が接合する非常に珍しい遺物である。



第26図　接合資料①実測図（Ｓ＝1／1）

【接合資料②】（第27図52、53）

52はホルンフェルス製の石核である。左側面に自然面を残す。上面に打面を作り、打面を回転させて剥片剥離を繰り返す。53は、連続して剥離された剥片の１点である。



第27図　接合資料②実測図（Ｓ＝1／2）

	ナイフ形石器	角錐状石器	スクレイパー	尖頭器	細石刃核	石核	剥片	砕片	合計
ホルンフェルス				1		2	20		23
流紋岩			1				1		2
チャート	1	1					1		3
黒曜石					2		1		3
頁岩	2						3		5
合計	3	1	1	1	2	2	26	0	36

第４表　Ｂ区第Ⅱ文化層石器組成表

レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	接合No.	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
39	67	Ⅸ	Ⅷ-67	スクレイパー		-88092.200	45979.300	120.126	4.85	4.60	1.95	45.1
40	79	Ⅵ	Ⅳ-79	ナイフ形石器		-88094.300	45986.400	120.193	4.80	1.80	0.70	5.8
41	86	Ⅵ	Ⅷ-86	ナイフ形石器		-88093.700	45986.300	120.377	3.15	1.30	0.90	3.5
42	3	Ⅵ	Ⅳ-３	角錐状石器		-88090.500	45973.000	120.867	3.50	1.70	1.20	7.3
43	9	Ⅵ	Ⅳ-９	尖頭器		-88087.900	45974.800	120.717	7.20	4.60	1.45	46.0
44	12	Ⅵ	Ⅳ-12	スクレイパー		-88088.000	45980.200	120.502	7.30	8.50	2.70	167.9
45	88	Ⅵ	Ⅷ-88	石核		-88093.700	45986.900	120.269	5.55	5.95	3.60	91.5
46	1	Ⅵ	Ⅳ-１	剥片		-88090.000	45972.000	120.977	2.40	3.50	0.80	6.10
47	17	Ⅵ	Ⅳ-17	剥片		-88090.000	45972.800	120.657	4.35	2.85	0.85	8.1
48	95	Ⅵ	Ⅷ-95	剥片		-88091.400	45987.800	120.410	3.50	1.90	0.65	4.80
49	99	Ⅵ	Ⅷ-99	剥片		-88088.700	45984.700	120.501	3.35	3.20	1.65	14.5
50	85	Ⅵ	Ⅷ-85	細石刃核	85+98で接合	-88090.700	45984.700	120.451	1.65	1.50	1.10	2.3
51	98	Ⅵ	Ⅷ-98	剥片	85+98で接合	-88089.200	45984.300	120.443	1.40	1.70	0.50	0.8
52	89	Ⅵ	Ⅷ-89	石核	89+94で接合	-88092.400	45988.300	120.361	7.90	5.00	3.55	175.3
53	94	Ⅵ	Ⅷ-94	剥片	89+94で接合	-88091.400	45988.000	120.351	3.55	2.60	1.80	8.2
54	ｶｸﾗﾝ	-	ｶｸﾗﾝ	細石刃核		-	-	-	1.75	0.90	0.75	2.3

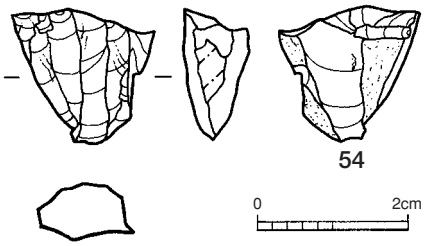
※注記の際にまちがいがあり、レイアウトNo.39以外の旧Ⅷ層は旧Ⅳ層（現Ⅵ層）に相当する。

第５表　Ｂ区石器計測表

（４）調査区内遺物

【細石刃核】（第28図54）

攪乱より黒曜石製の細石刃核が出土した。上部からの打撃で複数枚の細石刃を作り出している。



第28図　出土遺物実測図（Ｓ＝1／1）

（５）小結

Ｂ区において、後期旧石器時代を出土層位、遺構、遺物から２つの文化層に分けて特徴を述べてきた。遺構は礫群が２基検出された。２基とも掘り込みはみられないが、使用礫の大きさに大小に差があった。検出位置は、Ⅵ層下部からⅦ層上面であり２基の礫群はほぼ同時期の所産と考えられ第Ⅱ文化層の遺物との関連が推察される。

第Ⅰ文化層の遺物は、調査区全体に広がっている。製品は、流紋岩製のスクレイパー１点のみであった。剥片はホルンフェルスがほとんどであったためスクレイパーは他からの持ち込みの可能性が大きい。

第Ⅱ文化層の遺物は、調査区東側に集中して出土した。ナイフ形石器、細石刃核、角錐状石器といった製品が数多くみられたことも特徴の一つである。黒曜石の細石刃核と剥片の接合もみられた。打面を作るために剥離した剥片との接合である。細石刃が出土しなかったのは残念である。

2　G区の調査（縄文時代草創期の遺物）

（1）概要

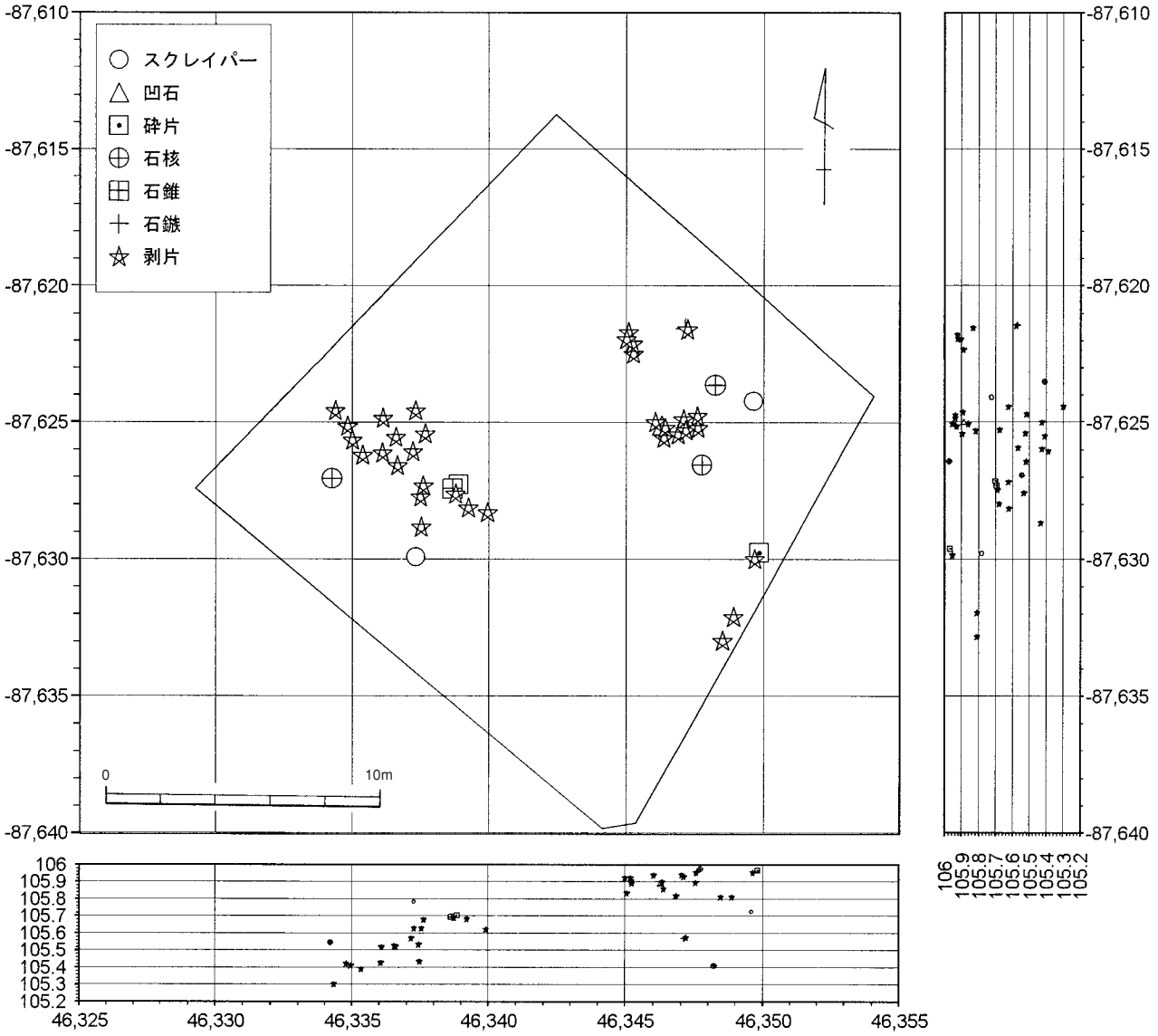
Ｇ区は、調査区の北側に位置する。調査前は水田であったが、縄文時代草創期の旧地形は、東に延びる丘陵先端部を流れる小河川の河畔付近と復原できた。その岸辺に遺物が集中するあり方を示す。

調査当初は確認調査の結果から第Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層の３層に遺物の存在が想定されていたため、調査時も３層に区分して遺物の取り上げを行った。

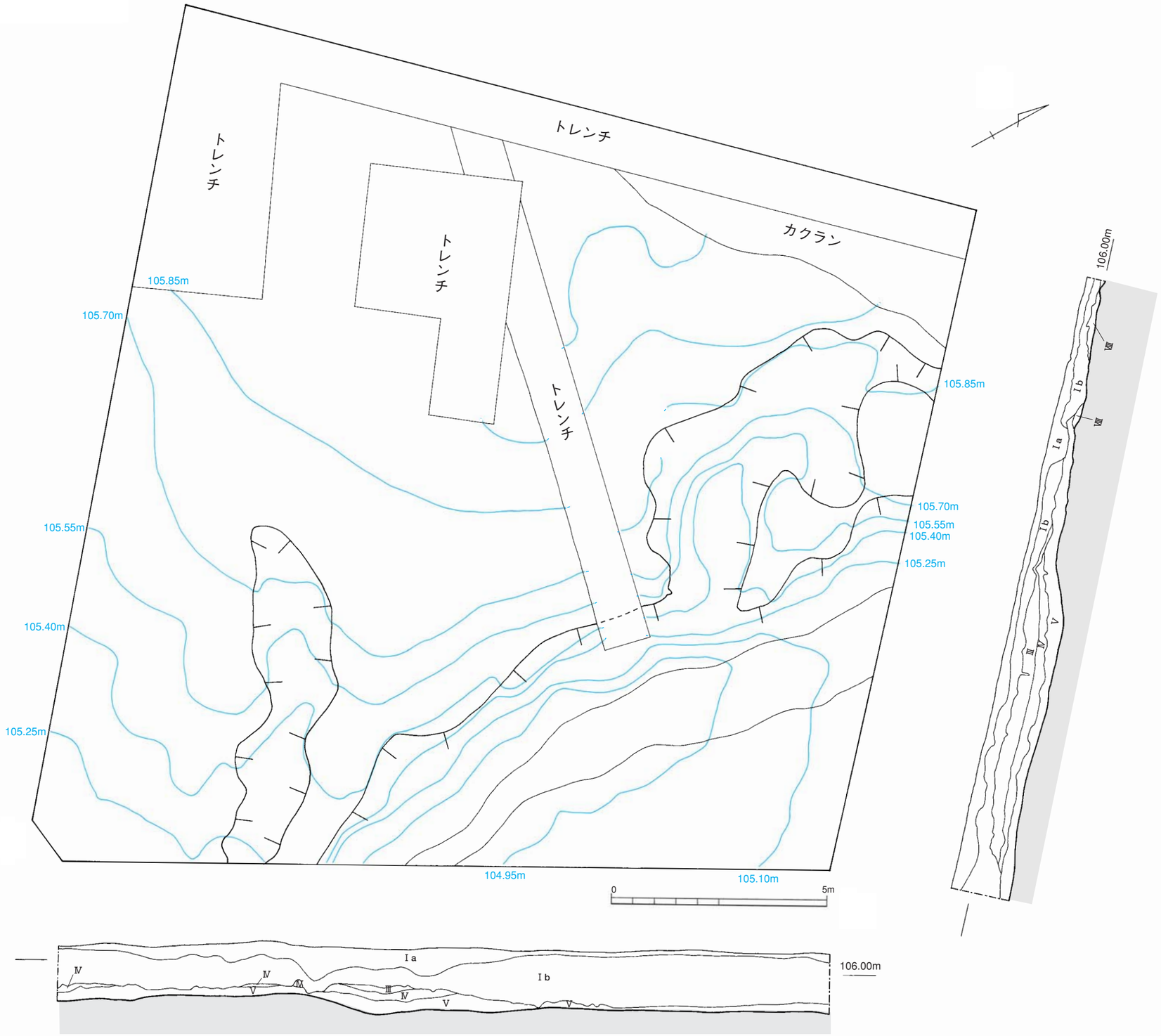
しかし、整理作業において調査時の土層の記録や出土遺物、石材構成等を検討した結果、それまで第Ⅳ層としていた層を基本層序の第Ⅳ層上部に、第Ⅴ層としていた層を同Ⅳ層下部に、また、第Ⅵ層としていたものを同第Ⅴ層に変更した。以下、この基本層序で報告する。

（2）第Ⅰ文化層（第Ⅴ層）の遺物

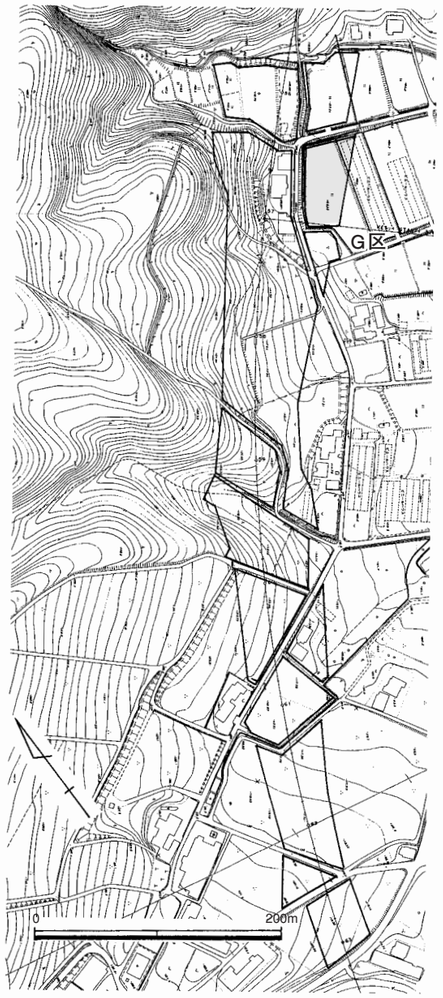
第Ⅰ文化層の器種及び石材組成は第６表に、分布状況は器種ごとに第29図に示している。第Ⅰ文化層からは遺構は検出されず、遺物が44点出土した。石鏃１点、スクレイパー２点、石錐１点、石核３点、剥片34点、砕片２点、凹石１点である。８点を図化した。以下器種ごとの詳細は第７表石器計測表を参照されたい。



第29図　Ｇ区第Ⅰ文化層遺物分布図（Ｓ＝1／250）



第30図　G区地形図（S＝1／100）



Ⅰa層　表土
黒。しまりがなくK-Ahが混じる。

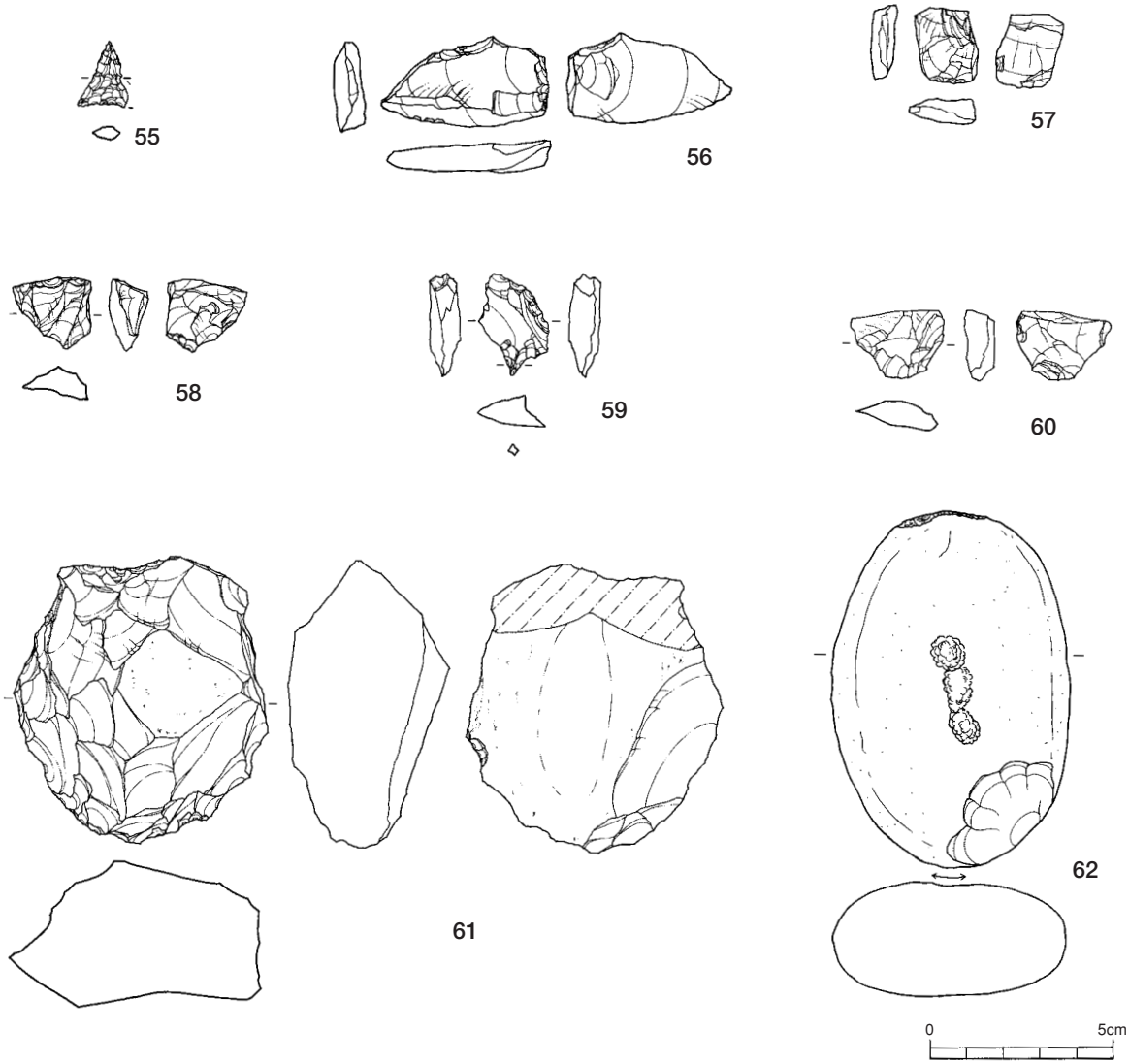
Ⅰb層　撹乱土
Ⅰ層に比べ固くしまり、K-Ahがブロック状に混じる。

Ⅲ層　黄褐色土（10YR5/8）
アカホヤ火山灰（K-Ah）白色細粒を含み、下部は黒味を帯びる。

Ⅳ層　黒色土（10YR2/1）
MB0相当層。削るとサラサラしておりやわらかい。黒味が強い。

Ⅴ層　黒褐色土（10YR2/2）
しまりがある。深いところには扇状ににぶく黄褐色の粘土質土がまじり、水の影響を受けていると思われる。ML1相当層。

Ⅷ層　褐色土（7.5YR4/6）
姶良丹沢（AT）層に相当する。北東壁にわずかに残る。



第31図　Ｇ区第Ｉ文化層遺物実測図（Ｓ＝1／2）

	石鏃	スクレイパー	石錐	石核	剥片	砕片	凹石	合計
ホルンフェルス		1		1	21			23
流紋岩					1			1
チャート	1	1	1	1	8			12
黒曜石					1	2		3
頁岩				1	3			4
尾鈴山酸性岩類							1	1
合計	1	2	1	3	34	2	1	44

第６表　Ｇ区第Ｉ文化層石器組成表

レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	石材	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
55	12	V	V－12	石鏃	チャート	-87621.457	46367.127	105.568	1.80	1.40	0.40	0.6	打面は基部の一部を除き腹面側に集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
56	28	V	V－28	スクレイパー	チャート	-87624.091	46357.298	105.726	2.00	1.80	0.70	3.1	背面下部に微細な剥離痕を認める。
57	43	V	V－43	スクレイパー	ホルンフェルス	-87629.794	46369.591	105.979	2.50	4.60	0.90	7.3	刃部に腹面からの打撃による剥離痕を残す。
58	19	V	V－19	石錐	チャート	-87627.329	46358.655	105.692	2.80	1.95	0.90	3.8	背腹両面とも素材面を残す。錐部は主に背面側の調整で作り出す。
59	15	V	V－15	剥片	チャート	-87621.981	46365.199	105.919	1.90	2.70	0.80	3.8	背面に不定形剥片の剥離痕を有す。
60	32	V	V－32	石核	チャート	-87623.533	46354.234	105.408	1.95	2.20	1.10	4.1	多方向から不定形の剥片を剥離した痕跡をもつ。
61	34	V	V－34	石核	ホルンフェルス	-87626.462	46367.730	105.972	7.90	7.00	4.40	266.9	打面を左右両面、上面を転位させながら連続して剥片を剥離する。
62	45	V	V－45	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87625.01	46346.26	105.89	9.80	6.70	3.10	279.3	一部欠損はあるが表面中央のみに凹を残す。

第７表　Ｇ区第Ⅰ文化層石器計測表

（３）第Ⅱ文化層（第Ⅳ層）の遺物

①土器

土器は全て破片で145点出土した。多くは第Ⅳ層下部より縄文時代草創期の隆帯文土器が出土した。一見轟Ｂ式土器に類似しているが、アカホヤ火山灰より下層での出土から草創期の隆帯文土器と断定しても差し支えないと考えられる。また、第Ⅳ層上部より縄文時代早期の無文土器も数点出土した。本遺跡出土の土器は文様帯構成から６類に分類される。

縄文時代草創期の土器

Ⅰ類（第33図63～65）

【隆帯文列の下に文様を施していない土器】

63は、口縁部の隆帯文は、６条である。その位置は口唇部直下から貼り付けられたものである。粘土紐指押さえによる爪先圧痕が矢羽根状にみられる。隆帯の断面形は三角形である。口唇部には、爪形文の刻み目が施されている。

64は、口唇部が欠損しているが、少なくとも隆帯文を５条確認できる。１と同じく粘土紐指押さえによる爪先圧痕が羽根状にみられ、断面形も三角形である。

65は、上部がほとんど欠損しており、胴部しか残存していない。隆帯文が縦に施されている。

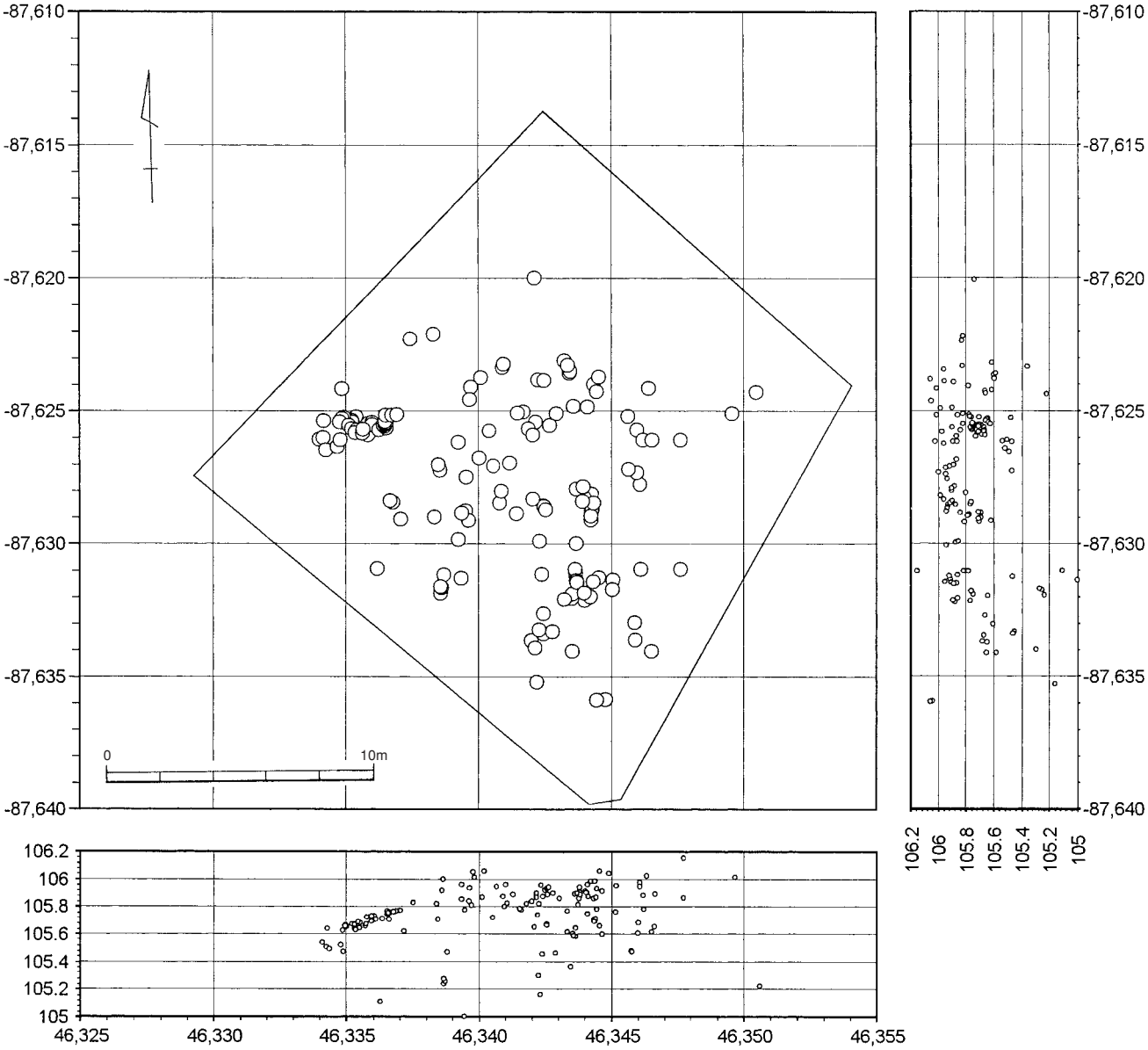
Ⅱ類（第33図66～69　第34図70～73）

【上面が隆帯文列で下面に爪形文を施した土器】

66は、隆帯文が４条施してある。矢羽根状の爪先圧痕がみられる。また、口唇部にも刻みがある。その下面に爪形文が１条施されている。爪形文は、浅く細く右上がりに施してある。

67は、隆帯文が６条施してある。左上がりの爪先圧痕がみられ、口唇部にも刻みがある。その下面に爪形文が１条施されている。爪形文は２よりも深くはっきり確認できる。右上がりに施してある。

68は、貼り付けた隆帯文の中央に横方向の切れ込みを入れて２条としている。その上に斜め方向の爪形状文を施している。隆帯文直下に爪形文を１条浅



第32図　G区第Ⅱ文化層土器分布図（S＝1／250）

く右上がりに施してある。

69は、隆帯文を５条確認できる。矢羽根状の爪先圧痕がみられ、隆帯文の断面はかまぼこ形である。その直下に爪形文が１条施してある。

70は、隆帯文を２条確認できる。補修孔と考えられる円形の穿孔がある。隆帯文直下に爪形文を１条施している。細く右上がりに施してある。

71は、隆帯文を２条確認できる。風化気味で爪先圧痕は確認できない。隆帯文直下に爪形文が２条施されている。上段は幅が狭く細い。下段は、上段よりも幅が広く細い。

72は、隆帯文を３条確認できる。矢羽根状の爪先圧痕がみられる。18と同じように爪形文が２条施されている。上段下段とも同じようにやや丸みを帯びている。

73は、１条の隆帯文が確認できる。矢羽根状の爪先圧痕がみられる。その直下に爪形文が１条施されている。他の爪形文と違い幅が広く丸みを帯びている。

Ⅲ類（第34図74）【爪形文が施された土器】

74は外面に爪形文を施している口縁部である。口唇部にも浅い爪形文が施してある。爪形文は、ほとんどが右上がりに施してある。

Ⅳ類（第34図75）

【カーブを描く垂下隆帯文を有する土器】

75の突帯は、断面は三角形である。口唇部直下に一条の隆帯文と「ノ」の字条の隆帯文が確認できる。口唇部にも刻み目の文様が施されている。

Ⅴ類（第34図76～85）

【Ⅰ類Ⅱ類のどちらともいえないもの】

隆帯文の部分しか残存していないので、その下に文様が施してあるのかないのか判断できない。

76、77は口唇部に刻みが施してある。口唇部直下から隆帯文（76は４条、77は２条）が確認できる。矢羽根状の爪先圧痕がみられる。断面形は三角形である。

78は、口唇部に刻みが施してある。口唇部直下から隆帯文が確認できる。隆帯文の摩耗が激しく爪先圧痕は不明瞭である。

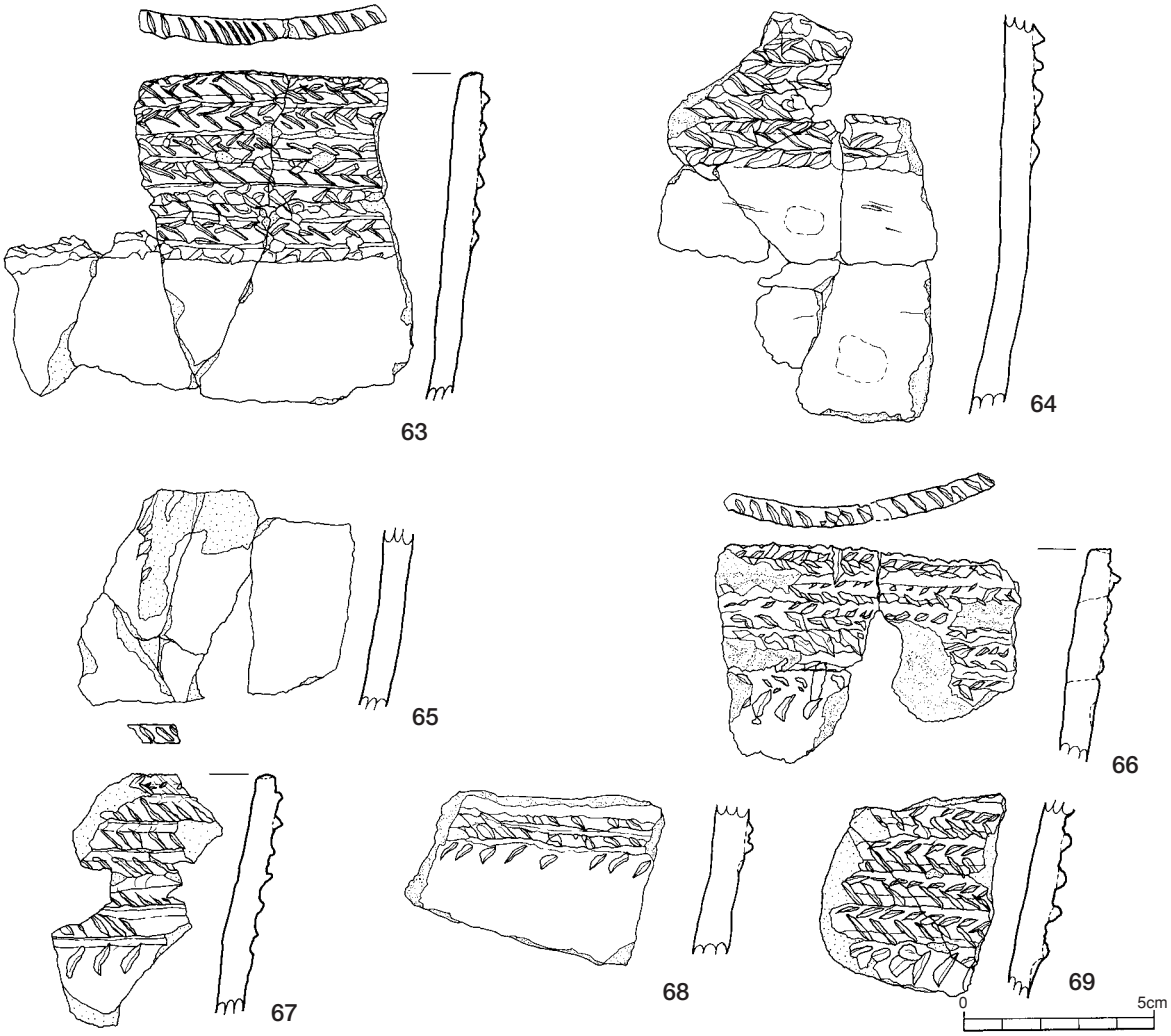
79、80は、口唇部に刻みが施してある。口唇部直下から隆帯文（79は４条、80は８条）が確認できる。矢羽根状の爪先圧痕がみられる。

81、82、83は口唇部に刻みはなく平坦である。口唇部直下から隆帯文（81は５条、82、83は４条）が確認できる。爪先圧痕は不明瞭だが一部確認できる。83には、補修孔と考えられる穿孔がみられる。84は３条の隆帯文を有する胴部片である。85は胴部片である。

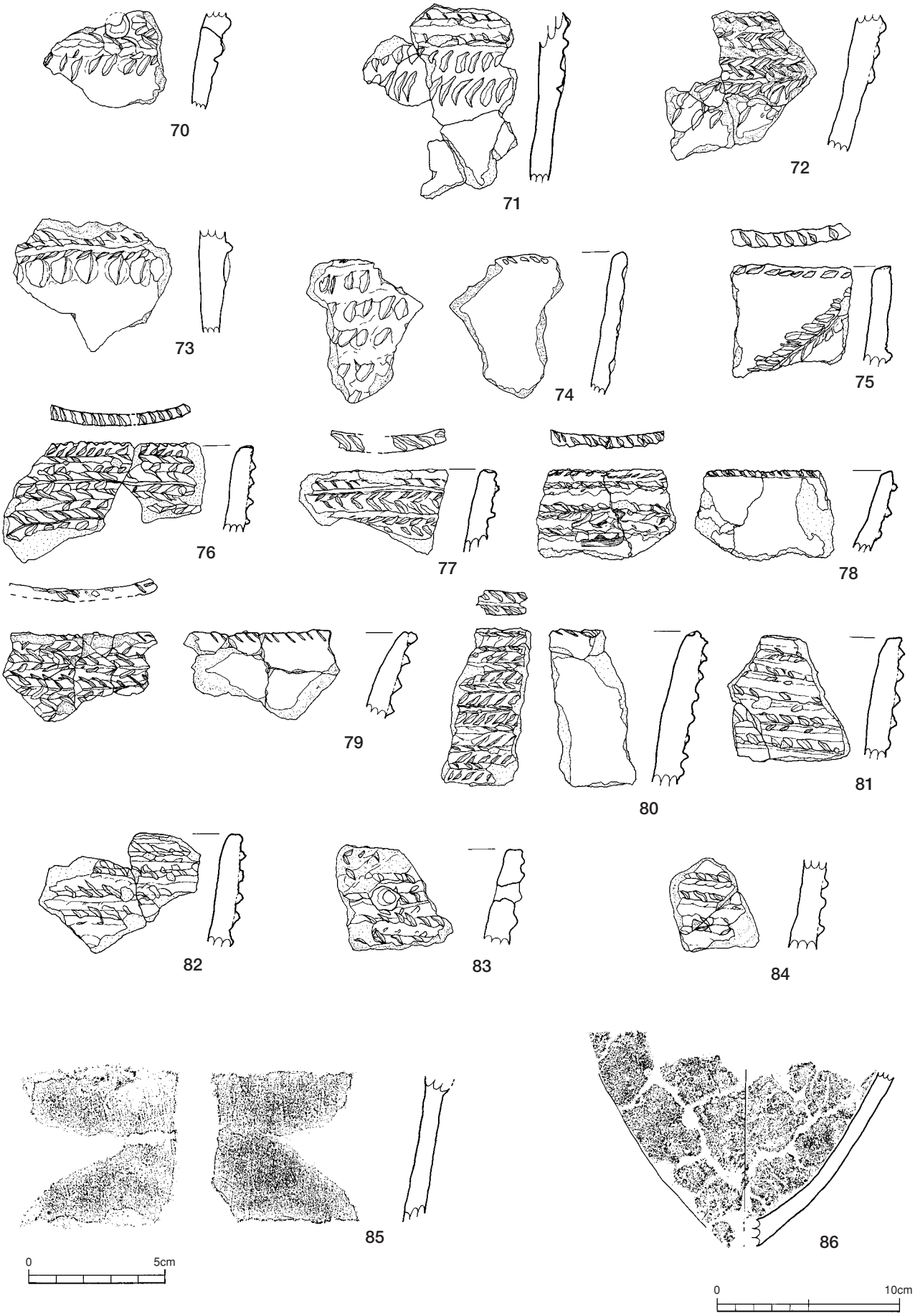
縄文早期の土器

Ⅵ類（第34図86）【文様を有しない土器（無文土器）】

全体に胎土は精良で比較的薄手の作りである。焼成も良好で硬質である。器面調整は内外面ともにナデである。底部は尖底気味の丸底と思われる。



第33図　土器実測図（1）（Ｓ＝1／2）



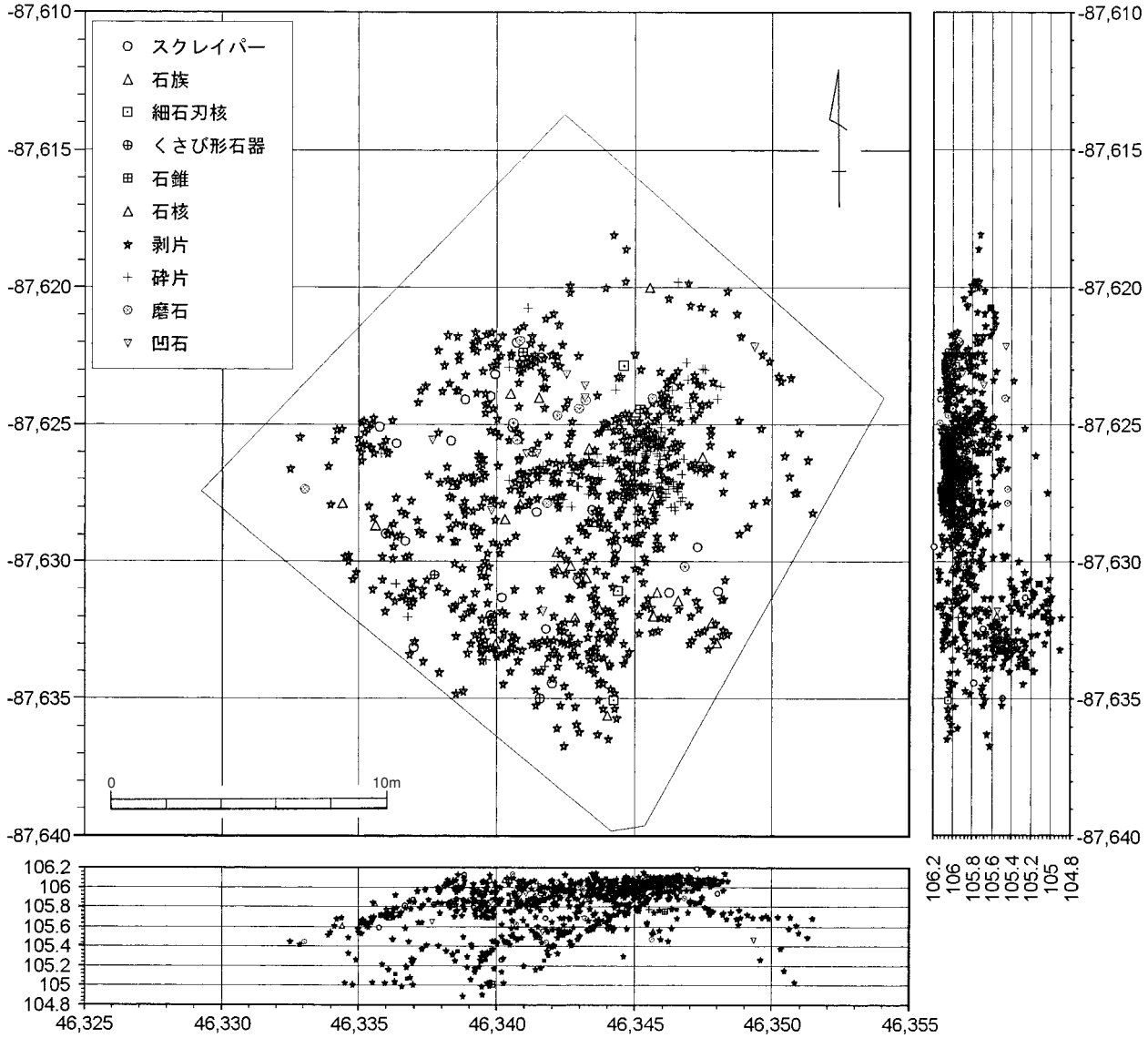
第34図　土器実測図(2)（S＝1／2,86のみ1／3）

番号	種別	器種	部位	番号	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
63	縄文	深鉢	口縁部～胴部	1091 1093				横方向の隆帯文 横方向のナデ 口唇部に刻み	横方向のナデ、一部縦方向のナデ	にぶい黄褐 黒褐	黒褐	良好	2mm以下の乳白色粒、黒色光沢粒、燈色粒、3mm程の小石を含む。4mm程の半透明粒１個。	スス付着
64	縄文	深鉢	胴部	1092 1093				隆帯文、斜め方向の爪形状文 横・斜め方向のナデ 指頭痕か	縦・横・斜め方向にナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	2mm以下の灰白色粒を多く含み、1mm以下のにぶい赤褐色粒をわずかに含む。	
65	縄文	深鉢	胴部	514 1038				縦方向の隆帯文があるが上部がほとんど剥離ナデ	横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	良好	1mm以下の灰白色粒を多く含む。	
66	縄文	深鉢	口縁部	526 585				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	横ナデ	にぶい黄褐	明黄褐	良好	2mm以下の淡黄色の砂粒、1mm以下の赤色の砂粒、3mm以下の黒色の粒石を含む。	
67	縄文	深鉢	口縁部	733				横方向に隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	横ナデ	黒褐	灰黄褐	良好	1mm以下の灰白の粒、2mm程度の黒の粒を含む。	
68	縄文	深鉢	胴部	676				貼り付けた隆帯文の中央に横方向の切れ込みを入れた後斜め方向の爪形状文､横ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mm以下の灰白色と透明の光沢粒を多く含み、1mm程度の柱状の黒色の光沢粒をところどころに含む。	
69	縄文	深鉢	胴部	763				隆帯文、斜め方向の爪形状文	横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	良好	2mm以下の灰白色粒を多く含み、黄褐色粒を少し含む。	
70	縄文	深鉢	胴部	999				隆帯文・斜め方向の爪形状文	横ナデ、風化気味	にぶい黄褐 褐灰	にぶい黄褐 褐灰	良好	1.5mm以下の乳白色粒を多く含む。1mm以下の橙色粒を少し含む。	補修孔あり
71	縄文	深鉢	胴部	918				隆帯文、斜め方向の爪形状文、ナデ	風化気味だがナデか	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白色粒を多く含み、2mm以下の黒色の柱状の光沢粒、灰・褐色粒を少し含む。	
72	縄文	深鉢	胴部	761				隆帯文、斜め方向の爪形状文	横ナデ、指圧痕	褐灰	灰黄褐	良好	1.5mm以下の乳白色粒、灰色粒を多く含む。1mm以下の黒色粒、橙色粒を少し含む。	
73	縄文	深鉢	胴部	1097				隆帯文、縦・斜め方向の爪形状文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	1mm以下の灰白色粒、微細な光沢粒を含む。	
74	縄文	深鉢	口縁部	709				斜め方向に深めの爪形状文	指圧痕、ナデ	灰黄褐	黒褐	良好	3mm以下の乳白色粒、1mm以下の燈色粒、1mm以下の透明粒を含む。	
75	縄文	深鉢	口縁部	674				斜め方向の隆帯文 縦・横・斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	風化気味で不明瞭だが横ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	良好	3ｍｍ以下の灰白色の砂粒を多く含み、1mm以下の半透明な光沢ある白色粒・黒色粒を含む。	
76	縄文	深鉢	口縁部	1014 1179				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	ナデ	にぶい黄燈 黒	にぶい黄燈 褐灰	良好	1mm程の灰白の粒を含む。	黒斑あり
77	縄文	深鉢	口縁部	1100				横方向に隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	風化気味だがナデ	にぶい黄褐 黒褐	にぶい黄燈 褐灰	良好	1mm以下の灰白と褐色の粒を含む。	
78	縄文	深鉢	口縁部	616				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	横ナデ 斜め方向ナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	良好	2ｍｍ以下の灰白色粒、半透明の白色粒、黒色粒を多く含む。	口唇部にスス付着か
79	縄文	深鉢	口縁部	295				横方向に隆帯文 斜め方向に爪形状文	斜め方向に爪形状文 ナデ	灰黄褐 黒褐	にぶい黄褐 黒褐	良好	2mm以下の乳白色粒、燈色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む。	スス付着か？
80	縄文	深鉢	口縁部	953				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻み	ナデ、指圧痕	灰褐	にぶい褐	良好	2mm以下の灰・灰白色粒を含む。	
81	縄文	深鉢	口縁部	849				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文 口唇部に刻みか	風化気味で不明瞭だがナデか	明褐	にぶい褐	良好	2mm以下の灰白色粒、光沢ある微粒を含む。	
82	縄文	深鉢	口縁部	1021 1118				横方向の隆帯文 斜め方向に爪形状文	風化気味で不明瞭だがナデか	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mm以下の灰白色粒、2mm程度の灰褐色粒を含む。	
83	縄文	深鉢	口縁部	723				全体的に風化気味だが隆帯文・爪形状文	風化気味だが横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	5mm以下の灰褐色粒をわずかに含み、2mm以下の灰白色粒・にぶい赤褐色粒、半透明で光沢ある白色・黒色の微細粒を含む。	補修孔あり
84	縄文	深鉢	胴部	1021				隆帯文、斜め方向の爪形状文	風化気味だがナデ	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mm以下の灰白色と透明の光沢粒を多く含む。	
85	縄文	深鉢	胴部	357 358				隆帯文　ナデ	ナデ、縦方向に工具痕？	にぶい黄橙	黒 灰黄褐	良好	1mm以下の灰白色粒を多く含む。	
86	縄文	深鉢	胴部～底部付近	439 732 他				風化気味だがナデ	摩滅激しいがナデか	橙	橙 褐灰	良好	2～5mm程度の小石を少し含む。2mm以下の乳白色微細粒を多く含む。	

第８表　Ｇ区土器観察表

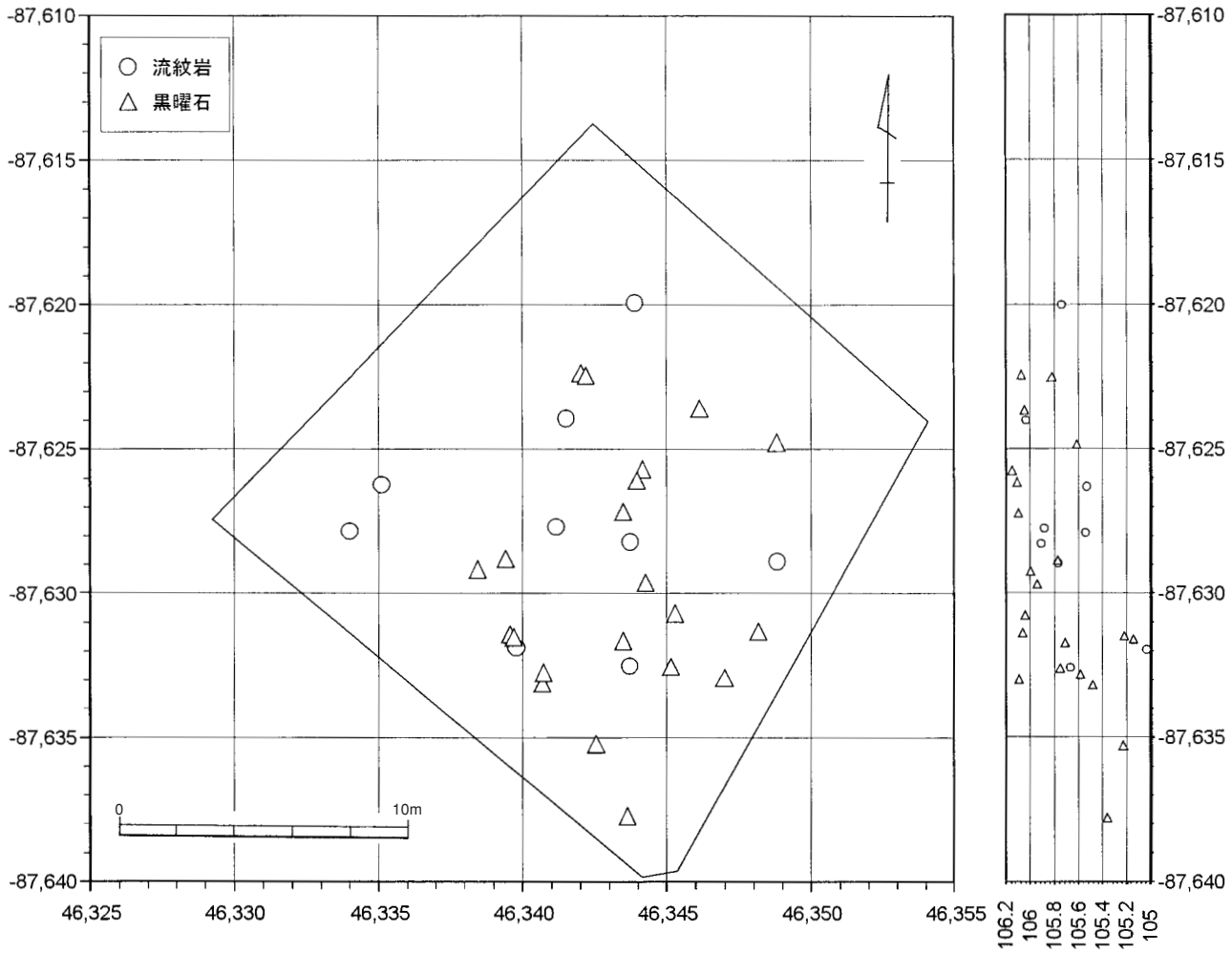
②石器

第Ⅱ文化層からは遺物が1,099点出土した。（第35図）石鏃38点、スクレイパー26点、石錐３点、石核18点、くさび形石器３点、細石刃１点、細石刃核２点、剥片808点、砕片179点、凹石９点、磨石11点である。94点を図化した。石鏃は正三角形、二等辺三角形のものが多数出土した。基部に抉りのあるものも数点みられる。詳細は第９～14表の石器計測表を参照されたい。遺物の器種及び石材組成は第15表に示している。

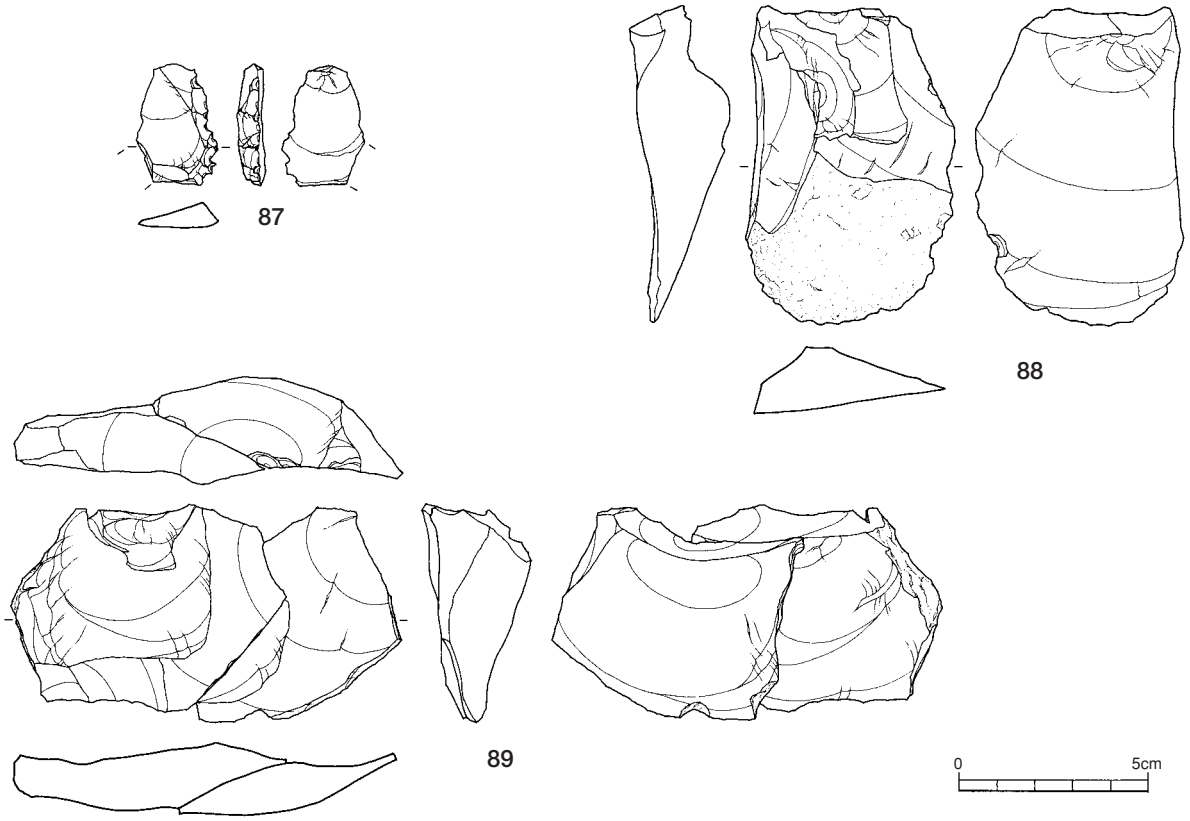


第35図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物分布図（Ｓ＝1／250）

分布状況については、黒曜石・流紋岩ともに数点しか出土しておらず散在している。黒曜石は、全て小剥片であったため図化していない。チャート及びホルンフェルスは、調査区全体に広がっているが特に中央部付近に集中している。旧地形の岸辺にあたる部分で多く出土した。剥片が多数を占めるため石器製作の場であったと考えられる。頁岩も調査区全体に広がっており層上位に多く集まっている。詳しい分布図は石材ごとに第36、38、41、44、46図に、礫石器は第47図に示している。



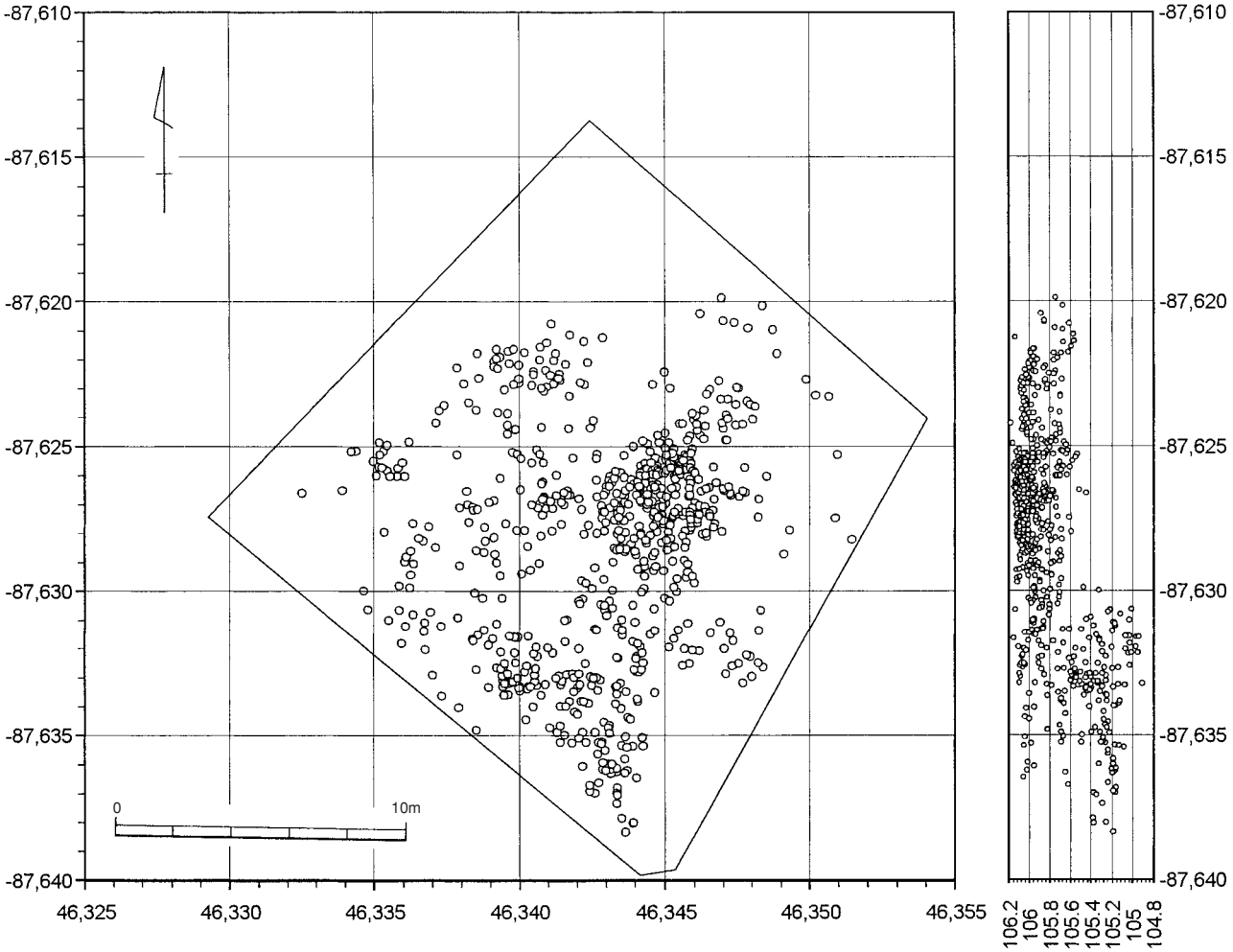
第36図　G区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図（黒曜石・流紋岩）（S＝1／250）



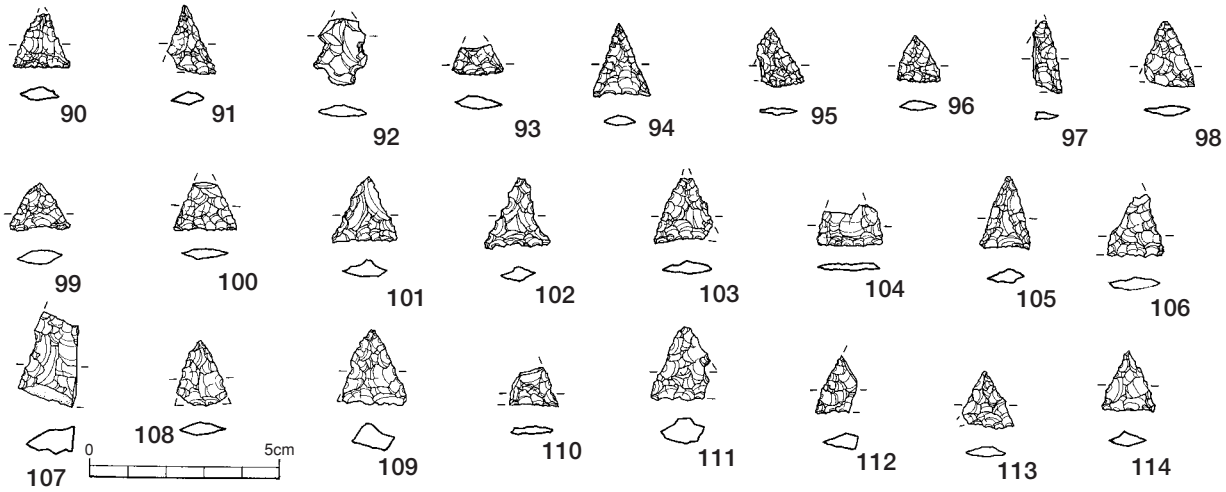
第37図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（流紋岩）（S＝1／2）

レイアウトNo	遺物No	遺跡層序	注記番号	器種	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
87	161	Ⅳ	V - 161	スクレイパー	-87625.384	46347.768	106.065	3.20	2.25	0.70	5.2	右側面に背面からの調整を施し、刃部を作り出している。
88	1203	Ⅳ	V - 1203	剥片	-87627.964	46339.460	105.702	8.40	5.55	1.70	116.8	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。
89	1175	Ⅳ	V - 1175	剥片	-87630.193	46339.726	105.687	5.80	10.40	2.90	129.6	背面上部に剥片を剥離した痕跡を残す。

第９表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表（流紋岩）



第38図　Ｇ区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図（チャート）（Ｓ＝1／250）



第39図　Ｇ区第Ⅱ文化層遺物実測図（チャート）(1)（Ｓ＝1／2）

第40図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（チャート）(2)（S＝1／2）

レイアウトNo	遺物No	遺跡層序	注記番号	器種	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
90	66	Ⅳ	Ⅳ - 66	石鏃	-87627.066	46343.286	106.113	1.45	1.50	0.35	0.8	打面は基部の一部を除き腹面側に集中。両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
91	120	Ⅳ	Ⅳ - 120	石鏃	-87631.565	46340.326	105.029	1.80	1.30	0.35	0.5	背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。打面は背面に集中するが背面右側は腹面側に集中。
92	168	Ⅳ	Ⅳ - 168	石鏃	-87636.179	46343.185	105.189	1.75	1.40	0.30	0.3	腹面側に素材面を多く残す。腹面側にも調整を施す。打面は背面側に集中。
93	176	Ⅳ	Ⅳ - 176	石鏃	-87636.660	46342.748	105.237	0.80	1.35	0.35	0.6	背腹両面とも素材は残さず。打面は背面右側をのぞき背面側に集中。

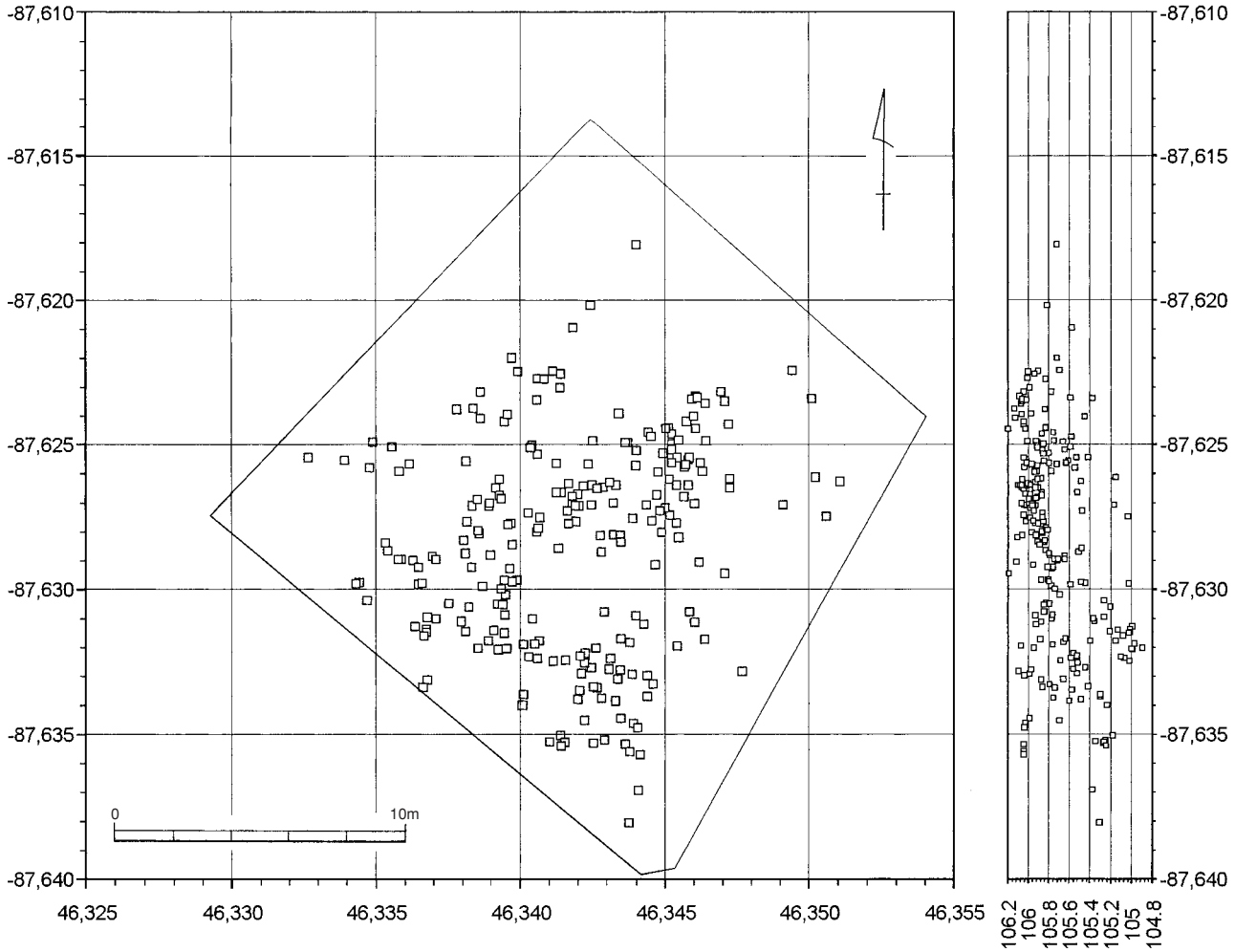
第10表　G区第Ⅱ文化層石器計測表（チャート）(1)

レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
94	34	Ⅳ	Ⅴ - 34	石鏃	-87625.382	46345.759	106.011	1.95	1.50	0.25	0.5	腹面側に一部素材面を留める背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。打点は背面右側のみ腹面側に集中。
95	206	Ⅳ	Ⅴ - 206	石鏃	-87625.881	46343.318	106.082	1.60	1.40	0.20	0.2	作用部は交互剥離で調整。基部は背面側に打点集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
96	215	Ⅳ	Ⅴ - 215	石鏃	-87627.201	46338.436	106.073	1.25	1.15	0.30	0.2	腹面側の一部に素材面を残す。背腹両面に丁寧な押圧により剥離を施す。
97	303	Ⅳ	Ⅴ - 303	石鏃	-87632.236	46347.831	106.061	1.90	0.80	0.25	0.3	背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。打面は腹面側に集中。
98	311	Ⅳ	Ⅴ - 311	石鏃	-87631.123	46345.804	105.955	1.75	1.35	0.25	0.2	打面は背面に集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
99	312	Ⅳ	Ⅴ - 312	石鏃	-87631.447	46346.569	106.042	1.35	1.60	0.35	0.5	打面は基部の一部を除き腹面側に集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
100	360	Ⅳ	Ⅴ - 360	石鏃	-87630.606	46343.231	105.878	1.30	1.70	0.25	0.5	作用部背面左側をのぞき腹面側に打点集中。背面側体部に一部素材面を残すが全体的に丁寧な押圧剥離を施す。
101	366	Ⅳ	Ⅴ - 366	石鏃	-87633.238	46342.094	105.829	1.70	1.70	0.45	0.9	背腹両面に素材面を施す。石材は他の石鏃と異なり透明感のない赤色チャート。腹面側に打点集中箇所有り。
102	367	Ⅳ	Ⅴ - 367	石鏃	-87631.964	46345.647	106.067	1.90	1.25	0.45	0.8	打点は背面側に集中。背面側に素材面を残す。他のチャート製の石鏃に比べ素材に透明感のない白色チャート
103	404	Ⅳ	Ⅴ - 404	石鏃	-87626.931	46344.445	105.954	1.75	1.60	0.30	0.3	打点は背面側に集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
104	447	Ⅳ	Ⅴ - 447	石鏃	-87626.685	46341.763	105.873	1.10	1.75	0.25	0.4	打点は背面側に集中。腹面側に素材面を残す。押し圧剥離の伸びは悪く周辺部の未加工。石材中の不純物による折損部分有り。
105	548	Ⅳ	Ⅴ - 548	石鏃	-87625.034	46343.939	105.921	1.90	1.40	0.35	0.5	背腹両面に素材面を残す。打点は腹面側に集中。
106	577	Ⅳ	Ⅴ - 577	石鏃	-87628.550	46343.486	105.939	1.65	1.55	0.30	0.7	打点は背面右側をのぞき腹面側に集中。腹面側に素材面を残す。
107	599	Ⅳ	Ⅴ - 599	石鏃	-87629.500	46344.325	105.944	2.50	1.60	0.85	3.0	体部に素材面を残す。
108	653	Ⅳ	Ⅴ - 653	石鏃	-87630.272	46342.199	106.006	1.75	1.35	0.30	0.6	打点は背面側に集中。腹面側体部に素材面を残す。
109	897	Ⅳ	Ⅴ - 897	石鏃	-87633.024	46339.944	105.453	2.00	1.75	0.70	1.1	作用部は背面側に打点集中。腹面側に素材面を残す。
110	951	Ⅳ	Ⅴ - 951	石鏃	-87626.055	46335.577	105.696	1.05	1.30	0.20	0.3	作用部背面右側に打点集中。基部は交互剥離による調整。背面側に素材面を残す。
111	1029	Ⅳ	Ⅴ - 1029	石鏃	-87632.006	46345.664	105.555	1.95	1.55	0.70	0.8	作用部背面左側に打点集中それ以外は腹面側に打点集中。背腹両面とも素材面を残さず。
112	1133	Ⅳ	Ⅴ - 1133	石鏃	-87632.736	46343.979	105.722	1.50	1.10	0.40	0.5	打点は背面側に集中。背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
113	1137	Ⅳ	Ⅴ - 1137	石鏃	-87629.651	46342.174	105.890	1.55	1.40	0.25	0.5	背腹両面とも素材を残さず丁寧な押圧により剥離を施す。
114	1191	Ⅳ	Ⅴ - 1191	石鏃	-87628.817	46336.115	105.691	1.60	1.40	0.35	0.6	背腹両面とも素材面を残さず。腹面側に打点集中箇所有り。
115	270	Ⅳ	Ⅴ - 270	スクレイパー	-87622.036	46340.729	105.917	3.50	4.50	1.10	14.8	背・腹面下部に対向調整を入れ、刃部を作り出す。
116	571	Ⅳ	Ⅴ - 571	スクレイパー	-87626.680	46342.922	106.002	2.70	2.60	0.40	3. 1	背面下部と腹面左にそれぞれ調整を加える。
117	982	Ⅳ	Ⅴ - 982	スクレイパー	-87631.981	46339.801	105.031	3.20	2.30	1.00	5. 7	背腹両面とも素材を残さず、特に腹面側に丁寧な押圧により剥離を施す。
118	809	Ⅳ	Ⅴ - 809	くさび形石器	-87626.006	46341.300	105.860	2.70	1.30	1.00	3.2	背面に少し素材を残すが、丁寧な押圧により剥離を施す。
119	901	Ⅳ	Ⅴ - 901	くさび形石器	-87634.994	46341.563	105.485	2.95	1.50	1.00	4.0	丁寧な押圧により剥離を施す。
120	269	Ⅳ	Ⅴ - 269	石錐	-87622.363	46340.945	106.042	2.00	1.70	0.55	1.5	背面の体部一部と腹面側に素材面を残す。
121	487	Ⅳ	Ⅴ - 487	石錐	-87624.239	46346.100	105.752	1.80	2.00	0.55	1.4	背腹両面に素材を残す。剥片の端部に腹面側から加撃し錐部を作り出す。
122	984	Ⅳ	Ⅴ - 984	石錐	-87632.138	46339.858	105.009	2.00	2.00	0.60	1.6	背腹両面とも素材を残さず特に腹面側に丁寧な押圧により剥離を施す。
123	49	Ⅳ	Ⅳ - 49	石核	-87627.761	46344.144	106.115	4.40	3.10	2.00	25.8	左側面に節理を残す。
124	467	Ⅳ	Ⅴ - 467	石核	-87622.704	46349.903	105.679	2.30	2.30	1.10	4.0	多方向から不定形の剥片を剥離した痕跡をもつ。

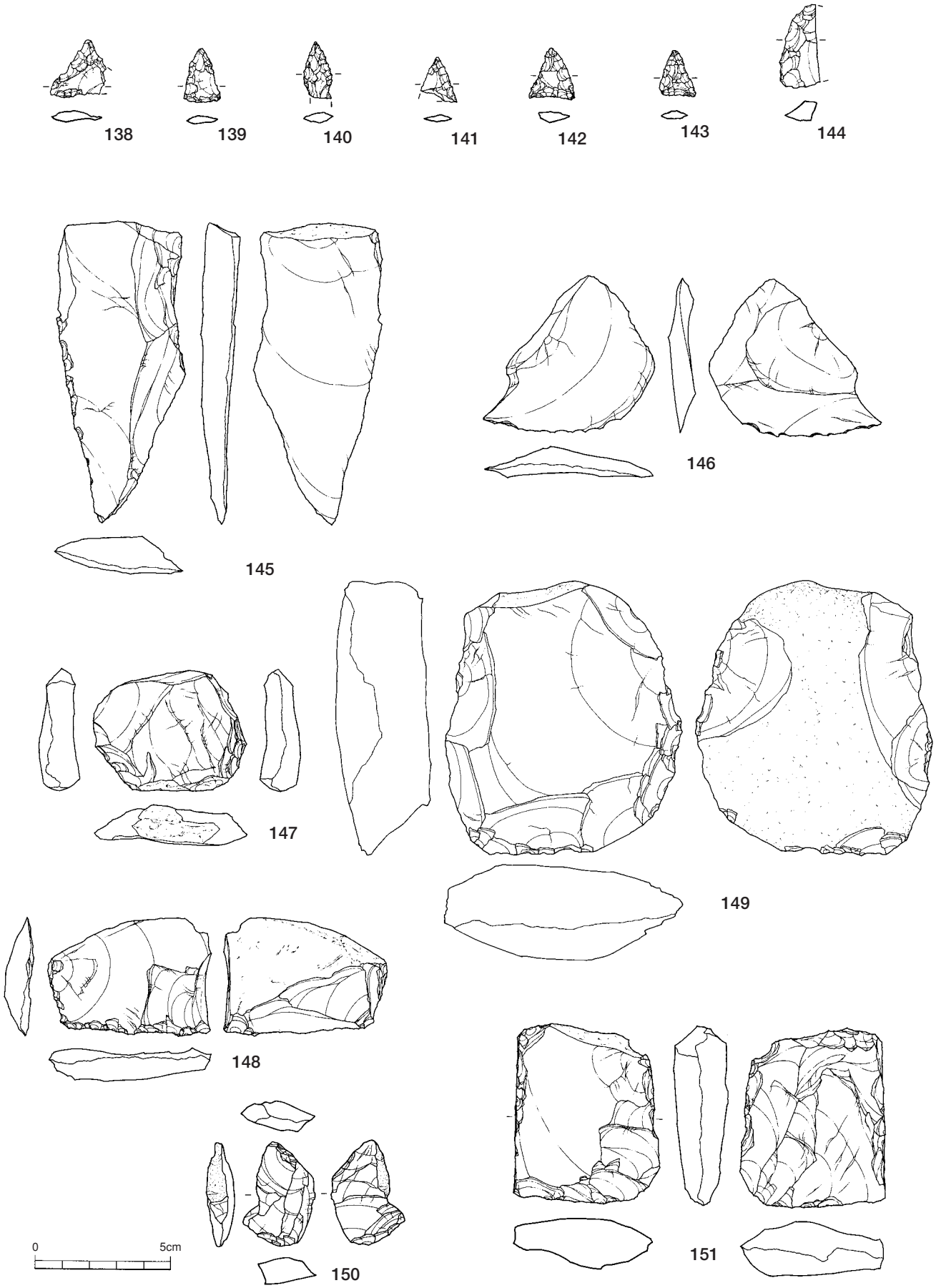
第11表　G区第Ⅱ文化層石器計測表（チャート）(2)

レイアウトNo	遺物No	遺跡層序	注記番号	器種	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　　考
125	498	Ⅳ	Ⅴ - 498	石核	-87624.997	46343.939	105.922	2.70	1.90	1.00	5.6	左側面に節理を残す。
126	537	Ⅳ	Ⅴ - 537	石核	-87626.451	46345.259	105.939	1.90	2.10	0.80	3.6	上下からの剥離痕を残す。
127	134	Ⅳ	Ⅳ - 134	二次加工剥片	-87634.894	46341.330	105.397	2.05	1.90	0.40	1.6	腹面右側に調整痕を有す。
128	33	Ⅳ	Ⅴ - 33	二次加工剥片	-87625.291	46345.699	105.941	3.60	1.35	0.60	1.8	右側面に背腹両側から丁寧な加工を施す。
129	197	Ⅳ	Ⅴ - 197	二次加工剥片	-87623.352	46346.273	106.079	3.30	1.50	0.55	3.5	右側下面に背面からの加工を施す。
130	590	Ⅳ	Ⅴ - 590	二次加工剥片	-87627.580	46343.623	105.935	3.60	3.00	0.60	5.4	左側面に加工を施す。
131	112	Ⅳ	Ⅳ - 112	剥片	-87632.155	46341.181	104.945	2.10	2.30	1.10	4.8	腹面右側に素材面を残す。背面に剥片を剥離した痕跡を残す。
132	152	Ⅳ	Ⅳ - 152	剥片	-87635.827	46343.651	105.182	2.25	1.60	0.80	3.5	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。
133	465	Ⅳ	Ⅴ - 465	剥片	-87623.294	46350.672	105.693	4.70	1.65	0.90	6.0	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。
134	654	Ⅳ	Ⅴ - 654	剥片	-87630.348	46342.080	105.985	1.55	2.70	0.70	2.8	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。
135	815	Ⅳ	Ⅴ - 815	剥片	-87624.119	46342.565	105.904	2.50	2.40	0.95	5.3	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。右側面に微細な剥離痕を残す。
136	844	Ⅳ	Ⅴ - 844	剥片	-87630.677	46335.881	105.213	2.25	1.80	0.65	2.2	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。右側面に微細な剥離痕を残す。
137	1048	Ⅳ	Ⅴ - 1048	剥片	-87633.215	46339.512	104.907	1.30	2.30	0.60	1.5	背面に剥片を剥離した痕跡を残す。上面に微細な剥離痕を残す。

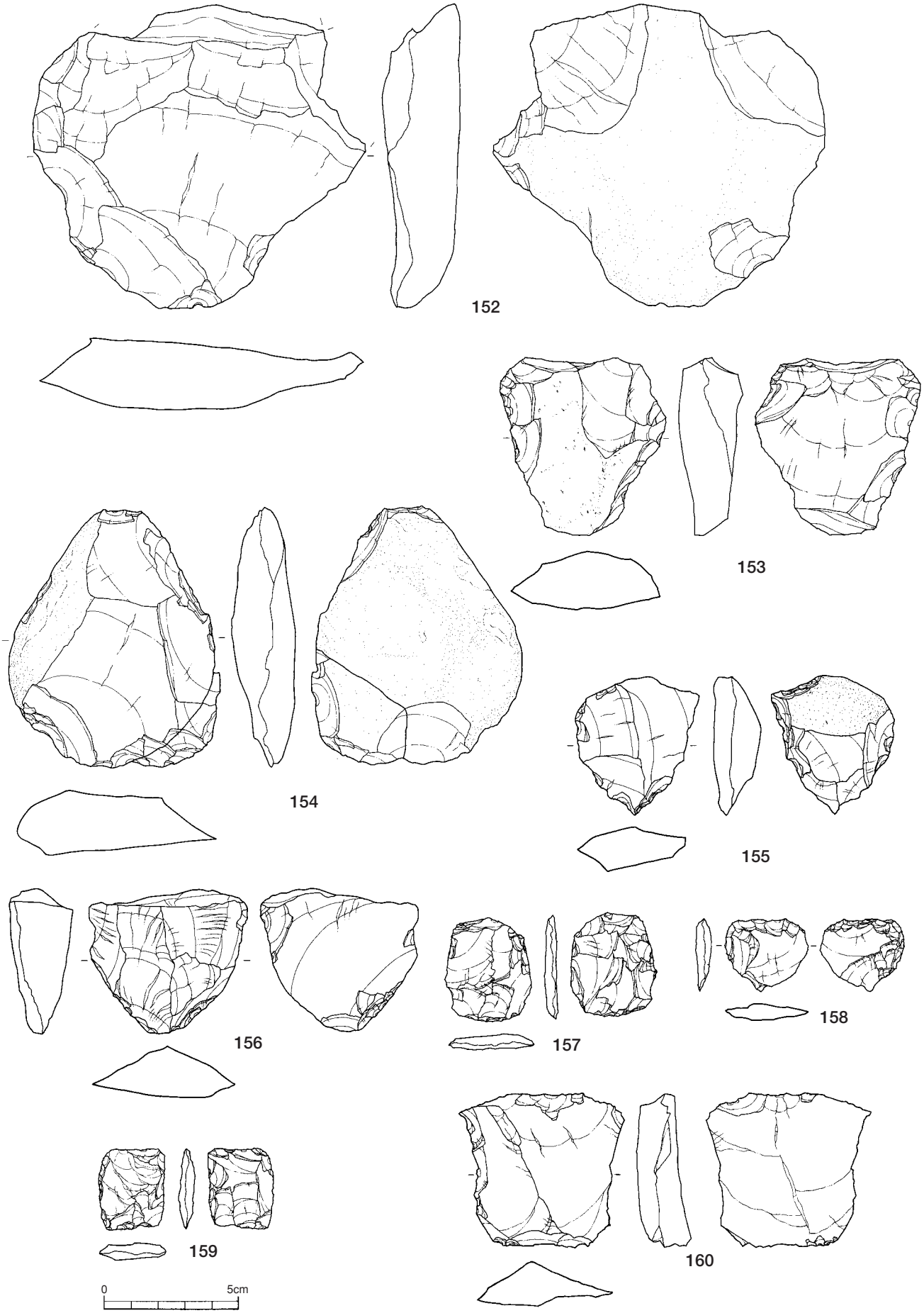
第12表　G区第Ⅱ文化層石器計測表（チャート）(3)



第41図　G区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図（ホルンフェルス）(S＝1／250)



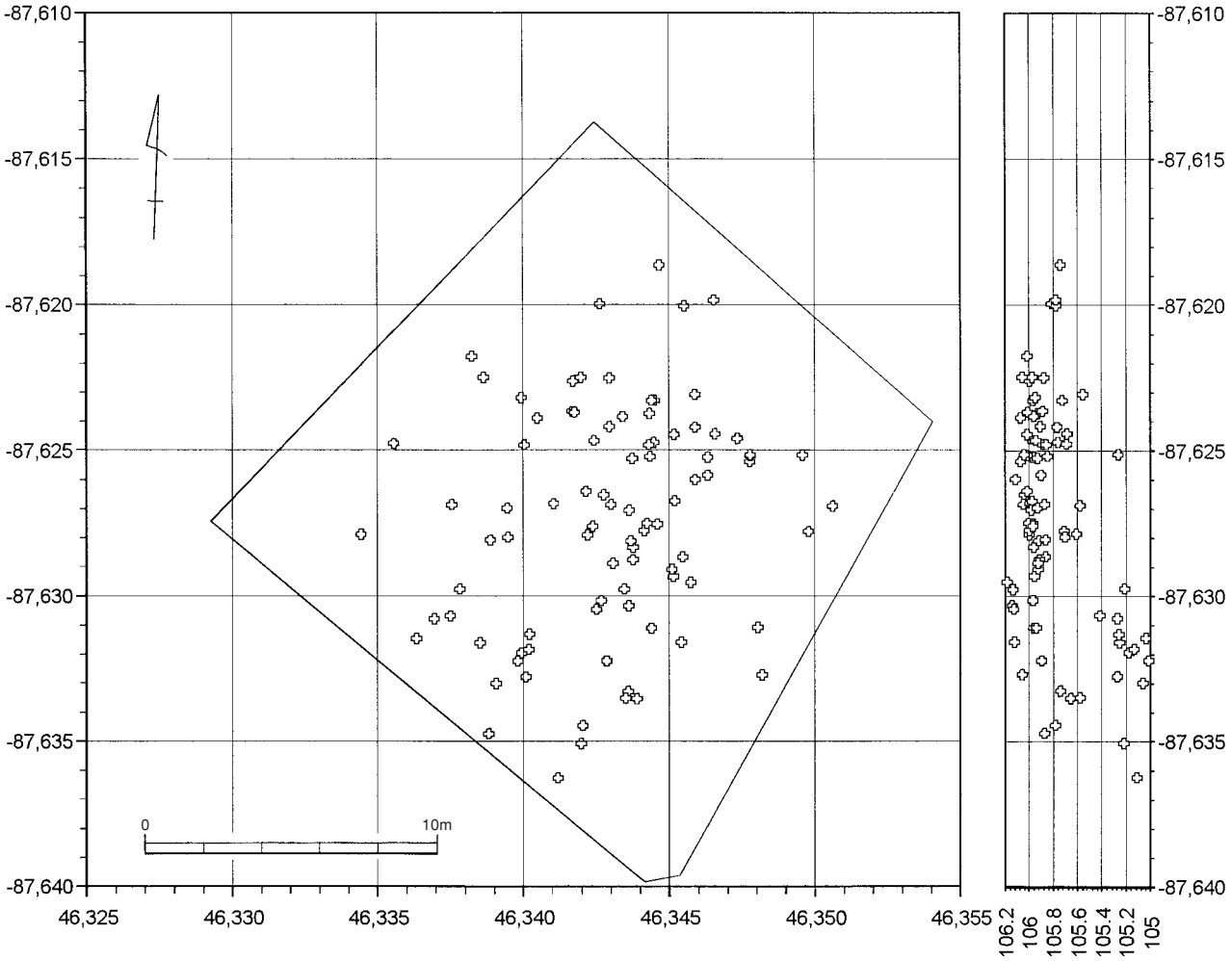
第42図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（ホルンフェルス）(1)（S＝1／2）



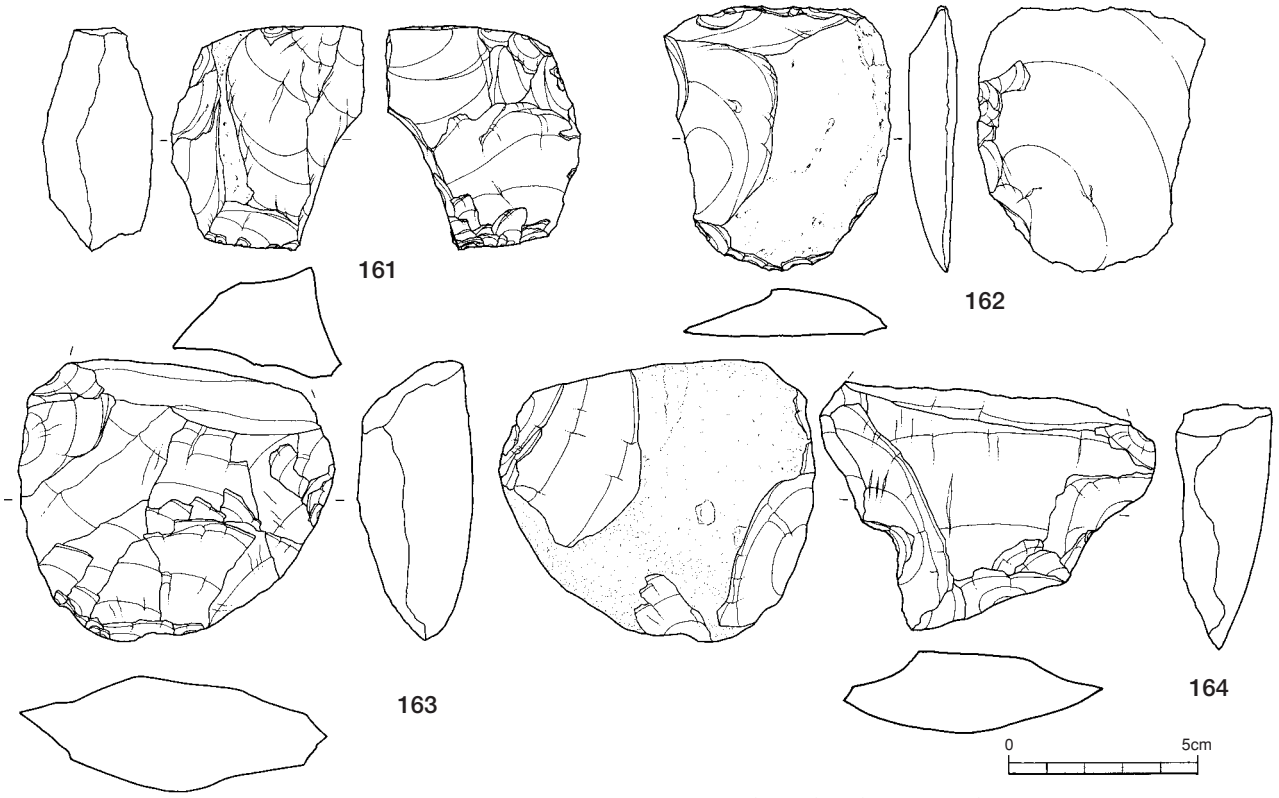
第43図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（ホルンフェルス）(2)（S＝1／2）

レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	接合No.	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　　考
138	142	Ⅳ	Ⅳ - 142	石鏃		-87635.221	46343.118	105.251	2.10	2.05	0.45	1.9	背腹両面とも素材を残す。打面は腹面側に集中。
139	230	Ⅳ	Ⅴ - 230	石鏃		-87628.675	46335.632	105.827	2.00	1.40	0.35	0.9	作用部は交互より剥離。背腹両面に素材面を大きく残し周辺加工を施す。
140	337	Ⅳ	Ⅴ - 337	石鏃		-87635.618	46344.008	106.040	2.10	1.10	0.40	0.8	作用部背面右側をのぞき打点は背面側に集中。背面に一部素材面を留める。
141	650	Ⅳ	Ⅴ - 650	石鏃		-87630.144	46342.687	105.967	1.65	1.30	0.25	0.4	全体的に稜線、打点不明瞭。背面側に素材面を残す。
142	672	Ⅳ	Ⅴ - 672	石鏃		-87623.874	46340.494	106.065	1.90	1.70	0.40	1.2	背腹両面に素材面を残す。基部は腹面側に打点集中。作用部は交互剥離による調整。
143	1162	Ⅳ	Ⅴ - 1162	石鏃		-87631.721	46343.696	105.633	1.70	1.35	0.30	0.2	背腹両面体部に研磨面を残す。稜線、打点ともに不明瞭。調整は交互剥離か？
144	1192	Ⅳ	Ⅴ - 1192	石鏃		-87628.977	46336.006	105.706	3.10	1.50	0.70	2.4	打点は背面に集中。背腹両面に素材面を残す石鏃未製品？
145	663	Ⅳ	Ⅴ - 663	スクレイパー		-87631.157	46346.242	105.874	11.20	4.80	1.40	67.1	背面右側面に刃部を施す。
146	692	Ⅳ	Ⅴ - 692	スクレイパー		-87625.611	46338.354	105.840	5.80	6.35	1.15	25.2	背面下部に腹面側から調整を施し刃部を作り出す。
147	726	Ⅳ	Ⅴ - 726	スクレイパー		-87632.466	46341.797	105.682	5.70	5.50	1.50	44.0	背面に剥離痕を残す。背面より右下部に調整を施し、刃部を作り出す。
148	944	Ⅳ	Ⅴ - 944	スクレイパー		-87623.165	46339.943	105.946	4.40	6.10	1.20	32.8	大型剥片を利用し、背腹面両方から調整を施し刃部を作り出す。
149	1054	Ⅳ	Ⅴ - 1054	スクレイパー		-87628.196	46341.444	105.835	10.10	8.80	3.60	9.0	背面下部に、微細な剥離痕を残す。
150	315	Ⅳ	Ⅴ - 315	細石刃核		-87631.091	46344.394	105.961	3.90	2.70	1.00	5.3	背面に細石刃を剥離した痕跡を残す。
151	1150	Ⅳ	Ⅴ - 1150	くさび形石器		-87630.488	46337.762	105.821	6.70	5.40	2.00	90.7	背腹面ともに剥片を剥離することでくさびの形を作り出している。
154	1213	Ⅳ	Ⅴ - 1213	石核		-87627.108	46349.319	105.164	11.40	12.50	3.25	450.0	打面をかえ各方向から剥片剥離を行う。
152	528	Ⅳ	Ⅴ - 528	石核		-87627.714	46345.636	105.928	6.65	6.20	2.40	100.8	背面に自然面を残す。左右に剥片を剥離した痕跡を残す。
153	1169	Ⅳ	Ⅴ - 1169	石核		-87629.751	46339.952	105.794	9.70	7.90	2.40	200.7	打面をかえ各方向から剥片剥離を行う。
156	828	Ⅳ	Ⅴ - 828	二次加工剥片		-87628.327	46338.253	105.839	5.15	4.65	1.65	37.7	腹面に自然面を残す。背面下部に加工を施す。
155	737	Ⅳ	Ⅴ - 737	二次加工剥片		-87628.815	46339.192	105.788	5.40	6.00	1.90	61.5	背腹面ともに下部に加工を施す。
157	923	Ⅳ	Ⅴ - 923	二次加工剥片		-87631.128	46338.187	105.356	3.90	3.25	0.55	7.5	背腹面両側から加工を施す。
158	1012	Ⅳ	Ⅴ - 1012	二次加工剥片		-87633.880	46343.494	105.599	2.70	3.10	0.60	5.1	背腹面とも丁寧に加工を施す。
159	1017	Ⅳ	Ⅴ - 1017	二次加工剥片		-87632.784	46343.294	105.555	3.00	2.50	0.65	5.0	背腹面とも丁寧に加工を施す。
160	1123	Ⅳ	Ⅴ - 1123	二次加工剥片		-87623.770	46338.597	106.132	5.70	6.20	2.05	53.8	上部・下部ともに背腹面から加工を施し、左側面は背面から加工を施す。

第13表　G区第Ⅱ文化層石器計測表（ホルンフェルス）



第44図　G区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図（頁岩）（S＝1／250）



第45図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（頁岩）（S＝1／2）

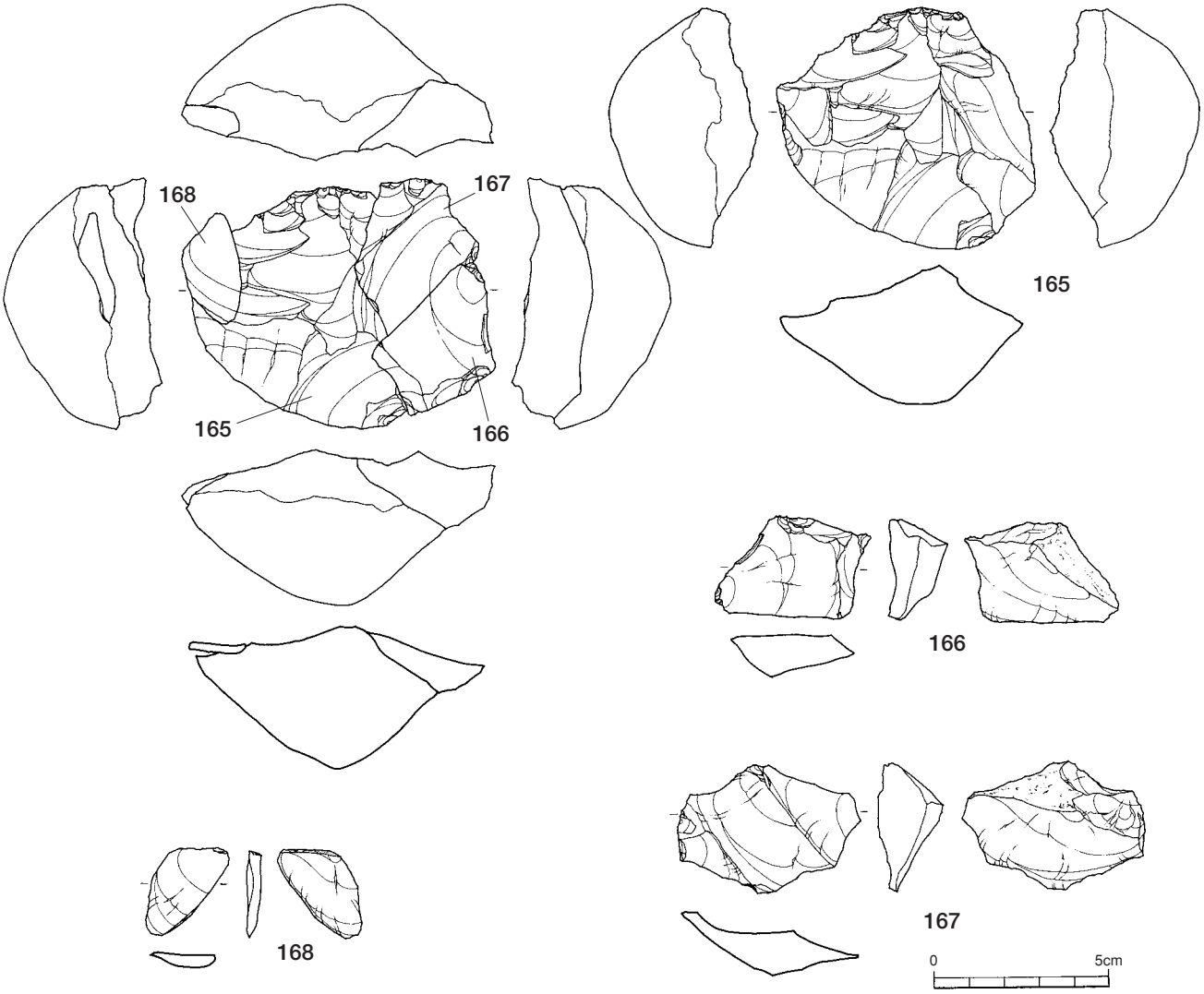
レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	接合No.	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　　考
161	1071	Ⅳ	Ⅴ - 1071	石核		-87624.659	46342.426	105.939	5.90	5.20	2.90	91.1	打面をかえ、各方向から剥片剥離を行う。
162	277	Ⅳ	Ⅴ - 277	二次加工剥片		-87629.763	46343.457	106.135	7.00	6.10	1.25	69.2	背面下部に加工を施す。
163	1116	Ⅳ	Ⅴ - 1116	石核		-87624.164	46342.964	105.903	7.50	8.40	3.10	208.9	打面をかえ、各方向から剥片剥離を行う。
164	163	Ⅳ	Ⅴ - 163	剥片		-87625.154	46347.771	106.036	6.45	9.00	2.10	141.5	腹面に素材面を残す。背面に剥片剥離の痕跡を残す。

第14表　Ｇ区第Ⅱ文化層石器計測表（頁岩）

【接合資料③】（第46図　165～168）

石核と剥片３点の流紋岩製の接合資料である。剥片３点は、石核から剥離され、石核、剥片ともに自然面を残す。

上方からの打撃で166を剥ぎ、その後、同じように上方からの打撃で167を剥いでいる。更に180度転位させ168を剥いでいる。石核165はその前後、多方向からの打撃による剥片剥離を行っている。166がⅣ層上部から出土し、165、167、168はⅣ層下部からの出土である。



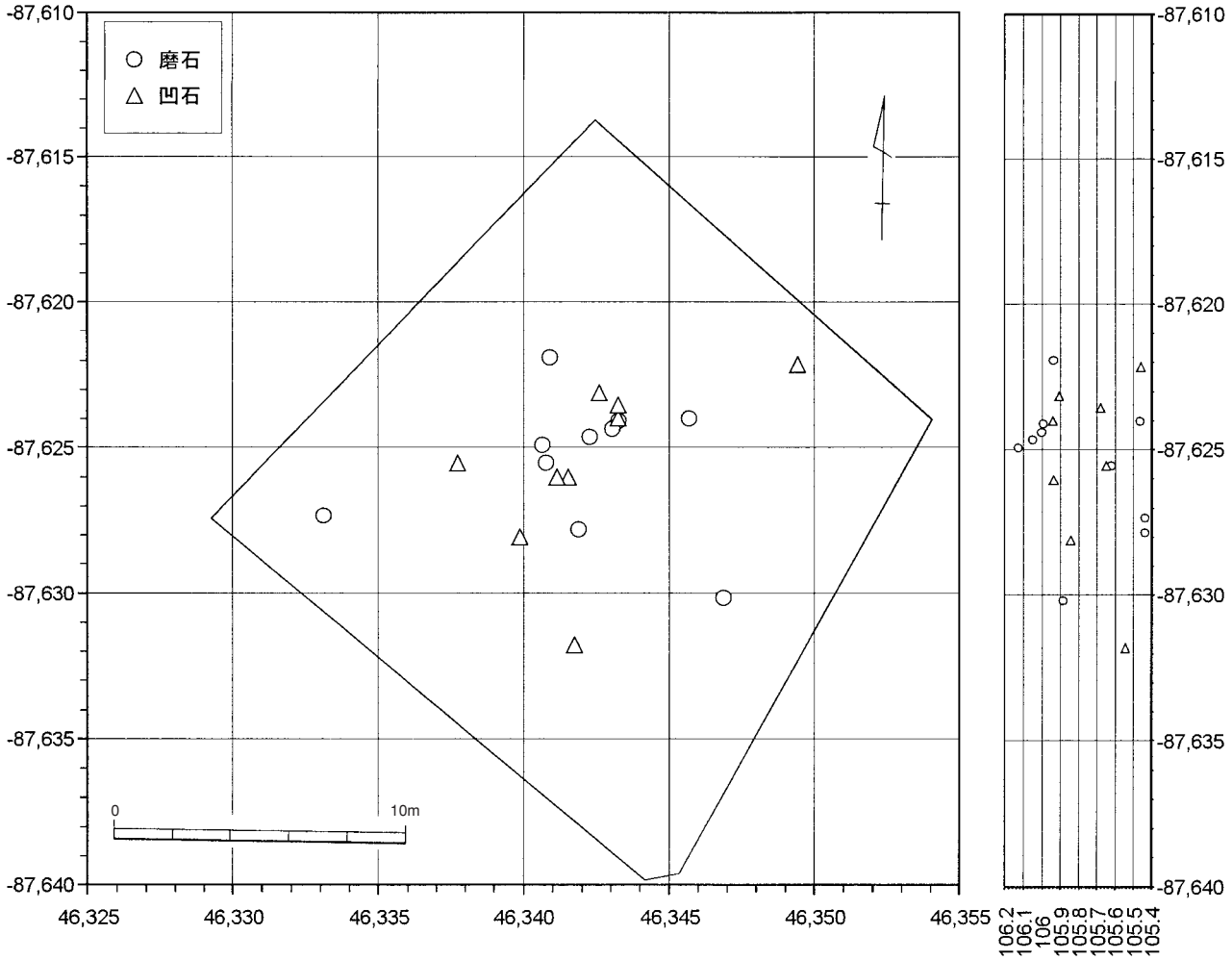
第46図　接合資料③実測図（Ｓ＝1／2）

レイアウトNo.	遺物No.	遺跡層序	注記番号	器種	接合No.	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　　考
165	550	Ⅳ	Ⅴ - 550	石核	接３	-87625.094	46342.700	106.016	6.90	7.40	4.30	214.2	多方向からの打撃による剥片剥離を行う。素材面を残す。
166	130	Ⅳ	Ⅳ - 130	剥片	接３	-87635.075	46341.986	105.217	2.90	4.50	1.70	18.2	背面に、剥片剥離痕を残す。素材面を残す。
167	719	Ⅳ	Ⅴ - 719	剥片	接３	-87632.600	46343.732	105.669	3.70	5.30	1.90	19.0	166の剥片剥離後、剥ぎ取られた剥片。背面に剥片剥離痕を残す。
168	387	Ⅳ	Ⅴ - 387	剥片	接３	-87623.737	46344.312	105.931	2.50	2.45	0.40	1.9	背面に、剥片剥離痕を残す。

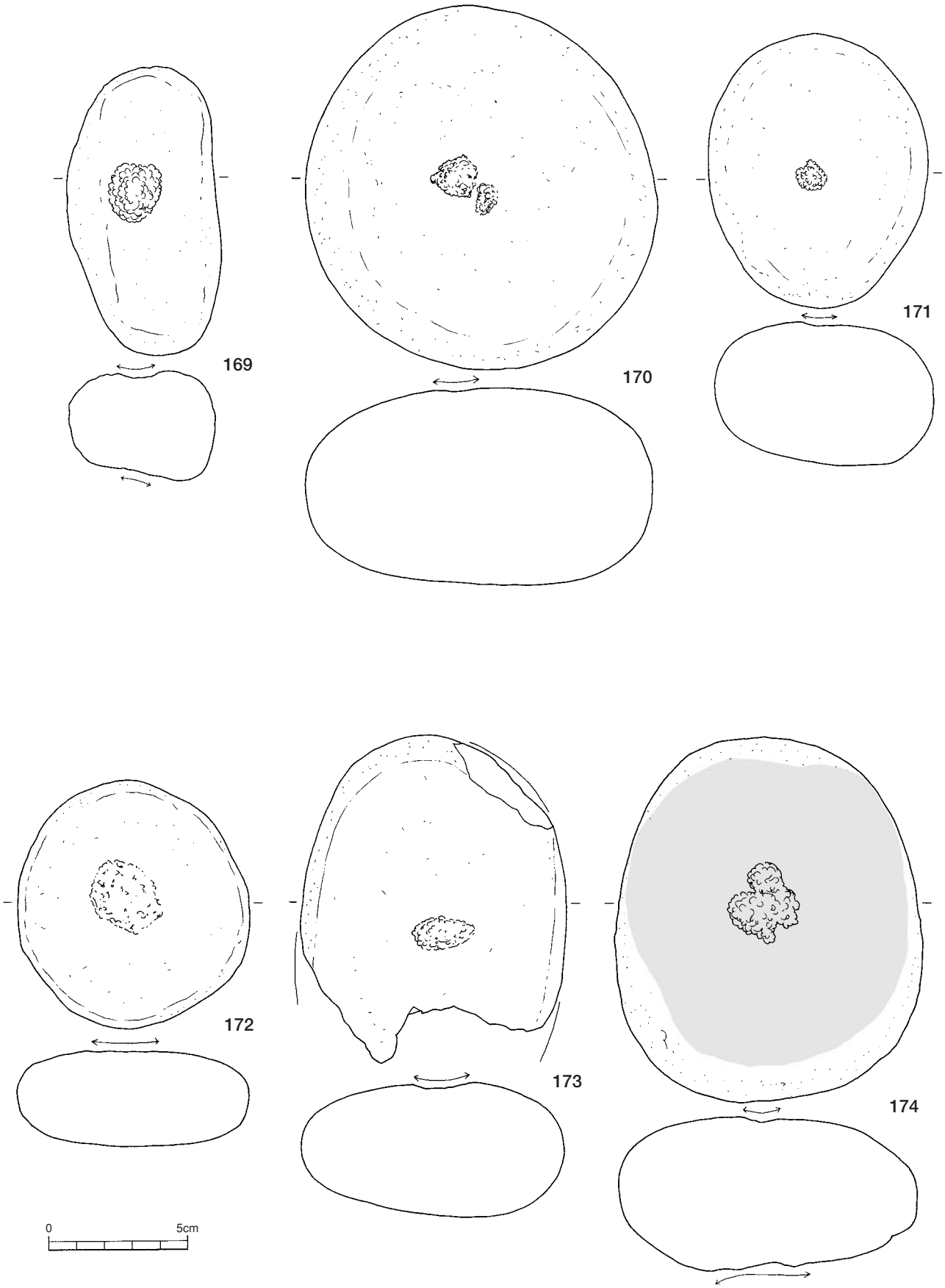
第15表　接合資料③計測表

凹石（第48、49図）

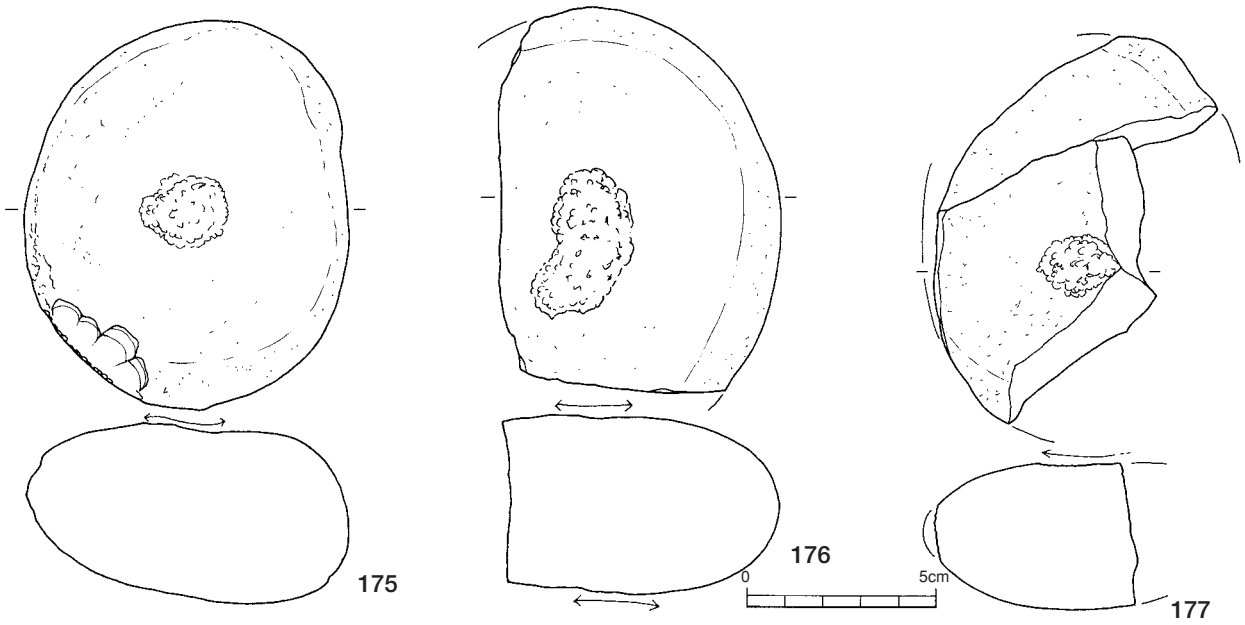
第Ⅱ文化層より凹石が９点出土した。尾鈴山酸性岩類製が８点、砂岩製が１点である。尾鈴山酸性岩類製は平面長楕円形と円形のものがあり、凹も表裏ともにあるものや表だけにあるものがある。砂岩は、破損が激しいが、凹の部分は確認することができ、表だけにあると考えられる。なお、磨石と思われる石器は図化していない。凹石の破片である可能性を有しているためである。石材構成は、凹石と同様である。



第47図　Ｇ区第Ⅱ文化層石材別遺物分布図（礫石器）（Ｓ＝1／250）



第48図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（礫石器）(1)（S＝1／2）



第49図　G区第Ⅱ文化層遺物実測図（礫石器）(2)（S＝1／2）

レイアウトNo.	遺跡層序	注記番号	器種	石材	国土座標X座標	国土座標Y座標	標高（m）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
169	Ⅳ	アカ天G　V-1209	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87622.184	46349.341	105.461	10.4	5.5	4	318.2
170	Ⅳ	アカ天G　V-1186	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87631.814	46341.686	105.543	13.1	12.8	7.1	1728.6
171	Ⅳ	アカ天G　V-1066	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87625.570	46337.672	105.647	9.9	8	5.3	569.7
172	Ⅳ	アカ天G　V-1060	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87626.050	46341.080	105.936	9	8.4	3.5	371
173	Ⅳ	アカ天G　V-1058	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87626.054	46341.438	105.936	11.9	9.6	5	704.3
174	Ⅳ	アカ天G　V	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87629.052	46349.429	105.113	13.2	11.1	5.6	1262.9
175	Ⅳ	アカ天G　V-1114	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87623.574	46343.166	105.680	10.3	8.7	4.8	582.7
176	Ⅳ	アカ天G　V-1063	凹石	尾鈴山酸性岩類	-87628.116	46339.791	105.842	10.2	7.5	4.8	595.4
177	Ⅳ	1073,1083	凹石	砂岩	-87624.029	46343.180	105.940	10.3	7	3.9	306.6

第16表　G区第Ⅱ文化層石器計測表（礫石器）

	石鏃	スクレイパー	くさび形石	細石刃	細石刃核	石錐	石核	剥片	砕片	凹石	磨石	合計
ホルンフェルス	5	17	1	1			8	201	1			234
流紋岩		1					1	7				9
チャート	30	3	2		2	3	5	505	175			725
黒曜石								20	1			21
頁岩	3	5					4	75	2			89
尾鈴山酸性岩類										10	11	21
合計	38	26	3	1	2	3	18	808	179	10	11	1099

第17表　G区第Ⅱ文化層石器組成表

（4）小結

G区では、縄文時代草創期の隆帯文土器の出土や早期の無文土器が出土した。石器では、チャートやホルンフェルスの製品や剥片、砕片が多数出土した。そのなかで石鏃や細石刃、細石刃核も出土している。縄文時代草創期に後期旧石器時代の名残が混在していた可能性も否定できない。しかし、数的に多くはないので一概にはいえない面もある。ただ、土器の型式の変遷、石器の種類、剥片等の多さから、この地に一定期間、複数時期に人の営みがあったということは間違いない。

3　Ｋ区の調査（縄文時代草創期～早期の遺構）

（１）概要

Ｋ区は、赤石・天神本遺跡の中央部分にある調査区で、西から東側に向けて傾斜する緩斜面に位置する。

Ｋ区自体は、他の調査区に比べ、攪乱や削平を受けた箇所が少なく、土層は、第Ⅲ層（K-Ah）～第Ⅸ層（MB2）まで、比較的良好に整序よく堆積しており、Ｋ区における旧石器時代文化層の存在が想定された。

しかし、確認調査の結果が示すように、旧石器時代文化層の存在は確認できず、結果的にはＫ区北側北東斜面部の第Ｖ層（ML1）上面にて土坑２基が検出されたにとどまる。

この土坑２基は、立地と形状から陥し穴状遺構と判断され、以下詳細を記述する。

（２）遺構（陥し穴状遺構）

【遺構の検出状況】

Ｋ区北側の丘陵斜面から谷部に向けた地形変換線上、すなわち緩やかな丘陵鞍部から谷部にかけての斜面の第Ｖ層（ML1）上面で陥し穴状遺構が２基（ＳＣ１・２）検出された。

ＳＣ１は平面楕円形、ＳＣ２は平面長方形をなし、ＳＣ１とＳＣ２は切りあい関係を示す。周辺を掘り広げたが、新たな陥し穴状遺構は検出できなかった。

なお、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査では、後期旧石器時代～縄文時代早期に属する陥し穴状遺構が検出されている。その多くは、K-Ah層～Kr-Kbを含む層まで掘り下げないと明瞭なプランが検出できず、遺構検出面を捉えにくい。

本遺跡の場合では、幸いに確認調査トレンチ壁面で陥し穴状遺構の掘り込み面と遺構どうしの切りあいを確認することができた。

１号陥し穴状遺構（ＳＣ１・第50図）

ＳＣ１の平面形は楕円形を呈し、長径1.8m、短径1.5m、深さ1.4mを測る。第Ⅸ層（MB2）を掘り抜き、第Ⅹ層をやや掘り下げた上面付近を底面としている。

ＳＣ１の断面形は、底面から第Ⅷ層（ＡＴ）付近までは、ほぼ垂直な断面箱形を呈するが、それより上方はやや緩やかに開く形状をなす。

覆土は、底面付近は黄褐色ローム（第Ⅶ層）及びＡＴ（第Ⅷ層）由来の砂質分に富む黄褐色粘質土、底面から中位付近は、硬質な黒褐色粘質土が主体で土坑壁面からの崩落土と考えられる地山ブロック土が混入する。中位から上面付近は黒褐色粘質土及び黄褐色粘質土の混合土が堆積し、検出面付近では、暗褐色土及び黒色土の、第Ⅳ層（MB0）に近似した土質・土色の覆土が堆積する。

底面の平面形は、楕円形というよりは隅丸方形に近く、長軸1.1m、短軸0.9mを測る。長軸方向は、北東－南西方向を指向している。

また、底面の長軸方向に２箇所、円形に穴が穿たれていた。両方とも直径0.2m前後、深さ0.15mを測る。この２箇所の穴は杭痕の可能性がある。

なお、ＳＣ１からは遺物の出土は認められなかった。

２号陥し穴状遺構（ＳＣ２・第50図）

ＳＣ２の平面形は隅丸長方形を呈し、長径2.28m、短径1.3m、深さ0.8mを測る。ＳＣ１と比べてやや浅く掘削され、第Ⅸ層（MB2）上面付近を底面としている。なお、ＳＣ２とＳＣ１の検出レベルは、ほぼ近似しているため、ＳＣ１が完全に埋没した後に、掘削されたと考えられる。

ＳＣ２の断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、全体的に暗褐色粘質土に黄褐色粘質土が混入する堆積状況を示し、ＳＣ１よりは、黄みが強く、硬質な土質であることが特徴である。

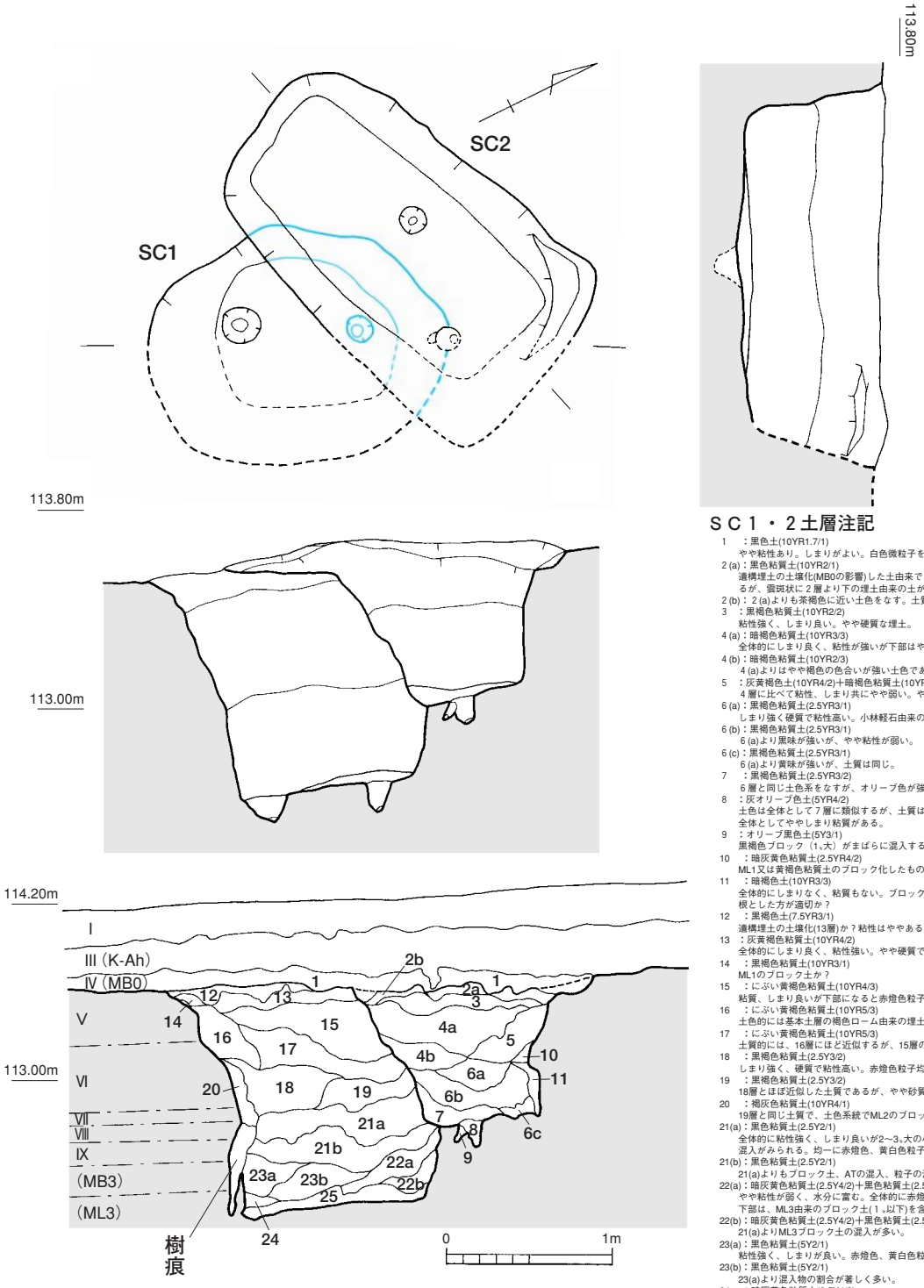
底面の平面形は、検出面と同じ隅丸方形で、長軸1.86m、短軸0.88mを測る。長軸方向は、東西方向を指向している。また、底面の中央と東端付近に計２箇所、平面円形の小穴が穿たれていた。両方とも直径0.1m前後、深さ0.16mを測る。ＳＣ１同様、杭痕の可能性が指摘できる。

なお、ＳＣ２からは遺物は出土していない。

（３）小結

Ｋ区では第Ｖ層（ML1）上面にて陥し穴状遺構２基が検出された。

遺構の時期は、両遺構とも出土遺物が得られなかったため、遺物からの特定はできない。ただ、遺構の掘り込み面は第Ｖ層（ML1）上面であることから縄文時代草創期～早期に属すると考えられる。



ＳＣ１・２土層注記

1　：黒色土(10YR1.7/1)
やや粘性あり。しまりがよい。白色微粒子を全体に含む。
2 (a)：黒色粘質土(10YR2/1)
遺構埋土の土壌化(MB0の影響)した土由来である。全体的に１層(MB0)に近似した土質であるが、雲斑状に２層より下の埋土由来の土が混入する。しまり強く、粘性が良い。
2 (b)：２(a)よりも茶褐色に近い土色をなす。土質は同じ。
3　：黒褐色粘質土(10YR2/2)
粘性強く、しまり良い。やや硬質な埋土。
4 (a)：暗褐色粘質土(10YR3/3)
全体的にしまり良く、粘性が強いが下部はやや砂質分に富む。
4 (b)：暗褐色粘質土(10YR2/3)
４(a)よりはやや褐色の色合いが強い土色である。
5　：灰黄褐色土(10YR4/2)十暗褐色粘質土(10YR2/3)
４層に比べて粘性、しまり共にやや弱い。ややパサパサ感が残る。粘質土とは言い難い。
6 (a)：黒褐色粘質土(2.5YR3/1)
しまり強く硬質で粘性高い。小林軽石由来の赤燈色粒？をまばらに含む。
6 (b)：黒褐色粘質土(2.5YR3/1)
６(a)より黒味が強いが、やや粘性が弱い。
6 (c)：黒褐色粘質土(2.5YR3/1)
６(a)より黄味が強いが、土質は同じ。
7　：黒褐色粘質土(2.5YR3/2)
６層と同じ土色系をなすが、オリーブ色が強く、極めて硬質である。
8　：灰オリーブ色土(5YR4/2)
土色は全体として７層に類似するが、土質は異なる。下部に９層の近似した埋土があり、全体としてややしまり粘質がある。
9　：オリーブ黒色土(5Y3/1)
黒褐色ブロック（1㎝大）がまばらに混入する。やや砂質分に富み、しまり弱い。
10　：暗灰黄色粘質土(2.5YR4/2)
ML1又は黄褐色粘質土のブロック化したもの。
11　：暗褐色土(10YR3/3)
全体的にしまりなく、粘質もない。ブロック又は粒々に砕けるもろい埋土であるため、樹根とした方が適切か？
12　：黒褐色土(7.5YR3/1)
遺構埋土の土壌化(13層)か？粘性はややあるが、しまりはあまりみられない。
13　：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)
全体的にしまり良く、粘性強い。やや硬質でブロック状に割れやすい。
14　：黒褐色粘質土(10YR3/1)
ML1のブロック土か？
15　：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)
粘質、しまり良いが下部になると赤燈色粒子がまばらに含む。
16　：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)
土色的には基本土層の褐色ローム由来の埋土か？15層に近似する土質である。
17　：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)
土質的には、16層にほど近似するが、15層のように赤燈色粒子が均一に混入する。
18　：黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
しまり強く、硬質で粘性高い。赤燈色粒子均一に含む。
19　：黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
18層とほぼ近似した土質であるが、やや砂質分に富む埋土。
20　：褐灰色粘質土(10YR4/1)
19層と同じ土質で、土色系統でML2のブロック土か？
21(a)：黒色粘質土(2.5Y2/1)
全体的に粘性強く、しまり良いが2～3㎝大の小林軽石？由来のブロック土とATの雲斑状の混入がみられる。均一に赤燈色、黄白色粒子の混入がみられる。
21(b)：黒色粘質土(2.5Y2/1)
21(a)よりもブロック土、ATの混入、粒子の混入が著しい。
22(a)：暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)+黒色粘質土(2.5Y2/1)
やや粘性が弱く、水分に富む。全体的に赤燈色粒子が、わずかではあるがまばらに含む。下部は、ML3由来のブロック土(１㎝以下)を含む。
22(b)：暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)+黒色粘質土(2.5Y2/1)
21(a)よりML3ブロック土の混入が多い。
23(a)：黒色粘質土(5Y2/1)
粘性強く、しまりが良い。赤燈色、黄白色粒子を含む。
23(b)：黒色粘質土(5Y2/1)
23(a)より混入物の割合が著しく多い。
24　：暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
22(a)層に近似した土色と土質である。
25　：明黄褐色粘質土(2.5Y7/6)+黒色粘質土(2.5Y2/1)
基調は、明黄褐色粘質土(ML3由来？)に黒色粘質土がブロック状雲斑状に混入している土壌をなす。やや砂質に富むが、粘性は強い。

第50図　Ｋ区陥し穴状遺構実測図（Ｓ＝1／40）

4　Ⅰ区の調査（縄文時代後・晩期～弥生時代の遺構と遺物）

（1）概要

Ⅰ区は、赤石・天神本遺跡の北端部に位置し、平田川に注ぎ込む小河川によって形成された開析谷に面している。

また、Ⅰ区周辺は谷水田として利用されており、そのためか段切りによる削平や客土等の造成が行なわれ、地形の改変が著しい。

Ⅰ区でも東半部付近は、辛うじて第Ⅲ層（K-Ah）が残存しており、第Ⅲ層上には第Ⅱ層（縄文時代後・晩期と弥生～中世の遺物包含層）が堆積していた。第Ⅱ・Ⅲ層ともに層厚0.1～0.2m前後で薄い。

第Ⅱ層から地表面までの約１mが造成土となる。

遺構は、第Ⅱ層（縄文時代後・晩期の遺物包含層）上面にて縄文時代の竪穴住居跡２軒（ＳＡ１・２）、集石遺構１基（SI３）、及び弥生時代竪穴住居跡１軒（ＳＡ３）が検出された。

ＳＡ１～３及びＳＩ３が位置する部分は、谷川に向かってやや落ち込んだ地形である。

（2）縄文時代後・晩期の遺構と遺物

１号竪穴住居跡（ＳＡ１）

【検出状況】

Ⅰ区の北西隅付近に位置する竪穴住居である。当初、SA１掘り方の輪郭は、第Ⅱ層（縄文後・晩期遺物包含層）中で認められたが、別遺構（ＳＡ２）と切りあい関係の把握が第Ⅱ層中では困難であったため、結果的には第Ⅲ層（K-Ah）上面での検出となった。

検出時点では、竪穴住居１軒と想定されたが、東西・南北土層断面で床面の高低差と壁面の立ち上がりを確認し、覆土の違いなどから、ＳＡ１の中心部分には、別の住居（ＳＡ２）がすっぽりと収まるような切りあい関係を示すと判断した。

ＳＡ１・２とも東側半部は水田面造成に伴う攪乱により失われている。また、ＳＡ１・２の北側部分は、自然流路によって一部失われている。

【規模など】

ＳＡ１の住居平面形は、やや不整な円形で、規模は、直径約６m、深さ0.2mを測る。竪穴住居壁体の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状に近い。床面積は約53㎡（復元面積）と想定される。

【覆土(埋土)の状況】

遺構覆土は黒色土でも黄味の強いオリーブ色土系（K-Ah粒子混入が多い）である。

覆土中には土器片と石器が満遍なく混入しており、特に第１層、第21層は赤化礫の混入が著しい。石皿の破片も含まれ、数点は接合関係を示した。ブロック状堆積を示さないことから人為的な埋め戻しは認められず、ほぼ単一の覆土が均一に水平堆積することから比較的短期間の埋没が想定される。

【床面及び柱穴】

床面は、アカホヤ面までを浅く掘削して直床とし、概して平坦である。炉等の付属施設は、住居床面中心部をＳＡ２によって削平されているため不明である。

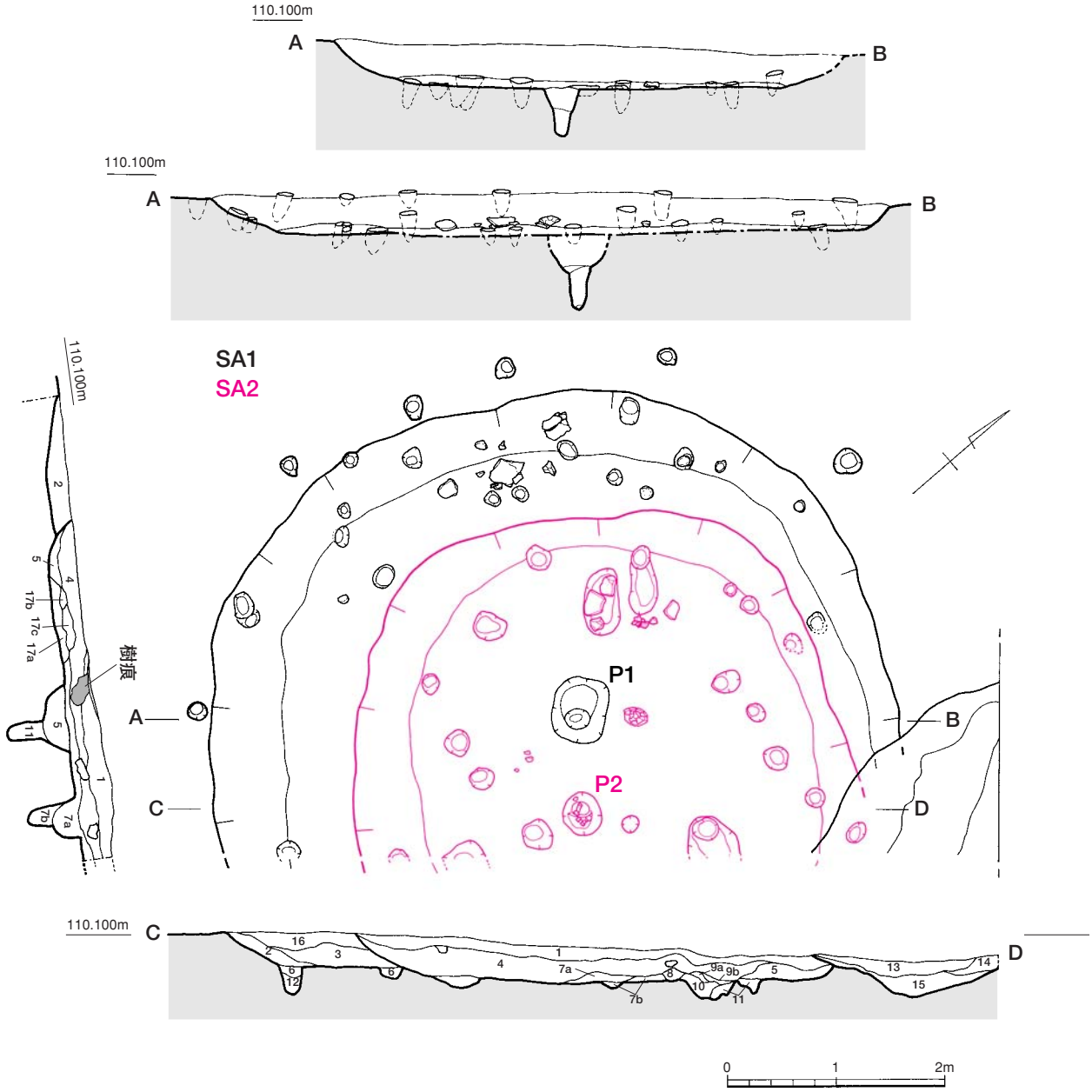
柱穴は、住居壁面の立ち上り基部付近と住居掘り方外縁に沿って小穴が配置されている。小穴は、直径0.2m、深さ0.4～0.5mで、断面形は直掘りでなく住居中心に向かって20～30°内傾し、上端がやや大きく広がる。柱痕跡は確認されていない。

一方、ＳＡ２下面からは、Ｐ１が検出された。Ｐ１は、ＳＡ２よりは先行し、位置的にはＳＡ１の中心部に位置することから主柱穴の可能性が高い。

この場合、柱穴（Ｐ１）の掘り方は、直径0.6mの楕円形プランで、深さ0.6mの二段掘りである。柱痕跡は検出されなかった。

Ｐ１をＳＡ１の主柱穴と認定した場合、Ｐ１とＳＡ１の住居外縁に沿う小穴列との芯々距離は、2.32～2.72mで求心的配置となる。

また、小穴列の芯々距離は約0.5mと約１mとほぼ等間隔に配置される。なお、主柱穴（Ｐ１）と小穴の掘り方直径から、小穴は主柱穴よりも小さい柱を使用したと推定される。



SA1・2土層注記

①：黒色土（Hue10YR 1.7/1）粘性が弱くしまりがない。赤色細粒を含む。
②：黒色土（Hue2.5YR 2/1）やや粘性がありしまりがある。アカホヤ粒をまばらに含む。
③：暗灰黄色土（Hue2.5YR 4/2）粘性はないが硬質で固くしまる。アカホヤブロックをやや密に含む。
④：黒色土（Hue5YR 2/1）①層に比べ黄味が強い。土器小片や礫をまんべんなく含む。白・黄・赤色細粒を多く含む。
⑤：黄色土（Hue2.5YR 7/8）十黒褐色土（Hue2.5YR 3/1）粘性が弱くしまりもない。アカホヤ粒を密に含む。
⑥：黄褐色土（Hue10YR 5/8）十黒褐色土（Hue10YR 2/3）土質は⑤層に近似する。
⑦a：オリーブ褐色土（Hue2.5YR 4/3）粘性が強くしまりがない。2mm以下のアカホヤ粒を密に含む。
⑦b：土質は⑦a層と近似するが、黄味が強い。
⑧：黒褐色土（Hue10YR 3/1）粘性が弱いが硬質のブロック土塊。ＭＬ１相当層由来か。
⑨a：オリーブ黒色土（Hue5YR 3/2）やや粘性がありしまりもあるが、ブロック状に割れやすい。2mm以下のアカホヤ粒を密に含む。
⑨b：⑨a層よりやや黒味が強い。
⑩：黒褐色土（Hue2.5YR 3/1）十オリーブ褐色土（Hue2.5YR 4/3）粘性弱くしまりもない。アカホヤブロック土を斑状に含む。
⑪：黒褐色土（Hue2.5YR 3/1）十暗灰黄色土（Hue2.5YR 4/2）粘性弱くしまりもない。下部にアカホヤブロック土をやや密に含む。
⑫：暗褐色土（Hue10YR 4/3）粘性はないが、やや硬質でブロック状に割れる。赤色粒をやや密に含む。
⑬：褐灰色土（Hue10YR 4/1）Ⅰ区土層の第⌋層に対応か。
⑭：1cm大の礫をまばらに、アカホヤ粒をやや密に含む。
⑮：暗赤褐色土（Hue5YR 3/2）粘性弱くしまりもない。下部にアカホヤ由来の土が斑状に混入する。
⑯：暗灰黄色土（Hue2.5YR 4/2）十黒色土（Hue2.5YR 2/1）土質は③層と近似するがアカホヤブロックの混入は少ない。
⑰a：にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR 5/4）粘性がやや強く硬質でしまりもある。下部にアカホヤブロックをわずかに含み、全体的に炭化物と焼土粒？をまばらに含む。
⑰b：⑰a層が土壌化したもの。黒味を強く感じる。
⑰c：⑰b層より黒味が弱い。

第51図　Ⅰ区縄文時代ＳＡ1・2実測図（Ｓ＝1／60）

※コンターラインは第Ⅲ層（アカホヤ火山灰層）上面

第52図　Ⅰ区遺構分布図（Ｓ＝1／100）

Ⅰ区土層注記

①：現表土。
②：造成土１。ＡＴ＋ＭＬ２＋ＭＬ３＋礫層の混合土か。
③：造成土２。②層＋⑧層＋⑨層＋⑫層の混合土か。
④：造成土３。②層のうち礫が混入しない。
⑤：造成土４。②層に比べ礫の混入が著しい。
⑥：造成土５。黒褐色土（Hue10YR 3/1）⑪、⑫層由来の土と③層の混合土か。
⑦：黒色土（Hue2.5YR 2/1）＋灰褐色土（Hue7.5YR 4/1）粘性が少なくしまりがない。３～５cm大の礫を多量に含む。樹根が著しくボロボロと崩れやすい。
⑧：灰褐色土（Hue7.5YR 4/1）やや粘性がありしまりがある。下部を中心に３cm大の礫を多く含む。
⑨：⑧層に比べ礫の混入が少ない。
⑩：暗褐色土（Hue7.5YR 3/2）粘性はないがしまりがある。上部を中心にわずかに土器片や砕片を含む。下部にアカホヤブロックをまばらに含む。
⑪：黒色土（Hue2.5YR 2/1）Ⅱ層に相当する中世～弥生時代の遺物包含層。粘性がなくしまりもやや弱い。バサバサとした土で遺物の他に赤化礫を多く含む。
⑫：黒色土（Hue10YR 1.7/1）Ⅱ層に相当する縄文時代後・晩期の遺物包含層。粘性がなくしまりもやや弱い。アカホヤブロックをまばらに含む。上部に遺物や赤化礫を多く含む。
⑬：灰オリーブ色土（Hue5YR 4/2）樹根の埋土。やや粘性がありしまりも強い。アカホヤブロックと⑧層由来のブロックを含む。
⑭：黒色土（Hue2.5YR 2/1）土質は⑬層と近似する。
⑮：黄色砂質土（Hue2.5YR 8/8）Ⅲ層（アカホヤ層）。上部は土壌化が進み黒色化が著しい。

【出土遺物】

住居床面の西側付近で縄文土器深鉢胴部と底部、打製石斧、石皿及び敲石がまとまって出土した。

また、覆土中より縄文土器深鉢や浅鉢口縁部や底部、打製石斧、磨製石斧、石鏃、二次加工剥片、磨石、敲石等が検出された。これらは破片資料であるので住居廃絶時期に近い所産と考えられる。

なお、床面出土遺物については、遺構平面図中に実測図番号を付記している。

ａ）縄文土器

ＳＡ１の床面及び覆土中より縄文土器深鉢や浅鉢などの土器が出土した。これらの土器は、胎土や調整、形態的特徴から縄文時代後・晩期に位置づけられると考えられる。

ただ、本遺構から検出された土器は、口縁部または、底部などの破片資料であるため、全体のプロポーションは不明確である。

ここでは、口縁部または底部形態と施文に観点をおいた分類を行い、若干の説明を加えることにする。

なお、個々の土器の詳細は観察表を参照されたい。

縄文土器深鉢口縁部

Ⅰ類（第53図178～184）

口縁部に沈線を施さない無文深鉢の素口縁部である。口縁部は緩やかに外反する器形をなす。工具等で、内外面とも丁寧にナデ調整が施される。

口縁端部の形状から、さらに４つに細分した。

Ⅰ－１類（第53図179・181・182）

口縁部の上端部が丁寧に面取りされ、断面矩形を呈するもの。

Ⅰ－２類（第53図180・178）

口縁部の上端部は緩やかな凹部を形成する。

Ⅰ－３類（第53図183・184）

口縁部端部の外側が面取りされ、端部断面形は丸くまとまるか、やや鋭い三角形となるもの。

Ⅱ類（第53図185）

口縁部が内湾してキャリパー状を呈す、無文深鉢土器である。口縁端部の特徴はⅠ－３類に該当する。

Ⅲ類（第53図186・187）

口縁部内面に沈線を有する口縁である。186・187は、口縁部内面に沈線を１条有する波状口縁である。

器面調整や胎土はⅠ・Ⅱ類と近似している。緩やかに外反する口縁と考えられる。

縄文土器深鉢底部

Ⅰ類（第54図194・195）

内外面ともナデ調整の平底である。194・195とも底径7.5cmと法量的に近い値を示している。

Ⅱ類（第54図193）

上げ底の底部である。底径や調整手法はⅠ類に近い。

縄文土器浅鉢口縁部（第54図192・196）

２点のみの出土であるため、あえて分類設定しない。

192は、口縁部外面に１条、口縁部付け根に１条の沈線を有している。頸部の内湾はやや短頸化している。196は、口縁部を失っているが、付け根部付近に刻み目が施される。

ｂ）石器

打製石斧（第56図217・218）

217は、ホルンフェルス製である。全体の器形から、本来の刃部は欠損したとみられ、その欠損部を剥離調整して新たに刃部を作りだしている。218もホルンフェルス製である。礫面の残る剥片を二次加工して石斧を調製する。

磨製石斧（第56図219）

砂岩製である。側縁部には敲打痕が明瞭に残っている。刃部は既に欠損している。

石鏃（第56図220）

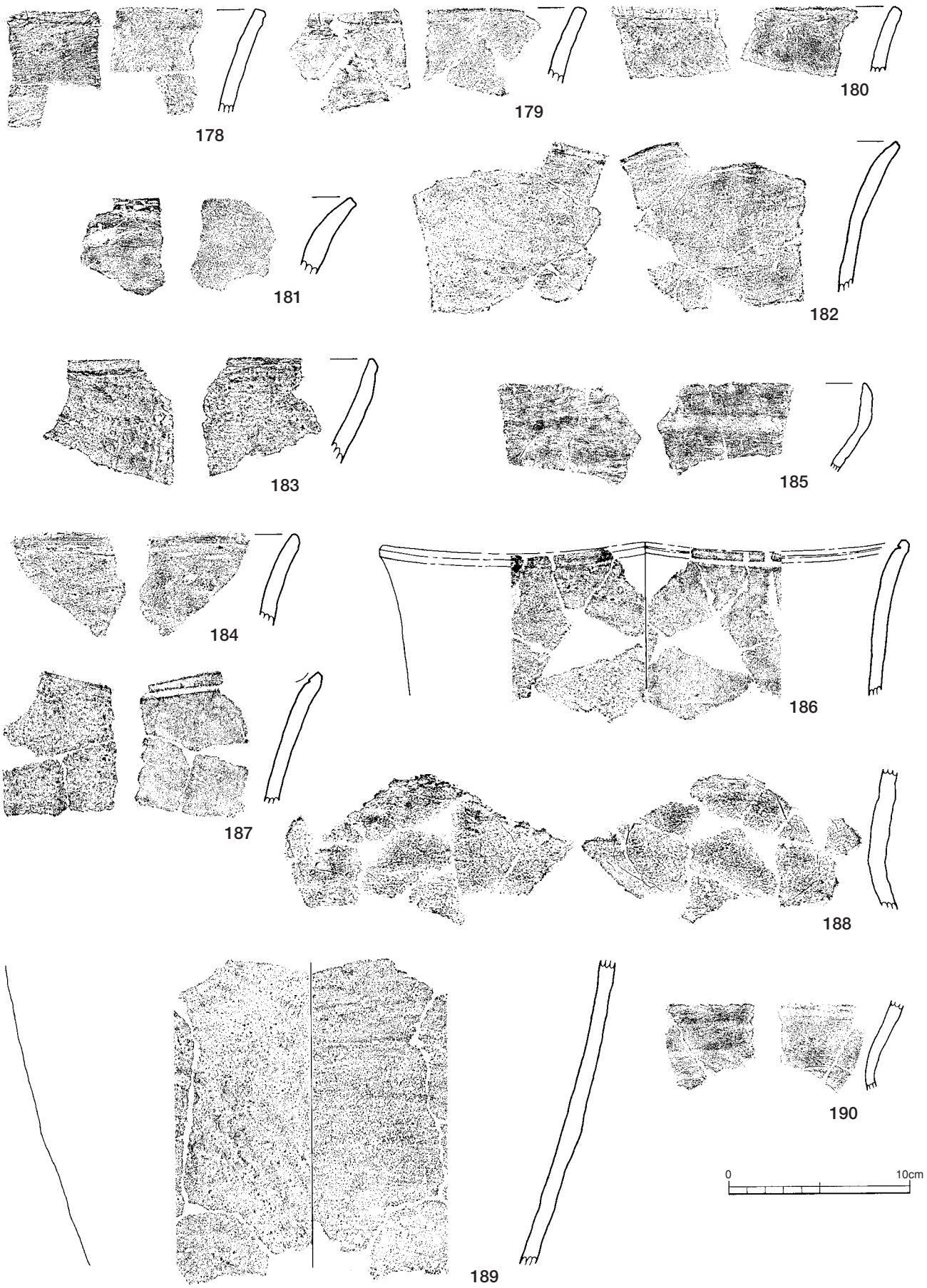
サヌカイト製の凹基式石鏃である。背腹両面とも素材面を大きく残し、作用部の一部は鋸歯状に調整剥離が施される。

二次加工剥片（第56図221）

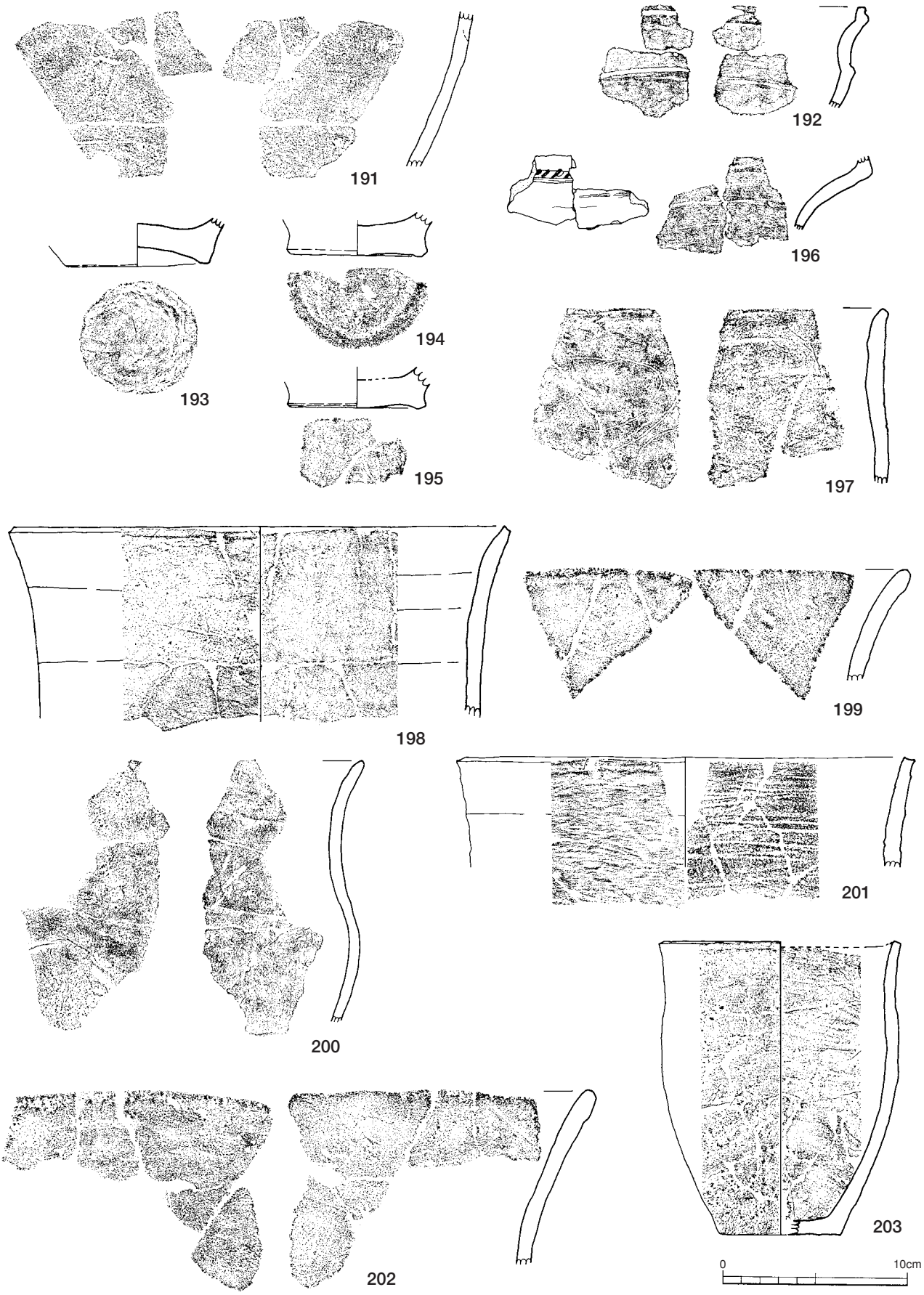
チャート製で、上半部は欠損している。側縁部を微細剥離して刃部を作りだしていると考えられる。石錐や彫器等に類似した機能が想定される。

磨石（第56図222）

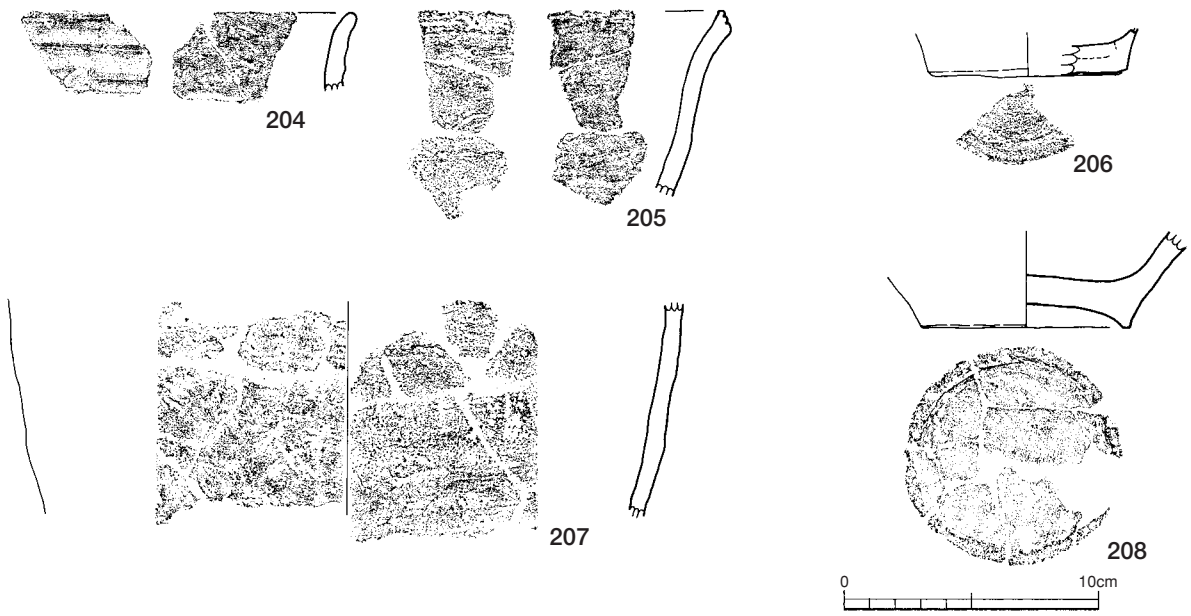
尾鈴山酸性岩類で、表裏とも磨り面となる。部分的に欠失しており、本来は直径10cm大の円礫を使用した磨石と考えられる。



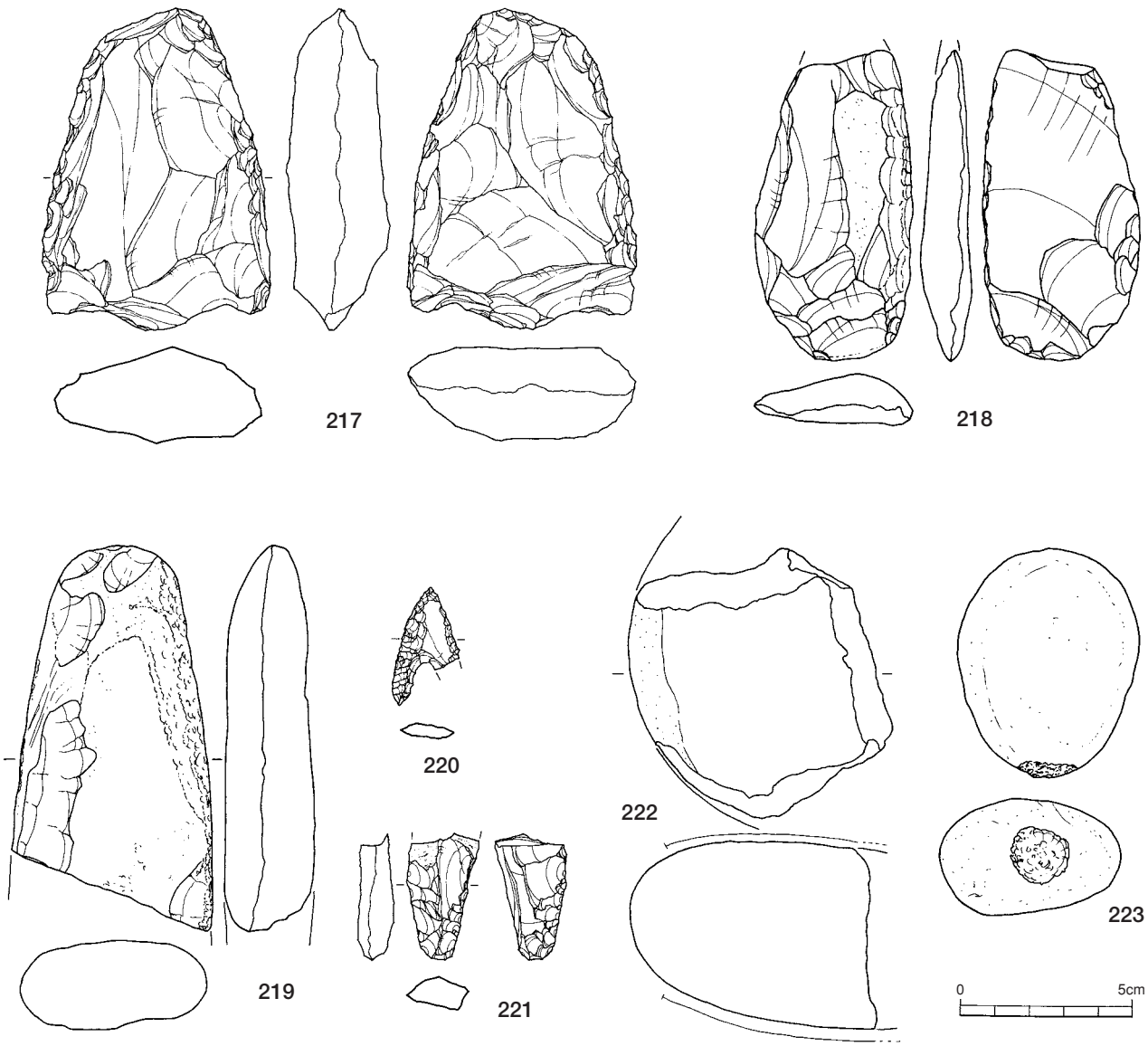
第53図　Ⅰ区ＳＡ1・2出土遺物実測図（土器）(1)（Ｓ＝1／3）



第54図　Ⅰ区ＳＡ1・2出土遺物実測図（土器）(2)（Ｓ＝1／3）



第55図　Ⅰ区ＳＡ1・2出土遺物実測図（土器）(3)（Ｓ＝1／3）



第56図　Ⅰ区ＳＡ1・2出土遺物実測図（石器）(1)（Ｓ＝1／2）

敲石（第56図223、第57図224～229）

ＳＡ１からは７点の敲石が出土した。すべて尾鈴山酸性岩類である。敲石の平面形と潰打痕のあり方から２種（223と224・225・226・227・228・229）に類別される。

223は、平面長楕円形で長軸方向に１箇所のみ使用痕（潰打痕）が認められる。

224・225・226・227・228・229は平面円形で長軸方向の両端ないし、周縁部に使用痕を有する。使用痕のあり方から、敲石側縁部を上下２段に45～60°の角度をつけて敲打したと考えられる。従って断面形は使用頻度の差こそあれ、229のようなソロバン玉に近い形状となる。

石皿（第57図234）

尾鈴山酸性岩類の石皿である。約20cm大の扁平な円礫を利用しており、使用面は全体的に平滑になるまで使い込まれており、本来の礫面は残っていない。

ただし、凹みまでは形成されていない。周縁部や底部付近は部分的に欠失している。

２号竪穴住居跡（ＳＡ２・第51図）

【規模など】

ＳＡ２は、ＳＡ１の住居中心に掘り込まれた竪穴住居である。平面形はやや不整な円形で、直径約４ｍ、床面積は約50㎡(復元)を測る。壁の残存高は0.4ｍ前後で、ＳＡ１と同様に壁体の立ち上がりは緩く、断面すり鉢状を呈す。

【覆土の状況】

住居覆土は、ＳＡ１の覆土とやや異なり、第Ⅱ層（縄文時代後・晩期包含層）に類似した、保湿の強い黒色土系である。

【柱　穴】

柱穴は、平面円形の床面中心に主柱穴（Ｐ２）が位置し、小穴列が壁面立ち上がり付近に沿うように配置される構造と考えられる。

ＳＡ２の主柱穴と、小穴列との芯々距離は、1.8～2.4mでＳＡ１と同様な求心的配置が読み取れる。

小穴間の芯々距離は約1.4ｍとほぼ等間隔である。

主柱穴の柱掘り方は直径0.4mの円形プランで、深さ0.5ｍを測る直掘りである。柱痕跡は確認できていない。一方、小穴列は、直径0.2ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測り、主柱穴に比してやや浅めである。小穴の断面形は、皿状、もしくはＳＡ１と同様な20～30°内傾して上端がやや大きく広がる形状となる。柱痕跡は確認できなかった。

なお、ＳＡ２の主柱穴埋土中(７a層)で深鉢片が集中して出土したが、これは遺構埋没過程で混入したと考えられる。

【床　面】

床面は、概して平坦であり、第Ⅲ層（K-Ah）をやや掘り込んで底面とする。床面中央付近は踏みしめられ硬化し、若干窪んでいる。

また、東側よりに黄褐色粘土塊(緑色で範囲を示す)を検出した。その粘土塊の直下には尾鈴山酸性岩類の破砕礫が３つ配置された状況で検出された。

礫と粘土塊の性格については、礫は赤化していること、粘土塊に炭化物がわずかに混入していることから炉に関連する施設の可能性がある。または、粘土塊は土器製作時の準備粘土とも解釈できる。

【遺物出土状況】

竪穴部本体から出土した大半の遺物は、第１・４層に集中し、床面直上の遺物は少ない。ただ、床面中央部付近に略完形の深鉢が横位で、別個体の土器片が数箇所にまとまって出土したのみである。

具体的な出土遺物としては、縄文土器深鉢口縁部及び底部、石錐等がある。

なお、床面直上の遺物は遺構平面図上に実測番号を付記している。

【出土遺物】

ａ）縄文土器

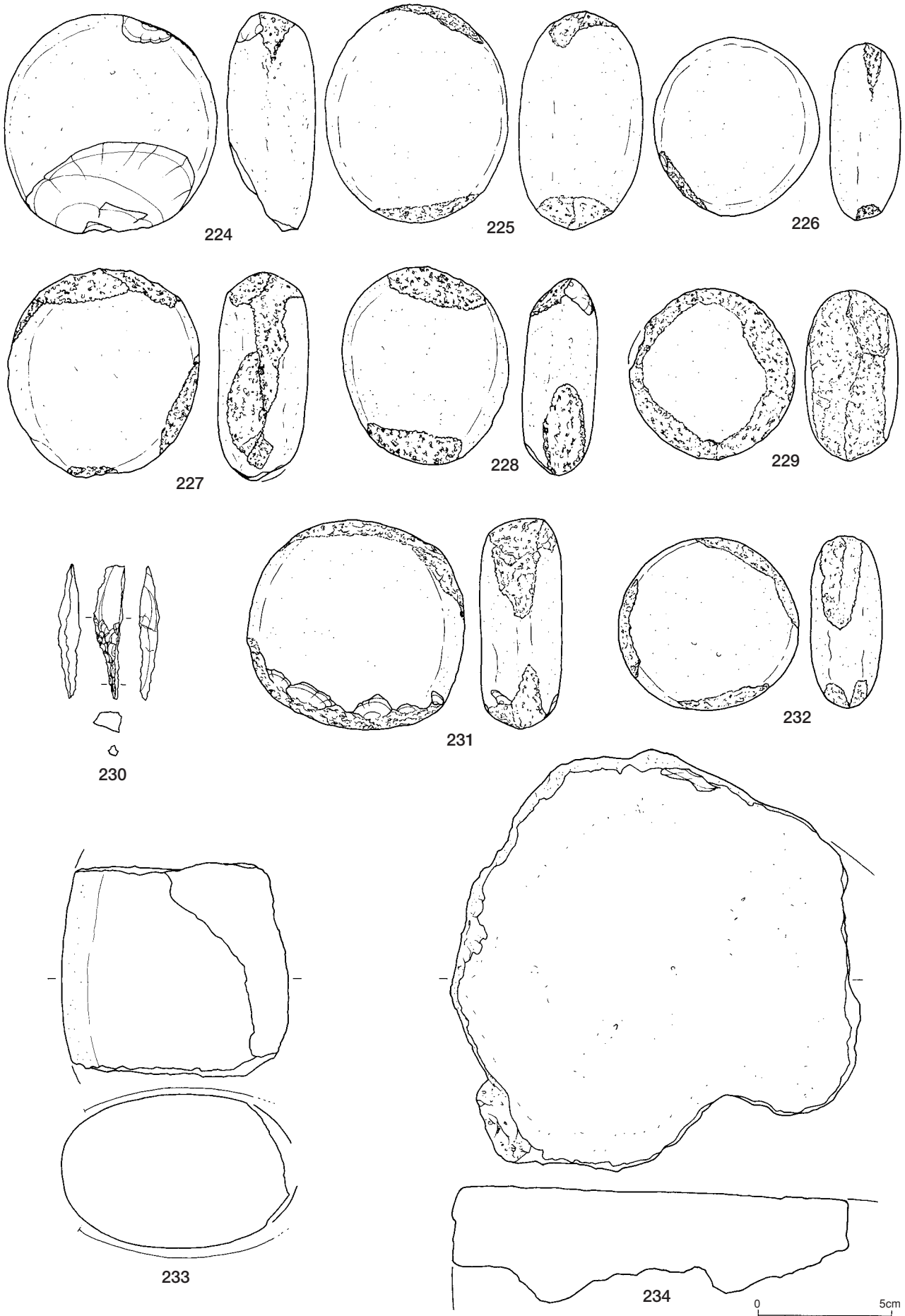
ＳＡ２出土の縄文土器はＳＡ１同様な分類基準に基づいて記述することにする。

縄文土器深鉢口縁部

Ⅰ－１類として（第54図197・203）があげられる。

Ⅰ－２類として（第54図198・201）があげられる。

Ⅰ－３類として（第54図200・第55図204）があげられる。なお、200は、胴部が大きく膨らむ形態が伺える資料である。



第57図　Ⅰ区ＳＡ1・2出土遺物実測図（石器）(2)（Ｓ＝1／2）

Ⅰ－４類（第54図199・202）

口縁端部の断面形は、Ⅰ－３類に類似するが、口縁部外面が玉縁状に肥厚する形態である。

Ⅲ類（第55図205）

外面に２条沈線を有する平口縁である。

縄文土器深鉢底部（第55図206・208）

Ⅰ類として206が該当する。また、ＳＡ１出土の194・195の底径と同じ7.5cm前後の値を示している。

なお、Ⅱ類として208が該当する。

ｂ）石器

石錐（第57図230）

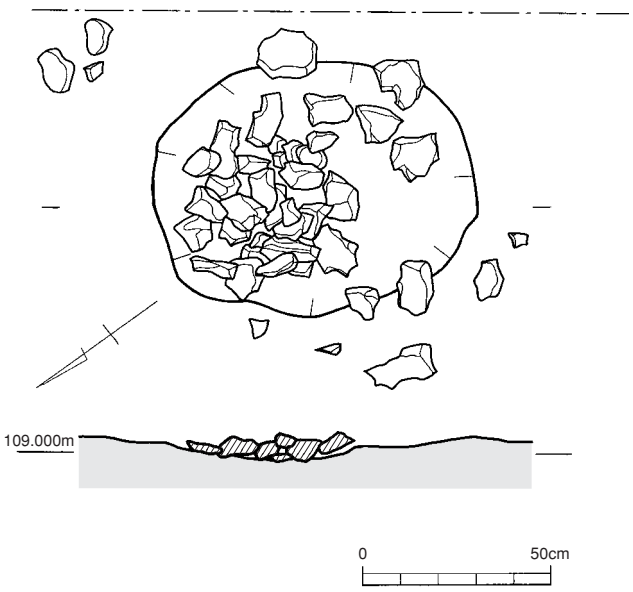
230は、チャート製である。刃部は、折損面を打面にして調整が施されている。また背面側には素材面が残されており、この素材面の状況から横長剥片素材を利用した可能性がある。

磨石（第57図233）

尾鈴山酸性岩類で、表裏とも磨り面となる。部分的に欠失しており、本来の原形は不明である

敲石（第57図231・232）

ＳＡ２からは２点の敲石が出土した。すべて尾鈴山酸性岩類である。ＳＡ１出土敲石と同様、使用面は周縁部や長軸方向の両端である。断面形はソロバン玉に近い形状となる。



第58図　Ⅰ区ＳＩ3実測図（Ｓ＝1／20）

３号集石遺構（ＳＩ３・第58図）

ＳＡ２より２ｍ東側の、調査区境界付近で検出された。検出層位は、第Ⅲ層の上面で直径0.9ｍの浅い落ち込みの内部に尾鈴山酸性岩類の破砕礫が集中していた。礫の殆どは、握りこぶし大の大きさで、部分的に赤化している。礫の総重量は約3.3kgであった。

なお、ＳＩ３からは遺物は出土していない。

（３）弥生時代の遺構と遺物

３号竪穴住居（ＳＡ３・第59図）

【規模など】

ＳＡ３は、ＳＡ１・２の南側２ｍに位置する。

遺構の平面形は2.5ｍ×2.3ｍの方形で、主軸方位は北東―南西方向を示す。床面積は5.75㎡と狭小である。床面は貼床ではなく、第Ⅲ層を直床とする。

四方のコーナー部は隅丸形を呈す。壁の残存高は四辺とも0.25ｍ程度で、ほぼ垂直に立ち上がる。

【埋土の状況】

遺構検出面は、褐灰色土(造成土)直下の第Ⅱ層（縄文後・晩期包含層）である。遺構埋土は、包含層と同じ黒色土系であったが、土質や土色で区別可能であった。

【柱　穴】

柱穴は床面でＰ１～Ｐ６の柱穴を検出した。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２本で竪穴部を両端から挟み込む配置をとる。

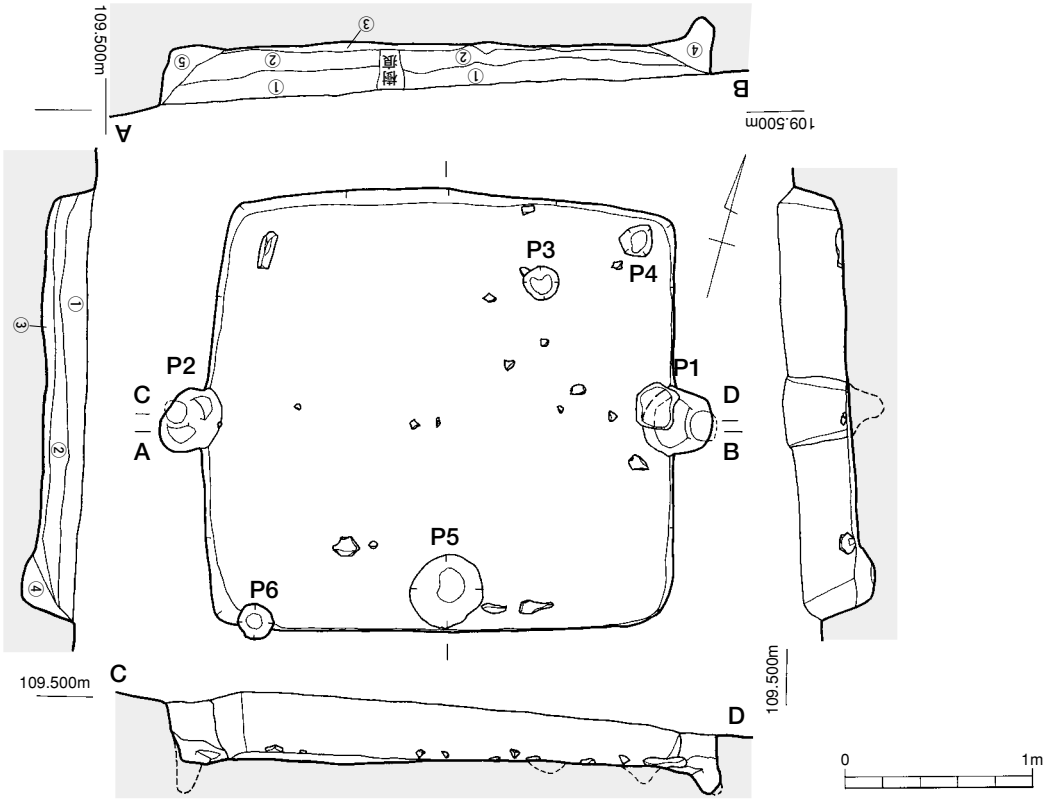
主柱穴の掘り方は、直径0.3ｍ程度の円形プランで、深さは床面より0.3ｍを測る。床面付近は広く浅い掘り込みでその下部は、竪穴部中心に向かって約45°内傾する断面形を成す。柱痕跡は、確認できなかった。柱掘り方の埋土状況から、住居廃絶時に抜き取られたことが想定される。Ｐ３とＰ４は樹痕の可能性があり、Ｐ５・Ｐ６は中世の掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

【床　面】

床面は概して平坦で、炉跡等の火処や壁帯溝、貯蔵穴などの施設は確認できなかった。

【遺物出土状況】（第60・61図）

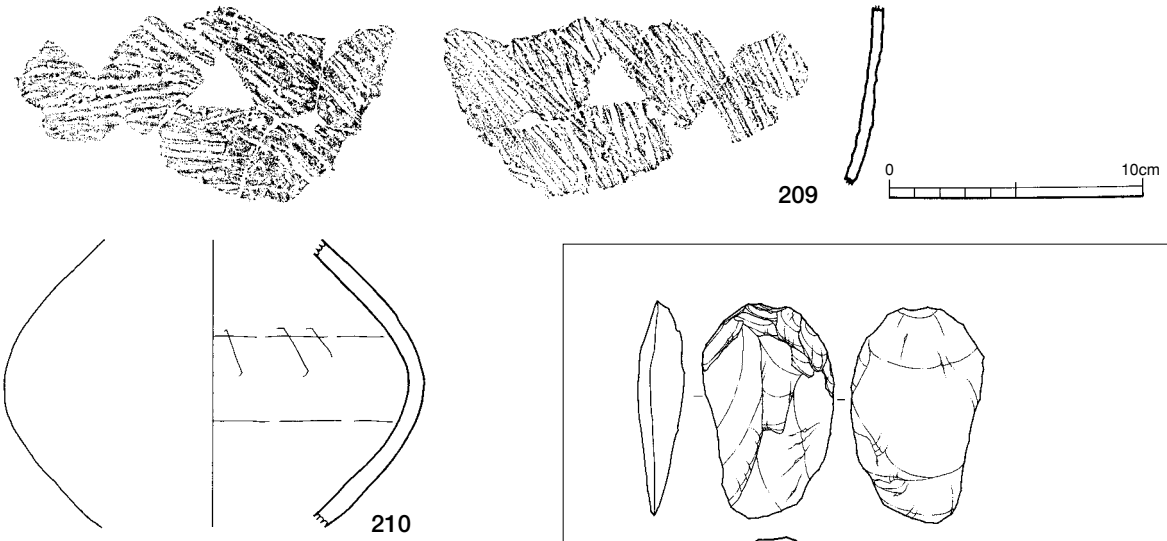
竪穴住居の東側中央床面にＰ１にもたれかけた形



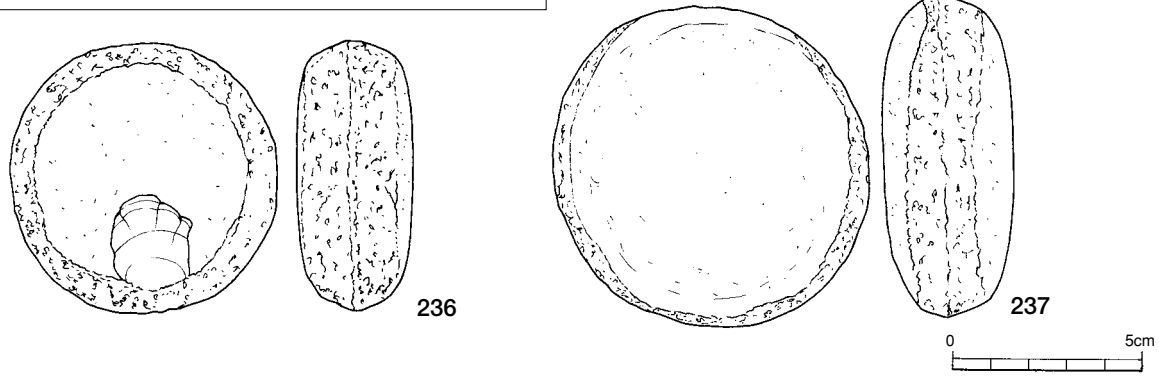
SA3土層注記

①黒色砂質土（Hue10YR 1.7/1）きめが細かく粘性がない。
②黒色土（Hue10YR 1.7/1）①層と比べ粒が粗くやや粘性があり、黒味を強く感じる。
③黒褐色土（Hue10YR 3/1）ややきめが粗く、ところどころにアカホヤ粒を含む。
④黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）Ｐ１埋土。しまりがなくアカホヤ粒を少量含む。
⑤黒色土（Hue10YR 1.7/1）Ｐ２埋土。やや粘性がありきめが粗い。白・黄色細粒をわずかに含む。

第59図　Ⅰ区弥生時代ＳＡ３実測図（Ｓ＝1／40）



第60図　Ⅰ区ＳＡ３出土遺物実測図（土器）（Ｓ＝1／3）



第61図　Ⅰ区ＳＡ３出土遺物実測図（石器）（Ｓ＝1／2）

で設置された台石（石皿？）を検出した。台石は長径0.3m、短径0.2mの略方形で、石材は尾鈴山酸性岩類である。図化はしていない。

また、床面からは剥片１点（235）、Ｐ２埋土中より敲石２点（236・237）が出土している。

なお、土器は、埋土中と床面上に散漫に出土していた。形状の知りえる土器として弥生土器壺胴部片（210）と甕胴部片（209）がある。

また、北西隅と東側中央部に扁平な礫が立位で並べ置かれた形で出土した。壁体と礫の間には0.15～0.2ｍの空間が存在することから、板壁（？）を内側から押さえる石として使用した可能性がある。

なお、炭化材は床面から第Ⅱ層上面にかけて散漫な状態で出土した。

【出土遺物】

ａ）弥生土器（第60図209・210）

209は甕の胴部である。外面にタタキ目が施され、内面にはハケメが確認される。210は床面から出土した壺の胴部である。全体的に風化が進んでおり調整が不明瞭だがナデか。内面に工具痕跡が確認される。

ｂ）石器（第61図235～237）

235はホルンフェルス製の剥片であり、床面から出土した。236・237は敲石である。断面はソロバン玉状を呈し、２点とも尾鈴山酸性岩類製である。

（４）調査区内の遺物（第62・63図）

ここでは、第Ⅱ層（縄文時代後・晩期及び弥生時代～中世の遺物包含層）の遺物について概説する。

第Ⅱ層中より縄文土器片や石器が多く出土したが、このうち、打製石斧（238・239）、磨製石斧（240）、石鏃（242）、二次加工剥片（241）、石錘（243・244）を図化し掲載した。縄文土器については、深鉢胴部片主体のため図化していない。

238・239は、ともにホルンフェルス製でＳＡ１出土の218と同様な製作技法が読み取れる。

242は、チャート製の凹基式石鏃である。背腹両面とも素材面を残さず、基部は大きく３回ほどの剥離調整で打ち出される。

241は、背面の一部と腹面に素材面を残し、刃部は交互剥離により形成されている。スクレイパーと考えられる。

第Ⅱ層中より、弥生土器壷肩部片（211・212）、東播系の片口鉢（213）、土師器皿（214～216）が出土した。

211・212の外面は、ハケメ調整というより、簾状に櫛歯状の工具でかきならしたような痕跡が認められる。

213は、底部を欠失しているが、略完形である。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上り、やや肥厚気味であることから、森田稔氏の中世須恵器編年の第Ⅲ期第１段階（13世紀前半～後半）（註１）に比定される。

214・216は、土師器皿で口径8.5㎝、底部はヘラ起し調整である。215は底部糸切りの皿と考えられる。

児湯郡域における中世土師器の編年は未だ整理されていない段階であるが、比較資料を求めると、県南部都城市田谷・尻枝遺跡26号土坑出土遺物に類似する遺物を認めることができる。この26号土坑資料は、桒畑光博氏によって13世紀後半～14世紀前半（13世紀末～14世紀初頭）と位置づけられている（註２）。

従って、214～216の土師器皿も、その年代前後に相当すると考えられる。前述の213の時期とも齟齬をきたさない。

（註1）「８　中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

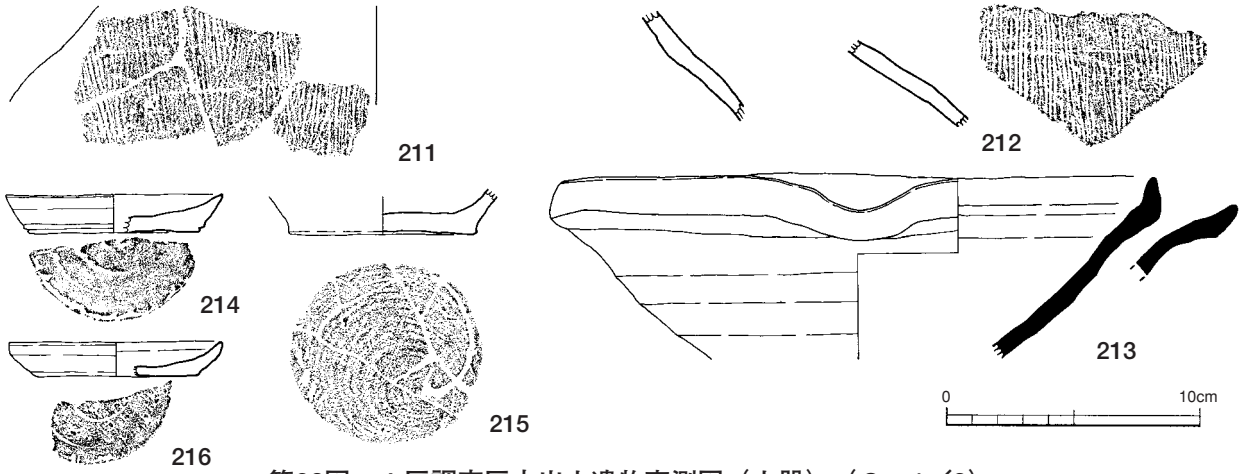
（註2）桒畑光博「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』19　2004年

（５）小結

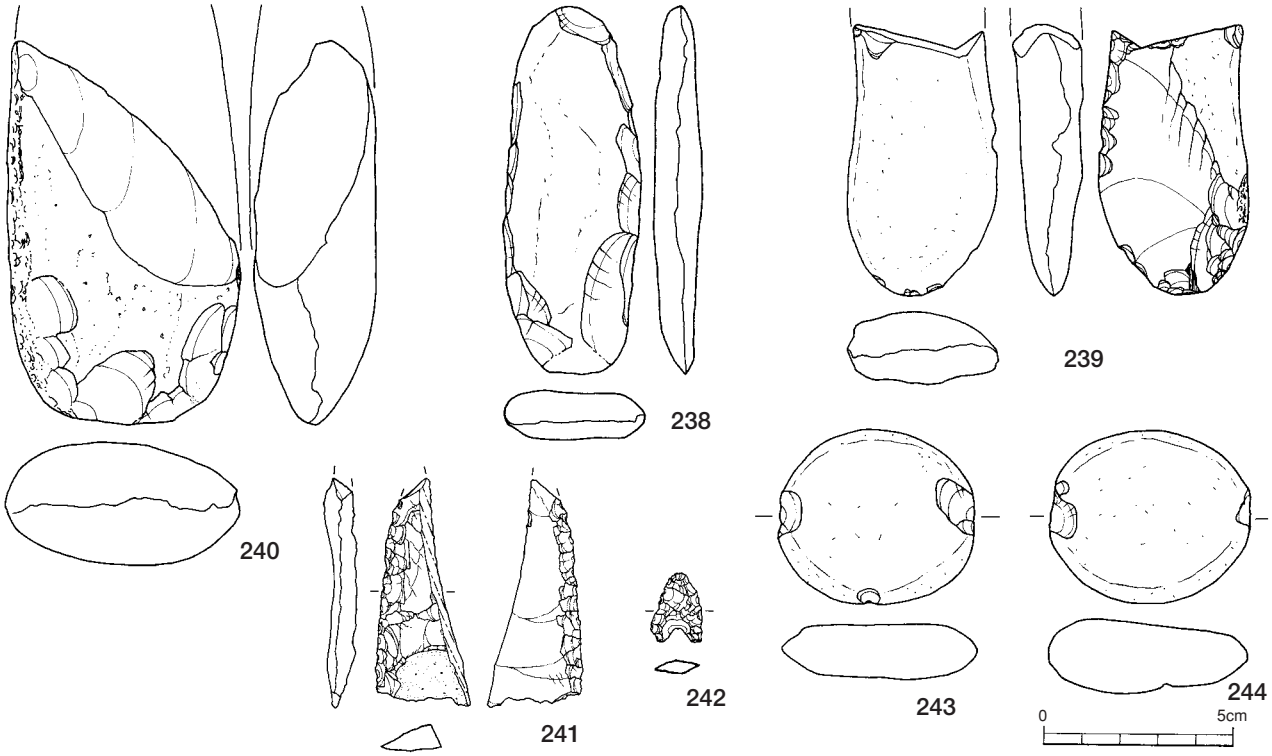
ＳＡ１・２について

ＳＡ１・２とも、時期推定の根拠となる土器自体はある程度出土したが、殆どが粗製の深鉢形土器片で、精製の浅鉢形土器は、わずか２個体分ほどである。これらは、いわゆる「縄文時代後期後半～晩期前半」の土器群と考えられる。すなわち、宮崎県下における、土器の型式的特徴から他地域の土器型式との併行関係が図れない黒色磨研土器から突帯文土器への移行期の土器群を漠然と「縄文時代後期後半～晩期前半の土器」と呼んでいる一群に相当しよう。

ただ、内外面に沈線を有する深鉢や浅鉢が少量出



第62図　Ⅰ区調査区内出土遺物実測図（土器）（Ｓ＝1／3）



第63図　Ⅰ区調査区内出土遺物実測図（石器）（Ｓ＝1／2）

土したことに注目するならば、「三万田式・鳥井原式」併行の時期が与えられる。このことからＳＡ１・２は、縄文時代後期後半～晩期前半のうち、「三万田式・鳥井原式」に併行する時期に営まれたと解釈される。

ＳＩ３については、検出層位が第Ⅲ層上面であったことから、ＳＡ１・２の時期と併行する可能性がある。

ＳＡ３について

ＳＡ３の所属時期を特定する材料は乏しく、床面出土の弥生土器壺胴部片の型式的特徴から判断せざるを得ない。胴部の偏球化、平底をわずかに残す底部から、石川悦雄氏の宮崎平野部弥生土器編年案(1995年宮崎考古学会例会資料)によれば、概ねＶｄ期(弥生時代後期後半)に相当する小型壺である。児湯郡内では、上ノ原遺跡第１号竪穴住居出土土器と類似する。後出する土器として、川南町銀座ＩＢ遺跡自然流路出土土器(終末期)がある。

番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
178	縄文	深鉢	口縁部	SA1				全体的にナデ。口唇部横ナデ。	横ナデ。	にぶい褐 灰褐	にぶい褐	良好	1mm以下の灰白と黒の粒、2mm程度の灰色粒を含む。	口唇部近くにスス付着。
179	縄文	深鉢	口縁部	SA1				粗い横ナデ。口唇部横ナデ。	横ナデ。	灰黄褐 黒褐	にぶい褐	良好	1mm以下の灰白色粒を多く含み、3mm大の灰白・灰色粒をところどころに含む。	全体的にスス付着
180	縄文	深鉢	口縁部	SA1				斜め方向のナデ。口唇部付近に横方向のナデ？	横ナデ。	にぶい橙	明赤褐	良好	3mm以下の乳白色・灰色粒を多く含み、1mm以下の透明粒を多く含む。	
181	縄文	深鉢	口縁部	SA1				横ナデの後、線刻を施す。上部にスス付着。	横ナデ。	明赤褐	橙 灰褐	良好	1mm以下の灰白・灰色粒を多数、微細な光沢粒をわずかに含む。	線刻
182	縄文	深鉢	口縁部	SA1				横ナデ。擦痕あり。口唇部に粘土のたるみあり。	横ナデ。指頭痕あり。	灰褐 にぶい褐	灰褐 にぶい褐	良好	1mm以下の灰白色粒を多く含み、1～2mm程度の灰・黒色粒を少し含む。	
183	縄文	深鉢	口縁部	SA1				ナデ。口唇部に粘土のたるみあり。	横ナデ。	にぶい褐 黒	にぶい褐 黒	良好	1mm以下の灰白色粒を多く含む。	ところどころにスス・炭化物付着。
184	縄文	深鉢	口縁部	SA1				斜め・横方向のナデ。一部にスス付着。	横ナデ。一部に黒斑。	黄褐	にぶい黄橙	良好	1mm以下のにぶい黄橙色粒を多く、灰白色粒を少し、透明な光沢粒をわずかに含む。	
185	縄文	深鉢	口縁部	SA1				斜め・横方向の粗いナデもしくは貝殻？口唇部付近に粘土のたるみあり。	斜め・横方向のナデ。	にぶい褐	褐	良好	2mm以下の灰白色粒を多く含み、1mm以下の黒色粒を少し含む。	一部黒斑がみられる。
186	縄文	深鉢	口縁部	SA1				ナデ。	口唇部付近に沈線あり。ナデ。	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	2mm以下の灰白色粒、微細な半透明の光沢粒を多く含む。	波状口縁。
187	縄文	深鉢	口縁部	SA1				横ナデ。一部縦方向のナデ。	口唇部付近に沈線あり。 横ナデ。	にぶい黄橙	橙	良好	3mm以下の灰白色粒を多く含む。1mm以下の黒色・半透明の光沢粒を含み、にぶい赤褐色粒をわずかに含む。	一部黒斑？
188	縄文	深鉢	頸部	SA1				斜め・横方向の粗いナデ。	横ナデ。一部スス付着？	にぶい褐	褐	良好	3mm以下の灰白色粒、1mm以下の赤褐色粒・灰黄色粒を多く含む。	
189	縄文	深鉢	胴部	SA1				縦方向のナデ。擦痕が著しい。	横方向へ貝殻腹縁のナデの後、粗いナデ。	褐 にぶい黄褐	褐	良好	2mm以下の灰白色・黒色粒を多く含む。	
190	縄文	深鉢	頸部 胴部	SA1				風化気味だが横方向のミガキ。	風化気味だが横方向のミガキ。	明赤褐	明赤褐	良好	1～2mm程度の灰白・黒色粒、1mm程度の透明な光沢粒を含む。	
191	縄文	深鉢	胴部	SA1				ナデ。	横ナデ。	にぶい褐	褐	良好	1mm以下の灰白色粒、1～2mmの灰・黒色粒を含む。	補修孔？
192	縄文	浅鉢	口縁部 胴部	SA1				沈線を挟み、横方向の丁寧なヘラミガキ及び指おさえの後横方向の丁寧なヘラミガキ。	横方向の丁寧なヘラミガキ。	灰褐 黒褐	灰褐 黒褐	良好	2mm以下の灰白色・灰色・褐色粒を含む。	沈線。
193	縄文	深鉢	底部	SA1		7.9		粗いナデ。底面はやや丁寧なナデ。一部に粘土のたるみあり。	ナデ。炭化物付着。	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	1mm以下の灰白色・黒色粒を多く、ところどころに微細な光沢粒を含む。	
194	縄文	深鉢	底部	SA1		推定 7.7		ナデ。底面は粗いナデ。	ナデ。粘土のたるみあり。	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の灰白色・黒色粒、黒色光沢粒を含む。	指頭痕？
195	縄文	深鉢	底部	SA1		推定 7.6		ナデ。	風化が著しく不明瞭だがナデか。	橙	褐	良好	2mm以下の灰白色・灰色・黒色粒を含む。	
196	縄文	浅鉢	胴部	SA1				横方向のナデ。爪形文。	横方向のナデ。部分的にミガキ。	明赤褐 灰	明赤褐	良好	2～4mm程度の小石を少し含み、1mm以下の乳白色粒を多く含む。	爪形文
197	縄文	浅鉢	口縁部 胴部	SA2				横ナデの後、線刻を施す。上部にスス付着。	横ナデ。	明赤褐	橙 灰褐	良好	1mm以下の灰白色・灰色粒を多く、微細な光沢粒を少し含む。	線刻

第18表　Ⅰ区土器観察表(1)

番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
197	縄文	深鉢	口縁部 胴部	SA2				横ナデの後、線刻を施す。上部にスス付着。	横ナデ。	明赤褐	橙 灰褐	良好	1mm以下の灰白色・灰色粒を多く、微細な光沢粒を少し含む。	
198	縄文	深鉢	口縁部 頸部	SA2	推定 29.6			斜め・横方向の粗いナデ。ところどころにナデによる粘土のたるみあり。	斜め・横方向のナデ。	橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白色粒、1mm以下の灰白色粒、微細な黒色光沢粒を多く含む。	一部黒斑あり。
199	縄文	深鉢	口縁部 頸部	SA1 SA2				ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙	橙	良好	3mm以下の乳白色粒を多く、1mm以下の透明粒・黒色光沢粒を少し、2mm以下の灰色粒を少し含む。	
200	縄文	深鉢	口縁部 底部	SA1 SA2				ナデ（工具によるナデの痕跡あり）。	横ナデ。	赤褐	にぶい赤褐	良好	1～2mm程度の灰白色粒、微細な光沢粒を含む。	
201	縄文	深鉢	口縁部	SA1 SA2	推定 24.1			斜め・横方向のナデ（貝殻？）。	横ナデ。	褐	にぶい黄褐	良好	1mm以下の浅黄色・黒色粒を多く含む。	外面全体にスス付着。
202	縄文	深鉢	口縁部 頸部	SA1 SA2				ナデ。下部横ナデ。	ナデ。	橙	橙	良好	2mm以下の乳白色粒を多く、4mm程度の灰色・乳白色石を少し、1mm以下の透明・黒色光沢粒をごくわずかに含む。	
203	縄文	深鉢	口縁部 底部	SA2	推定 12.6	7.1	16.0	粗い横ナデ。粗い斜め方向のナデ。部分的に斜め方向のナデの後、縦方向のナデ。	粗い横方向のナデ。工具痕あり。部分的に指頭痕あり。	明赤褐 褐灰	にぶい赤褐 黒褐	良好	1mm以下の黒色光沢粒・乳白色粒・透明粒を多く含み、3mm以下の灰色粒を少し含む。	工具痕、指頭痕あり。底部は歪。
204	縄文	深鉢	口縁部	SA1 SA2				横方向の強いナデ。	ナデ。	明赤褐	橙	良好	3mm以下の乳白色・灰色粒を多く含み、2mm以下の透明粒を多く含む。	圧痕あり。
205	縄文	深鉢	口縁部 胴部	SA1 SA2				横方向のナデ。	横方向のナデ。一部指頭痕あり。	明赤褐 橙	にぶい褐	良好	2mm以下の乳白色・灰色粒を多く含む。	口唇部は風化が著しいが2本の沈線あり。
206	縄文	深鉢	底部	SA1 SA2		推定 7.9		横ナデ。	ナデ。	明褐	にぶい黄褐	良好	1mm以下の灰白色・灰色・黒色粒を含む。	粘土のつなぎあり。
207	縄文	深鉢	胴部	SA1 SA2		8.3		斜め・横方向のナデ。	横ナデ。	暗褐	褐	良好	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の灰白色粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む。	全体的にスス付着。
208	縄文	深鉢	底部	SA1 SA2				横ナデ。ナデ。	風化のため不明瞭だがナデか。	明赤褐 にぶい褐	にぶい褐 灰褐	良好	2mm以下の灰白色・灰色・黒色粒を多く含む。	一部スス付着。
209	弥生	甕	胴部	SA3				横方向や斜め方向にタタキ目。一部に砂粒あり。	斜め方向のハケ目。	にぶい黄橙 明赤褐 褐灰	にぶい黄褐 黒褐	良好	6mm程度の灰・乳白色の小石をわずかに含み、1～3mmの乳白色粒を多く含む。	部分的にスス付着
210	弥生	壺	胴部	SA3				全体が風化していて調整が不明瞭だが丁寧なナデか	全体的に風化気味だがナデか。一部に工具痕跡あり。	浅黄橙 黒褐	黒	良好	3mm以下の灰白色の粒を多く含む。	全体的にスス付着
211	弥生	壺	肩部	Ⅰ区				簾状に櫛歯状工具でかきならしたか	横方向のナデ	橙 にぶい黄橙	明褐 にぶい黄褐 黒	良好	2mm以下の灰白・灰色粒、3～6mm程度の小石を含む。	
212	弥生	壺	肩部	Ⅰ区				簾状に櫛歯状工具でかきならしたか	横方向のナデ	橙	橙	良好	2mm以下の灰白・灰色粒、3～6mm程度の小石を含む。	
213	中世	片口鉢	口縁部 胴部	Ⅰ区	23.7			横ナデ。	横ナデ。	灰白	灰白	良好	1mm以下の灰色粒を多く含む。4.5mmの灰白色粒を1粒含む。	一部黒斑あり。東播系。
214	中世	土師皿	口縁部 付近 底部	Ⅰ区	推定 8.7	推定 6.8	1.5	横ナデ。底部は粘土のたるみが強い。	横ナデ。指頭痕あり。	にぶい橙	にぶい橙	良好	微細な赤褐色粒を少し含む。	ヘラ切り底。部分的に黒斑あり。指頭痕あり。
215	中世	土師皿	口縁部 底部	Ⅰ区	推定 8.5	推定 6.6	1.4	横ナデ。	横ナデ。	淡橙	淡橙	良好	微細な赤褐色粒を少し含む。	ヘラ切り底。部分的に黒斑あり。
216	中世	土師皿	胴部 底部	Ⅰ区		7.5		回転ナデ。	ナデ。炭化物付着。	浅黄橙	浅黄橙 灰黄褐	良好	1mm以下の赤褐色粒、2mm大の透明光沢粒を1個含む。	

第19表　Ⅰ区土器観察表(2)

図版６　ＳＡ2出土土器（203）

図版７　ＳＡ2出土線刻土器（197）

番号	器種	位置	注記番号	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
217	打製石斧	SA1	SA1-4	ホルンフェルス	9.5	6.7	2.8	222.4	
218	打製石斧	SA1	SA1 A-8	ホルンフェルス	9.1	4.7	1.5	70.2	
219	磨製石斧	SA1	SA1 B-7	砂岩	11.2	5.9	2.7	233.8	
220	石鏃	SA1	SA1 A-3	サヌカイト	3.5	2.0	0.4	2.4	凹基式
221	二次加工剥片	SA1	SA1 B-2	チャート	3.7	2.1	1.0	8.1	
222	磨石	SA1	SA1 B-2	尾鈴山酸性岩類	7.9	7.8	5.5	424.4	
223	敲石	SA1	SA1-1	尾鈴山酸性岩類	6.8	5.3	3.5	168.8	
224	敲石	SA1	SA1 A-7	尾鈴山酸性岩類	8.2	8.0	3.3	312.7	
225	敲石	SA1	SA1 B-2	尾鈴山酸性岩類	8.2	6.9	4.6	377.7	
226	敲石	SA1	SA1-7	尾鈴山酸性岩類	6.7	6.3	2.6	161.2	
227	敲石	SA1	SA1-12	尾鈴山酸性岩類	7.8	7.2	3.4	300.8	
228	敲石	SA1	SA1-11	尾鈴山酸性岩類	7.4	6.3	2.7	194.1	
229	敲石	SA1	SA1 A-2	尾鈴山酸性岩類	6.4	6.2	3.5	196.2	
230	石錐	SA2	SA2 P-1	チャート	5.0	6.2	0.9	3.8	背面に素材面
231	敲石	SA1·2	SA1・2	尾鈴山酸性岩類	7.9	8.2	3.1	328.9	
232	敲石	SA1·2	SA1・2	尾鈴山酸性岩類	6.7	6.5	2.7	180.2	
233	磨石	SA1·2	SA1・2	尾鈴山酸性岩類	8.1	8.5	5.8	690.0	
234	台石	SA1	SA1-10	尾鈴山酸性岩類	15.9	15.5	4.4	1288.8	
235	剥片	SA3	SA3 A-10	ホルンフェルス	5.7	3.5	1.1	26.4	
236	敲石	SA3	SA3 P-2	尾鈴山酸性岩類	7.2	7.1	3.1	256.5	
237	敲石	SA3	SA3 P-2	尾鈴山酸性岩類	8.5	8.5	3.5	390.2	
238	打製石斧	Ⅰ区	Ⅰ	ホルンフェルス	9.8	3.7	1.3	60.9	
239	打製石斧	Ⅰ区	Ⅰ	ホルンフェルス	7.1	4.0	1.9	68.0	
240	磨製石斧	Ⅰ区	Ⅰ	尾鈴山酸性岩類	10.1	6.2	3.3	226.2	
241	二次加工剥片	Ⅰ区	Ⅰ	頁岩	6.1	2.6	0.9	10.0	スクレイパー？
242	石鏃	Ⅰ区	Ⅰ	チャート	1.9	1.4	0.4	0.8	凹基式
243	打欠石錘	Ⅰ区	Ⅰ	砂岩	4.6	5.2	1.5	50.4	
244	打欠石錘	Ⅰ区	Ⅰ	砂岩	4.6	5.3	2.0	65.7	

第20表　Ⅰ区石器計測表

第５節　まとめ

１　旧石器時代

遺構は、礫群２基を検出した。礫の密度は低いもののほとんどが赤化した礫の集合体である。礫の石材は、全て尾鈴山酸性岩類である。使用礫の大小の差、検出位置のわずかな差はあるが、２基の礫群はほぼ同時期の所産と考えられる。

遺物は、ナイフ形石器、細石刃核、角錐状石器などが出土した。細石刃核と剥片の接合がみられたのが大きな特徴である。

２　縄文時代草創期

Ｇ区では、縄文時代草創期の隆帯文土器が多数出土した。これらの隆帯文土器は、宮崎市椎屋形第１遺跡や堂地西遺跡出土土器と類似する。ただし、本遺跡では直立口縁のみである。また、本遺跡で出土した隆帯文土器の文様構成は、爪形文と隆帯文が折衷する構成が主体で、隆帯文土器から爪形文土器へと移行する際の型式と捉えられる。したがって、本遺跡土器群は、椎屋形第１遺跡出土土器と併行するか後出する型式と考え草創期後半～末の時期が与えられる。

上記の土器群に伴う遺物は、石鏃、スクレイパー、くさび形石器、石核など約1,150点出土した。

３　陥し穴状遺構について

Ｋ区では陥し穴状遺構が、ＭＬ１上面において２基検出された。土層断面より、掘り方の大きいＳＣ１の埋没後、やや小さいＳＣ２がほぼ位置を違えずに掘削されたと考えられる。２基の切りあいであることから、この地点が「獣道」上に位置していた可能性がある。調査区内ではこの２基のみの検出であるため、調査区外に点在する可能性がある。

川南町における陥し穴状遺構検出例は、後牟田遺跡（後期旧石器とされる）に次ぎ、２例目となる。

東九州自動車道（都農～西都間）内の発掘調査においては、特に新富・高鍋町内で多数の陥し穴状遺構が検出されている。川南町内の調査事例は、まだ少ない。遺跡立地と関連する可能性があり、今後注意深く見守る必要があろう。

４　縄文時代後期

Ｉ区では、竪穴住居跡２軒と集石遺構を１基検出した。２軒の竪穴住居跡は平面円形プランで中央に主柱穴を有す。また、壁面の立ち上がりは緩く断面皿状を呈する点で、野首第２遺跡の住居形態と近似する。遺構の時期は、遺物から縄文時代後期後半～晩期前半と考えられる。

遺物は、縄文土器深鉢、石斧、石鏃、磨石、石皿、剥片等が出土したが、浅鉢や台付皿は出土していない。

川南町では縄文後・晩期の竪穴住居跡の検出例は初めてと考えられる。児湯郡内では、本遺跡と併行ないし前後する縄文集落遺跡として、木城町石河内本村遺跡、高鍋町野首第２遺跡等が挙げられる。竪穴住居跡の構造は規模は別として、平面円形プランで中央に主柱穴をもち、壁体の立ち上がりは緩く、断面すり鉢状を呈す点で類似している。立地は、川を望む緩やかな丘陵縁辺付近と類似しているが、本遺跡の場合は、谷奥部に入りこんだ地点になること、住居内からは浅鉢は殆ど出土せず、台付皿は皆無である。このことから集落の本体は路線外の東側に下った扇状地部分であろう。また、竪穴住居跡に隣接して検出された集石遺構は、検出層位から縄文後期～晩期に所属すると考えられる。

５　弥生時代後期後半

川南町では多くの弥生時代後～終末期の集落が調査されているが、台地上又は丘陵縁辺部に集中するあり方を示すのが一般的である。しかし、本遺跡の場合は谷奥部の河川のほとりで検出されたこと、一辺が２ｍ前後ほどの小さい竪穴住居形態で単独立地することから、一般集落とは性格を異にする印象が強い。縄文後期集落と同じように集落本体は路線外に展開すると想定される。出土した遺物は弥生土器甕と壺、石皿があり、弥生時代後期後半の時期が与えられる。

Ｂ区近景（北から）

Ｂ区礫群（ＳＩ２）検出状況（西から）

Ｇ区～Ｋ区全景（虚空蔵免遺跡から）

Ｋ区から虚空蔵免遺跡をのぞむ

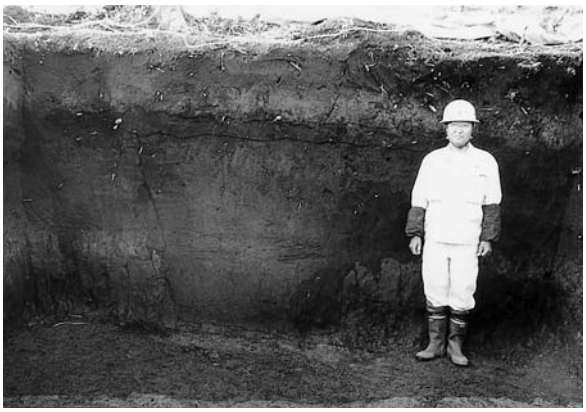
Ｇ区全景（北東から）

Ｇ区隆帯文土器出土状況

Ｇ区から虚空蔵免遺跡をのぞむ

Ｋ区陥し穴検出状況（1）（北から）

Ｋ区陥し穴検出状況（2）（北東から）



陥し穴（ＳＣ１・２）半截状況（南東から）

陥し穴（ＳＣ１・２）土層断面

陥し穴（ＳＣ１・２）完掘状況

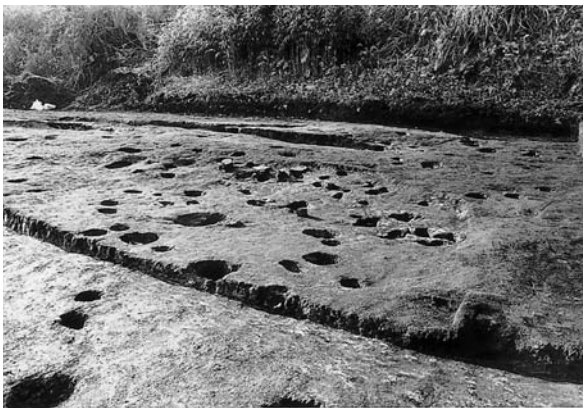
Ｉ区集石遺構（ＳＩ３）検出状況（北東から）

Ⅰ区近景（北西から）

Ⅰ区遺構分布状況（西から）

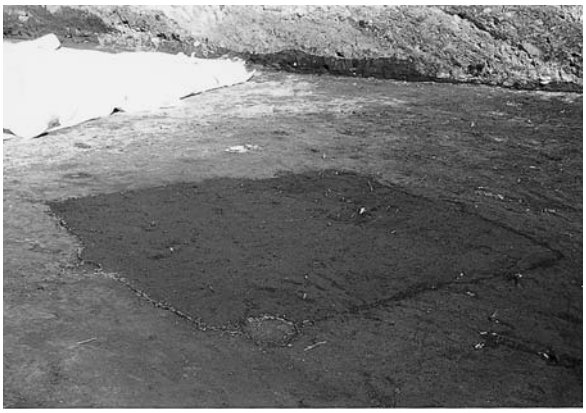
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）検出状況（北東から）

竪穴住居跡（ＳＡ１・２）土層状況（西から）

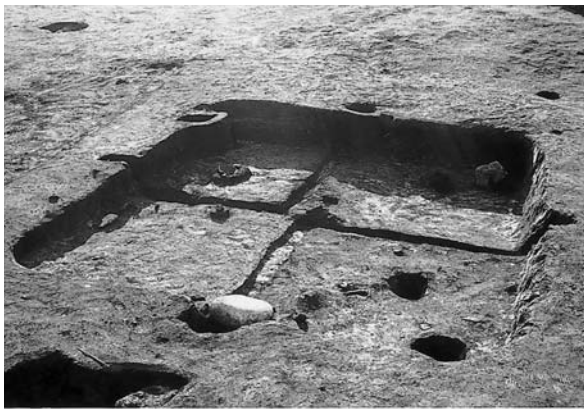


竪穴住居跡（ＳＡ１・２）（南から）

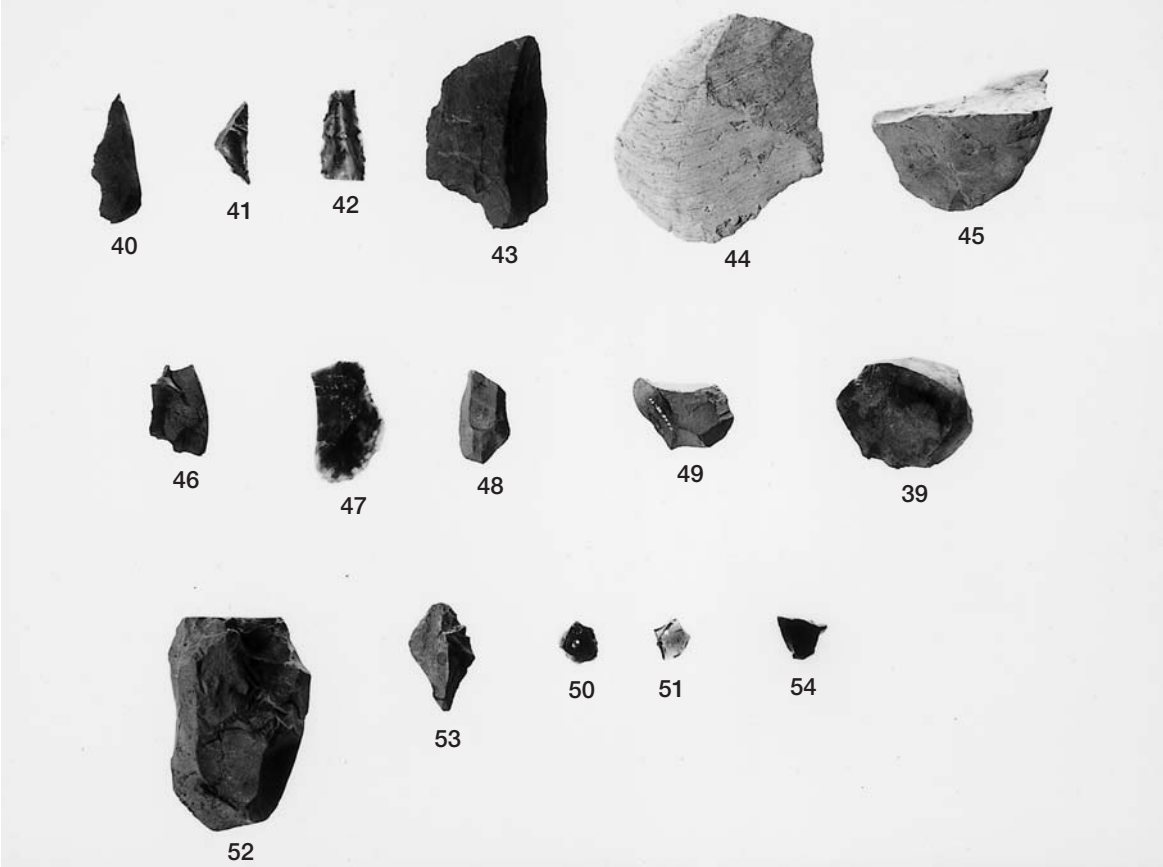
竪穴住居跡（ＳＡ１・２）（北西から）



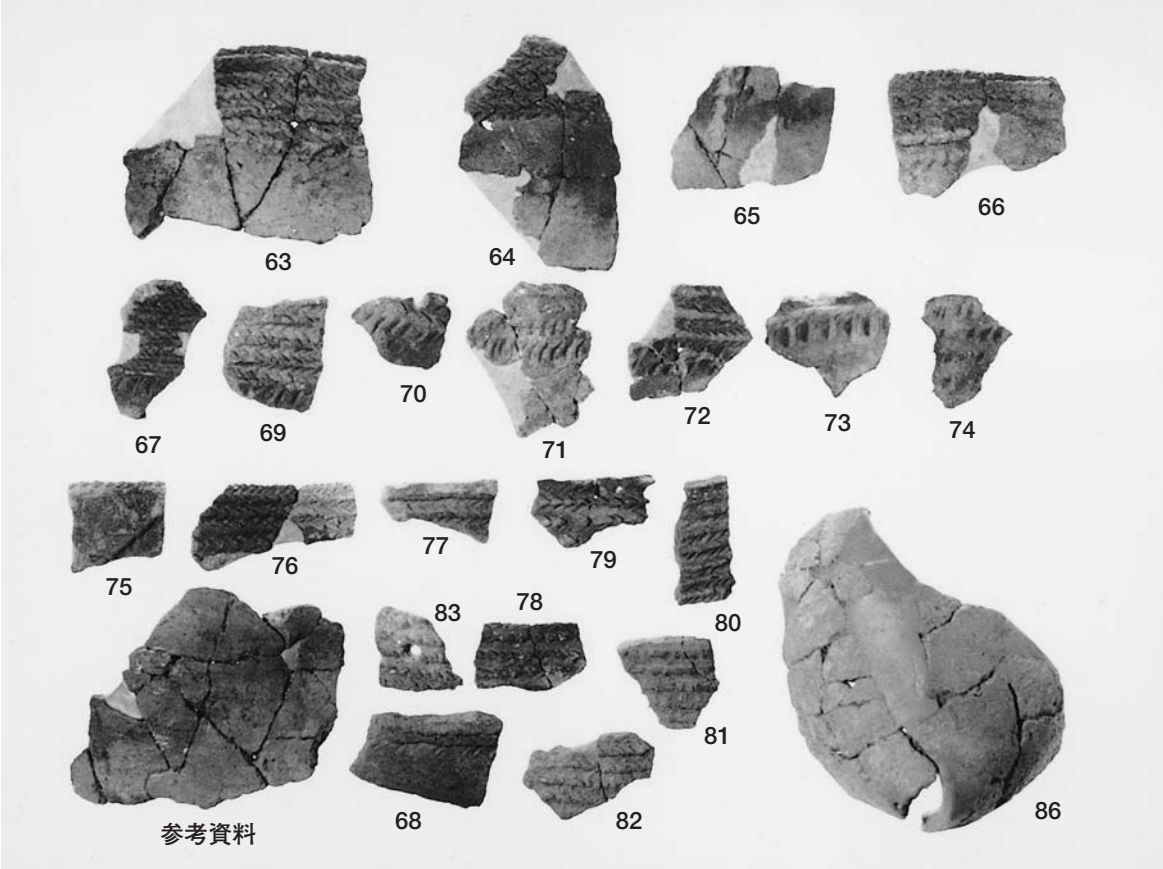
竪穴住居跡（ＳＡ３）検出状況（南から）



竪穴住居跡（ＳＡ３）（北から）

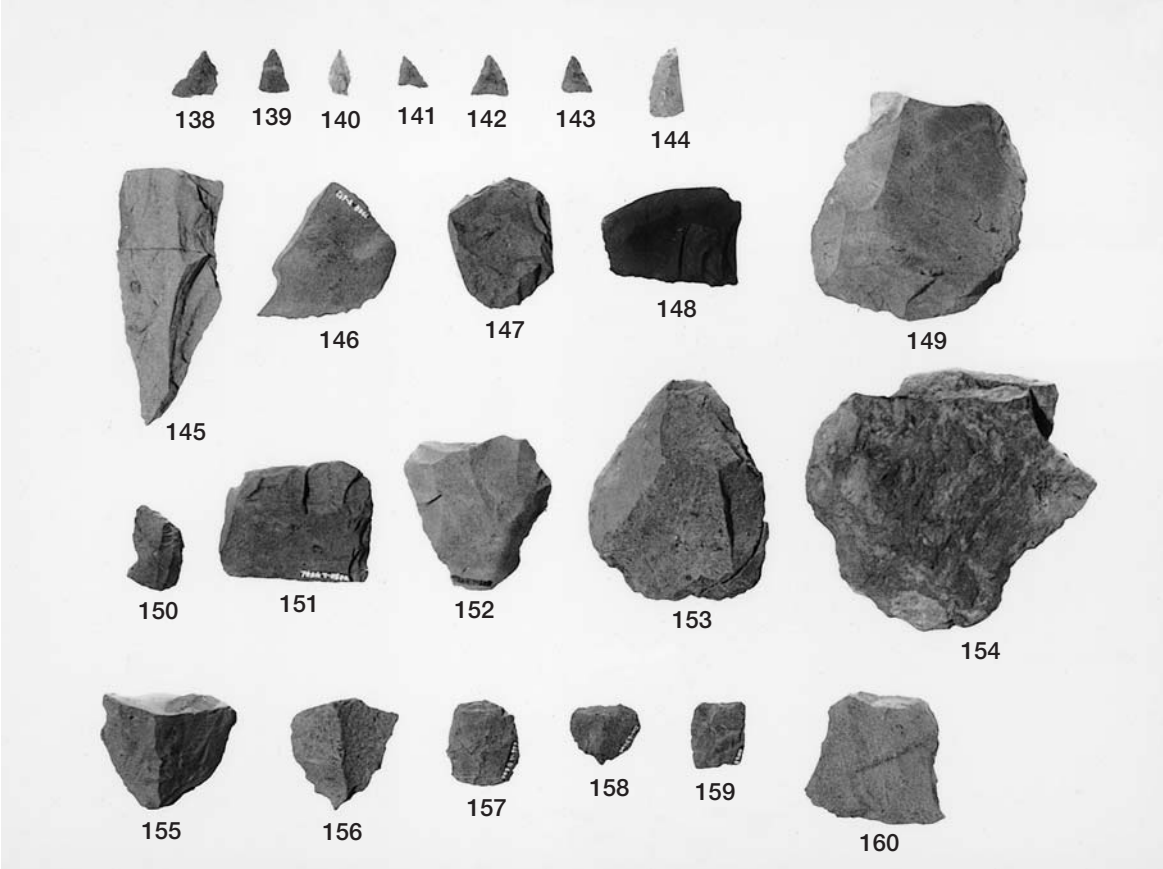


B区出土遺物（石器）

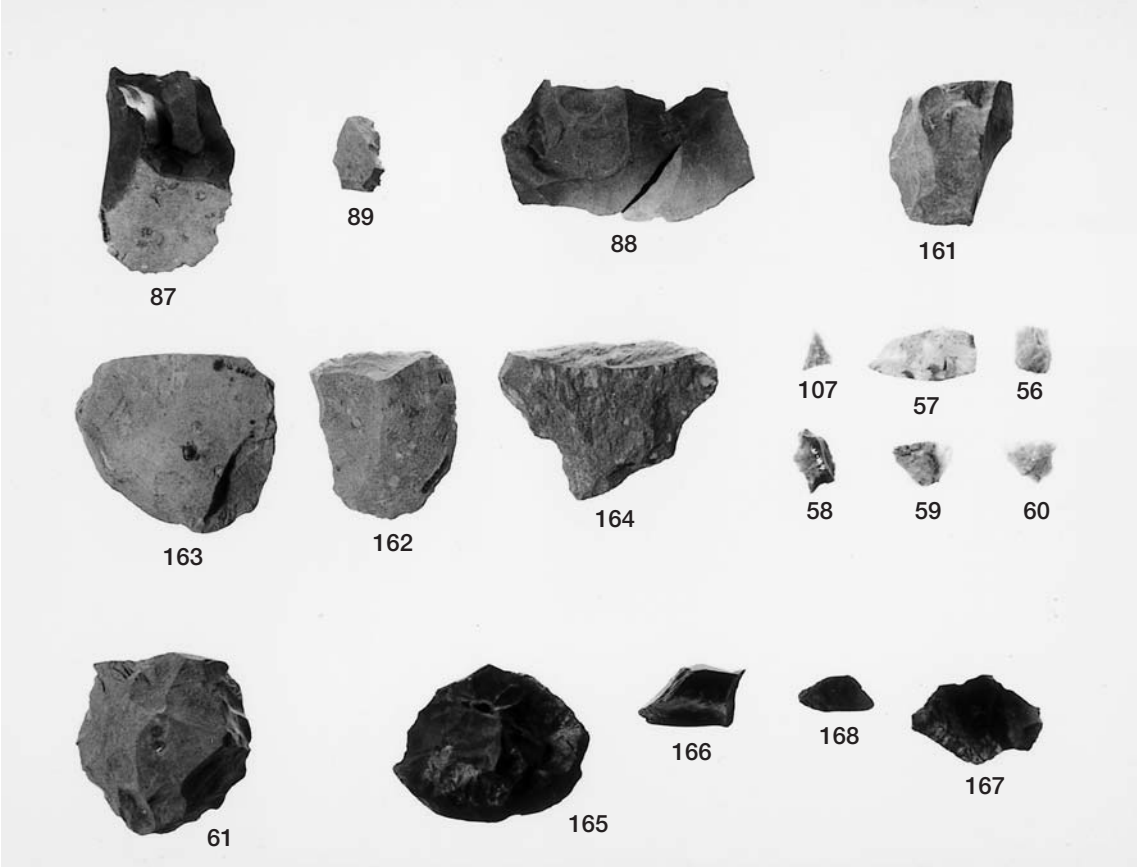


G区出土遺物（土器）

G区出土遺物（チャート製石器）

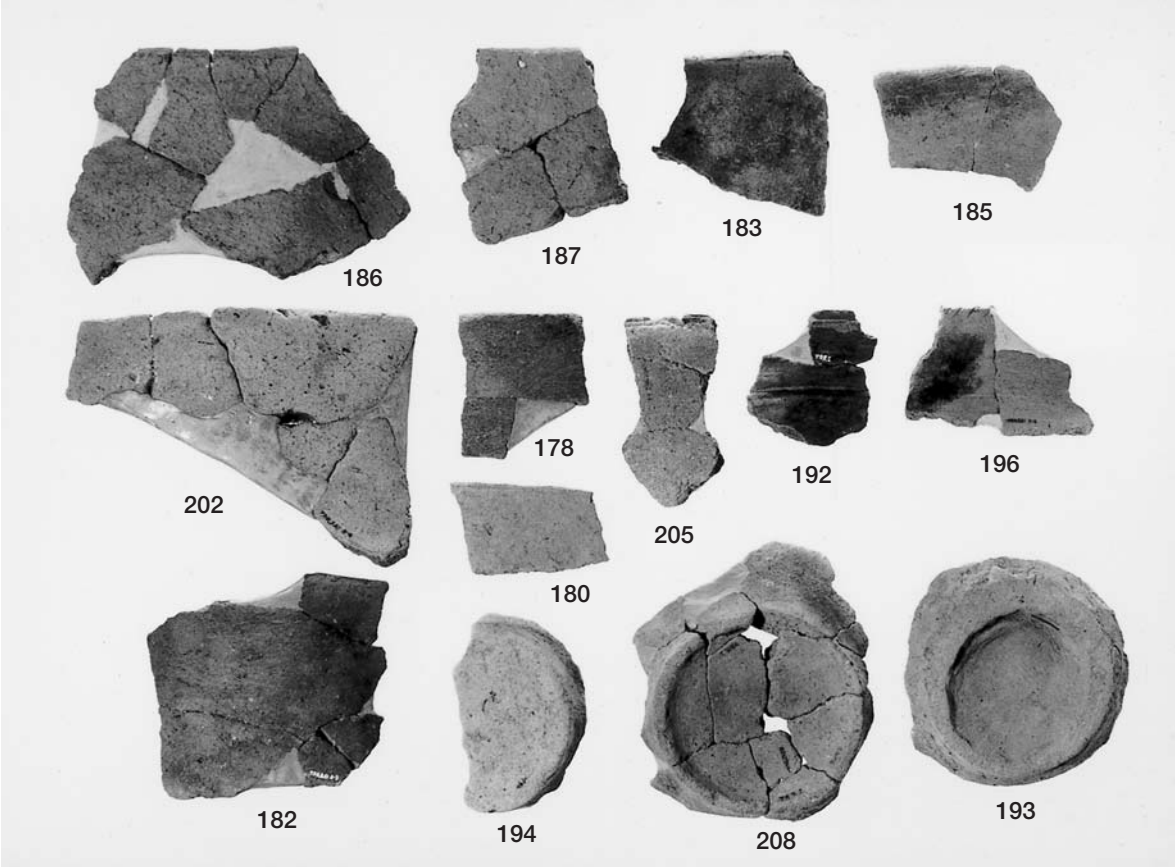


G区出土遺物（ホルンフェルス製石器）

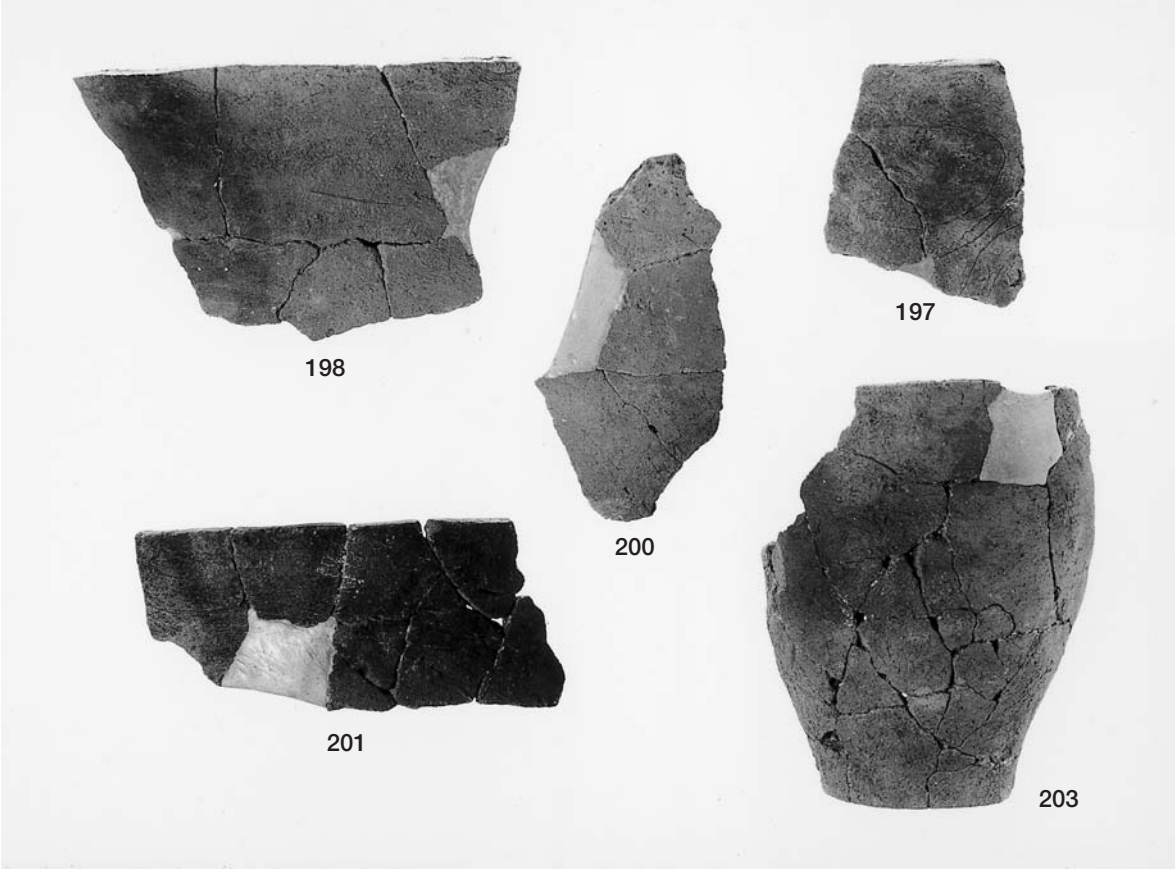


G区出土遺物（流紋岩製石器）

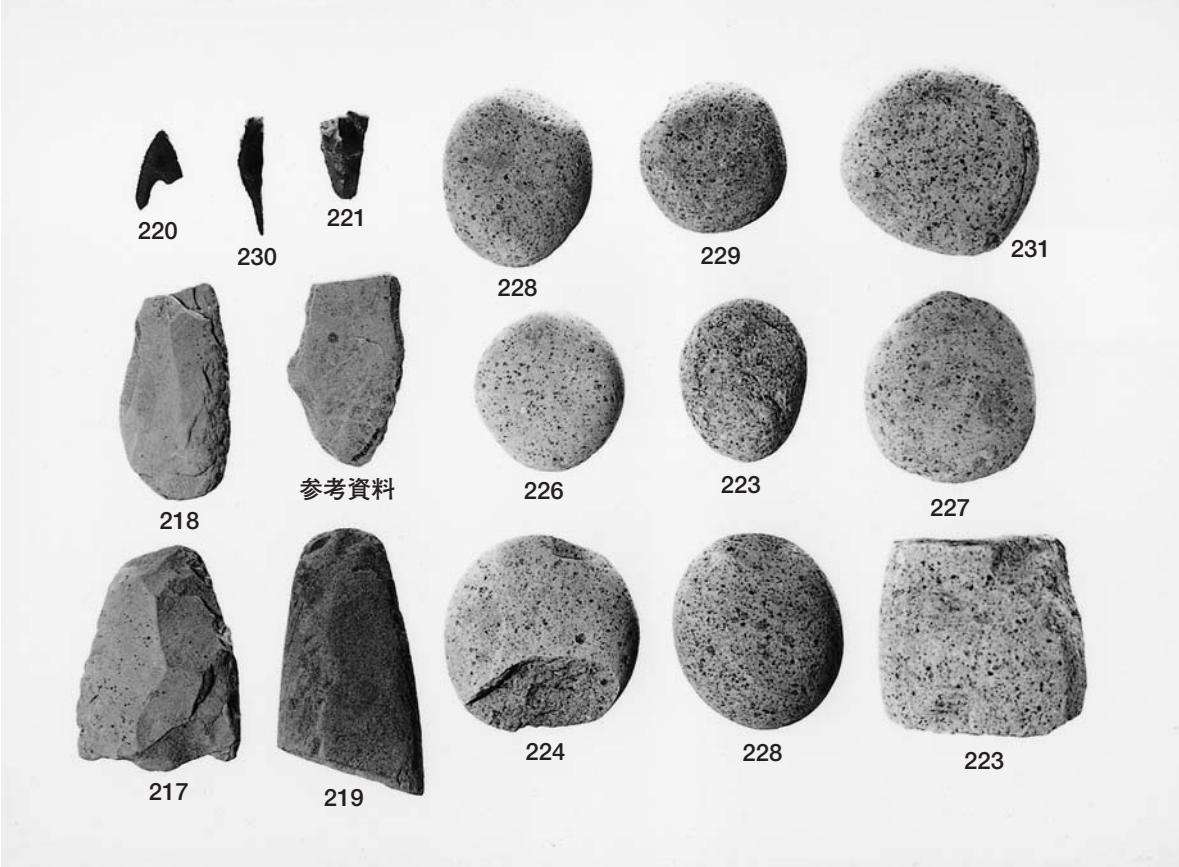
G区出土遺物（凹石）



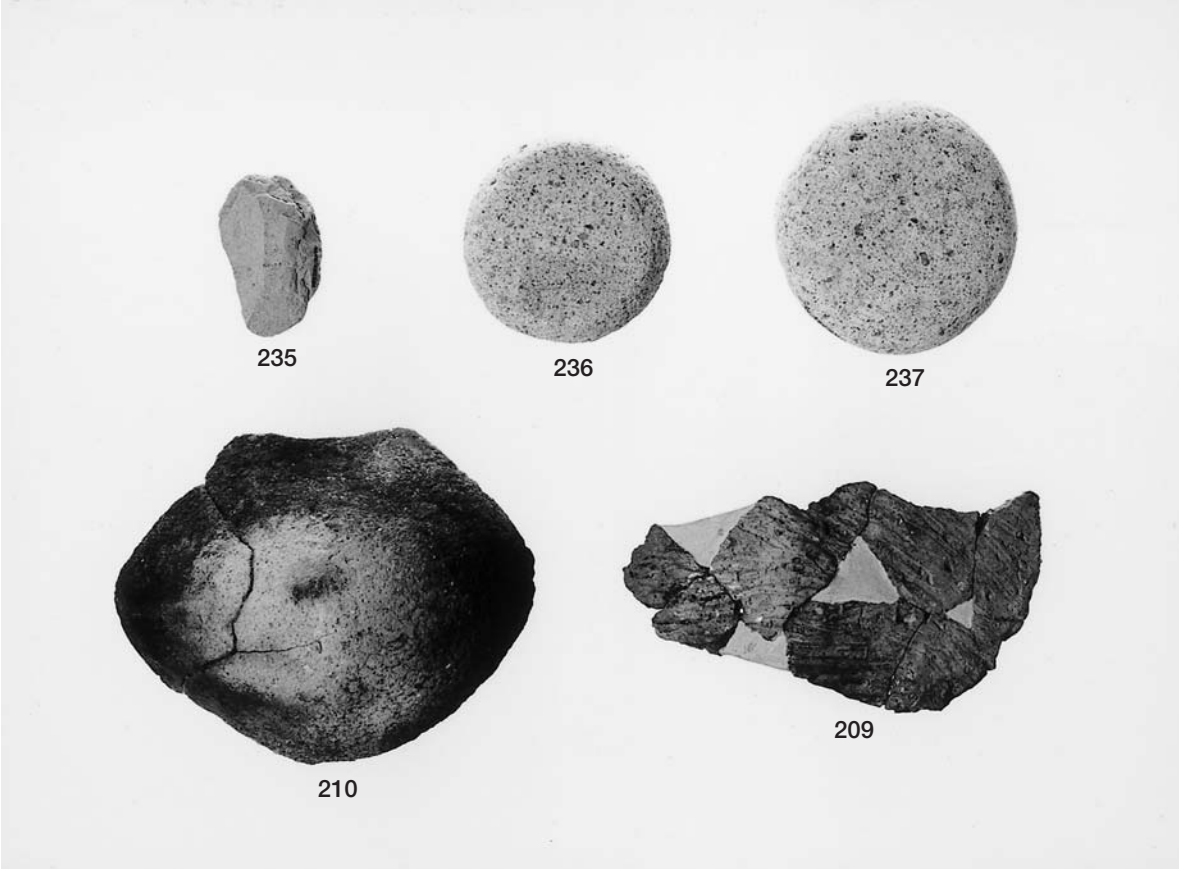
Ⅰ区出土遺物（土器）



Ⅰ区出土遺物（土器）

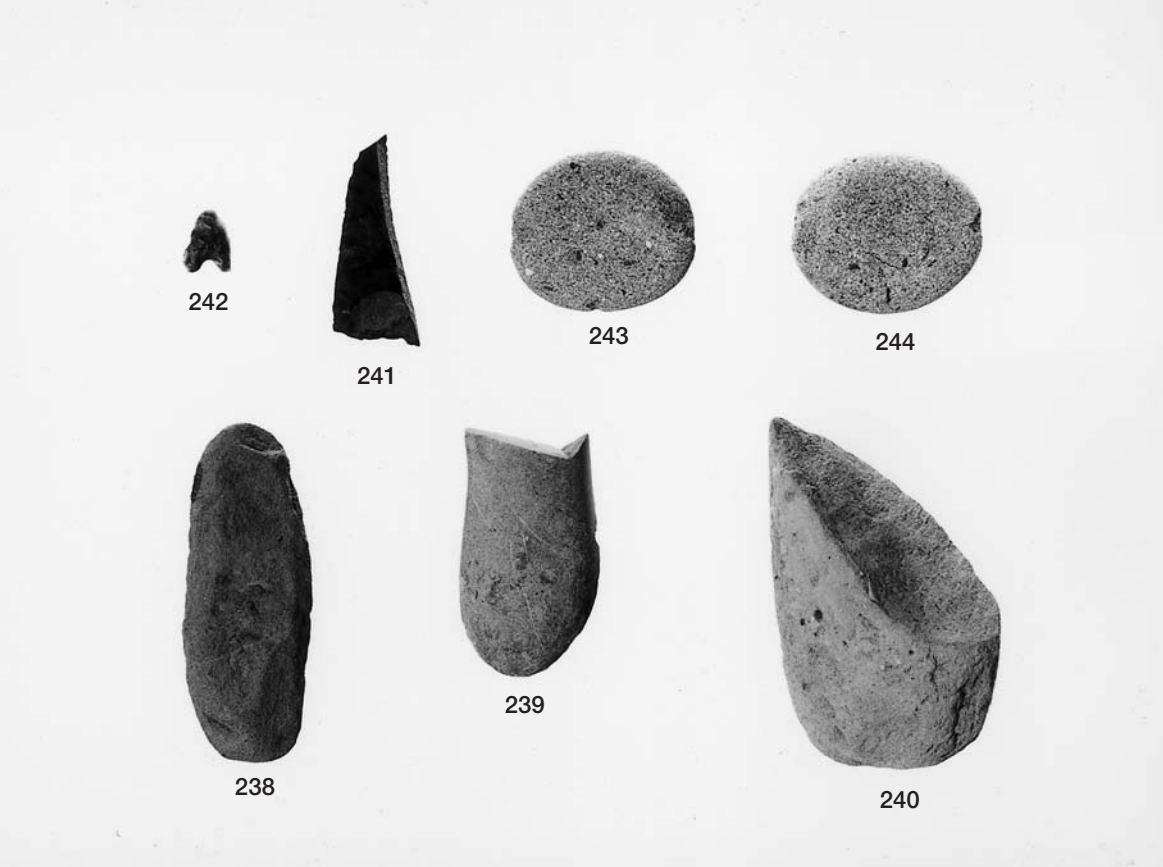


Ⅰ区ＳＡ１・２出土遺物（石器）



Ⅰ区ＳＡ３出土遺物（土器・石器）

Ⅰ区出土遺物（片口鉢・土師皿）



Ⅰ区出土遺物（石器）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こくぞうめんいせき　　あかいし・てんじんもといせき
書名	虚空蔵免遺跡　　赤石・天神本遺跡
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	27
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第122集
執筆･編集担当者	島木良浩・興梠慶一・今塩屋毅行・立神勇志
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	宮崎県宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地
発行年月日	２００６年３月９日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
虚空蔵免遺跡（こくぞうめんいせき）	宮崎県（みやざきけん）児湯郡（こゆぐん）川南（かわみなみ）町（ちょう）大字（おおあざ）川南字鵜戸（かわみなみあざうど）ノ本（のもと）・赤石（あかいし）・天神（てんじん）本（もと）	32度 12分 47秒 付近	131度 29分 30秒 付近	平成15年 11月10日 ～ 平成16年 １月26日	900㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
赤石・天神本遺跡（あかいし・てんじんもといせき）	宮崎県（みやざきけん）児湯郡（こゆぐん）川南（かわみなみ）町（ちょう）大字（おおあざ）川南字鵜戸（かわみなみあざうど）ノ本（のもと）・北原（きたはら）	32度 12分 43秒 付近	131度 29分 20秒 付近	平成15年 ９月26日 ～ 平成15年 12月25日	3,160㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
虚空蔵免遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代	礫群 炉穴 集石遺構	旧石器 早期土器	
赤石・天神本遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中世	礫群 陥し穴状遺構 竪穴住居 集石遺構 竪穴住居	旧石器 草創期土器 後・晩期土器 各種石器 弥生土器・敲石 須恵器・土師器	細石刃核と剥片の接合 隆帯文土器

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第122集

虚空蔵免遺跡

赤石・天神本遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書27

２００６年３月９日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　有限会社　富士写真印刷
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂7418-2番地
TEL 0985(74)2179　　FAX 0985(74)3066